

紀要42号

# 研 究 報 告 書

平成17年3月

尼崎市立教育総合センター

## はじめに

近年のわが国では、ほぼ連続的に教育改革関連の様々な施策が展開されている。その背景には、解決・克服すべき多くの課題がある。たとえば、グローバル化の進展がもたらす世界規模の大競争の激化があり、わが国の産業界が国際的に生き残れるかどうかの危機に立たされている状況にあること。また、国内の経済状況は、バブル経済の崩壊以後、潜在力を生かせず長引く不況から脱却できないでいること。高い倫理観が求められる指導者層における責任感、規範意識の低下とリーダーシップの欠如が見られる現象の生起。フリーターやニートに代表される、若者の夢や希望を育てにくい閉塞感に支配された社会の雰囲気などなどである。

それらは、学校教育においても学習意欲や学力の低さ、不登校児童・生徒の出現数にも現れているとも言われている。本市においてもこれらの事象は、学校教育の課題として大きくのしかかっている。学校教育に多くの期待がよせられるゆえんである。

かくして、今日のように変化の激しい社会においては、学校で学んだ知識のみで社会生活を営むのではなく、子どもたち一人ひとりが自ら個性を発揮し、困難な場面に立ち向かい、未来を切り拓いていく力の育成が求められる。すなわち、「生きる力」の育成である。「生きる力」は、他人を思いやる心や感動する心などの「豊かな人間性」、たくましく生きるための「健康や体力」と、「確かな学力」によって形成されるとされている。その子どもたちの「生きる力」は、学校だけでなく、家庭や地域と一緒に育むものである。

しかし、とりわけ学校教育では、社会に出た後も生涯学び続けることができる基礎的な資質や能力を育むことを重視する必要がある。それは、基礎的・基本的な「知識や技能」に加えて、「学ぶ意欲」や「思考力・判断力・表現力など」に結びつく幅広い学力、すなわち「確かな学力」を育成することで実現されるであろう。

課題の解決策は、一朝一夕の営みで生まれるものではない。解決の糸口を発見しようとする実践や研究は、遅々として派手さはないかも知れない。けれども私たちは、子どもたちの学びを育み、指導する教員に確実な支援をするために、日々地道に研究を重ねたいと思う。

今年度も多くの現職教員が、研究員として実践・研究を積み上げてきた。その成果がこの冊子に集結している。内容は各分野にわたっている。より多くの方々に目を通していただき、教育改革の一助にしていいただければ幸甚である。

最後に、ご指導・ご鞭撻をいただいた先生方をはじめ、研究にご理解ご尽力を賜った多くの方々や研究員の先生方に厚く御礼を申しあげる。

平成17年3月

教育総合センター所長

倉橋 忠

## 目 次

1	心の教育	不登校児童生徒への援助・指導 - 別室指導の実態調査 -	1
2	学級経営	心を育てる学級経営 - 「学校・園が楽しい」学級づくり -	17
3	国語科教育	確かな言葉の力を育てる指導の研究 - 「書くこと」を意識した授業へのアプローチ -	37
4	中学校理科教育	授業に活用できるコンピュータ教材の研究 - 理科好きな生徒を育むために -	57
5	英語科教育	小学校英語活動の研究 - 学級担任からのアプローチ -	75
6	小学校情報教育	教師が身につけたい情報活用スキルの研究	93
7	中学校評価・評定	学校情報処理システムの考察 - 中学校での学習評価を取り巻く影響に対する質的調査 -	111
_____ 中 間 報 告 _____			
8	小学校総合的学習	「生きる力」を育てる総合的な学習の創造 - 子どもの変化をよみとる評価資料の作成と活用 -	123
9	算数・数学科教育	小・中連携による算数・数学の基礎力定着 - 小・中学校の図形指導における基礎力の定着率調査 -	133
10	デジタルコンテンツ活用	デジタルコンテンツを活用した 効果的な指導方法の研究	141

## 不登校児童生徒への援助・指導

### 別室指導の実態調査

指導主事 大石 泰樹  
研究員 柏木 由起子（大庄小）  
" 馬場 直子（武庫東小）

#### 【内容の要約】

不登校児童生徒の解消にむけた手立ての一つである別室指導は、不登校児童生徒が教室復帰するための段階的手立てとして、家庭と教室をつなぐ役割を果たしている。そこで、本研究は不登校児童生徒の予防及び回復過程で、家庭と教室をつなぐ役割を果たしている別室指導の在り方を探ろうとするものである。

1年目は文献による再登校に向けての方策と別室指導者の役割及び本市で意欲的に別室運営を行っている中学校の実践例から別室指導の在り方を探ってきた。

本年度は阪神間の公立小中学校に対してアンケート調査を実施し、別室の支援の実態を探る。

キーワード：不登校，別室登校，別室指導者の状況，通室生の状況，教室復帰

1	はじめに	1
2	調査の概要	1
3	調査結果	2
4	調査のまとめと今後の課題	15

## 1 はじめに

文部科学省の平成 16 年度「学校基本調査」にもとづく報告「生徒指導上の諸問題の現状(速報)」によると、平成 15 年度間の全国の小中学校において 30 日以上欠席をした不登校の児童生徒数は、126,212 人にのぼった。その約 8 割は中学生である。不登校の出現率は、中学校で 37 人に 1 人、小学校では 300 人に 1 人にあたる。

小中学校ともに前年度の数を下回り、2 年連続の減少となったが、依然として 12 万人を超える児童生徒が不登校となっており、大きな学校教育上の課題となっている。

また、神経症的な不登校だけでなく「遊び・非行」、「学力不振」、「ネグレクトを含む虐待」、「軽度発達障害」を伴う不登校など、態様が多様化・複合化してきており、きめ細かく柔軟な対応が求められているのが現状である。

このような状況の中、学校においては種々取組が行われているが、その一つとして別室指導がある。不登校児童生徒の解消にむけた手立ての一つである別室指導は、不登校児童生徒が教室復帰するための段階的手立てとして、家庭と教室をつなぐ役割を果たしている。そこで、本研究は不登校児童生徒の予防及び回復過程で、家庭と教室をつなぐ役割を果たしている別室指導の在り方を探ろうとするものである。1 年目は文献による再登校に向けての方策と別室指導者の役割及び本市で意欲的に別室運営を行っている中学校の実践例から別室指導の在り方を探ってきた。本年度は阪神間の公立小中学校に対してアンケート調査を実施し、別室の支援の実態を探る。

## 2 調査の概要

### 2 - 1 調査研究の目的

不登校児童生徒の予防及び回復過程で、家庭と教室をつなぐ役割を果たしている別室（ここでいう別室とは、不登校及び不登校傾向の児童生徒にとっての教室以外の学校での「居場所」）について、その設備面や人的面および日常の別室活動等の運営面の実態を明らかにする。

### 2 - 2 調査対象

阪神地区（6 市 1 町）の公立小中学校 2 3 4 校を対象とする。

### 2 - 3 調査方法

平成 15 年 1 2 月上旬に各市町の教育総合センターを通じて調査票を一斉に配布し、平成 16 年 1 月末に 2 3 4 校（全校）から回答があった。次項に記載する調査 A、調査 B、調査 C の 3 種類の調査を実施した。

### 2 - 4 調査内容

調査内容は次項に記載する調査 A、調査 B、調査 C の 3 種類の調査を実施した。

(1) 記入日・記入者

(2) 市町名・校種・学校名・児童生徒数・教員数

(3) 平成 14 年度学校基本調査における不登校児童生徒数

#### 基礎調査【調査 A】

① 別室の有無（保健室・相談室・空き教室・その他）

別室開設希望の有無 [ 別室を開設していない場合 ]

別室を開設できない理由 [ 別室開設希望は有るが、開設できていない場合 ]

別室が必要でない理由 [ 別室開設希望が無い場合 ]

#### 運営方針等調査【調査 B】

2	別室の管理運営主体
3	設置している備品と必要性はあるがない(または不十分な)備品
4	別室指導者の状況
5	運営の中心となる対象
6	運営方針として重視していること
7	教室復帰に対する方針
8	日常の活動内容
9	通室生に対する外部機関との連携
10	入室の経路
11	別室の1週間あたりの開設日数・開設時間

#### 通室生現状チェック【調査C】

12	児童生徒の男女別, 学年の内訳
13	通室生の不登校タイプ
14	別室に通い始めた時期
15	通室状況
16	授業等への参加状況
17	児童生徒の活動状況の変化
18	別室に来なくなった者の有無・理由

### 3 調査結果

#### 基礎調査【調査A】

##### 1 別室の有無

阪神地区の小学校・中学校234校(無回答1校)の15年度別室開設の有無は全体でみると、「開設している」、「開設していない」の割合に大差はみられない。

しかし、小学校、中学校別にみると、小学校は158校中「開設している」学校は3割台、「開設していない」学校は6割台であり、小学校では別室を開設していない割合が高い。これは、半数の小学校で不登校児童がいないことによると思われる。

それと比較して、中学校は75校中約9割の学校に別室が設置されている。(中学校には不登校生徒のいない学校はない)校種別にみると大きな差があることがわかる。(表1)

表1 別室の有無

	開設している	開設していない	合計
小学校数	55	103	158
(%)	34.8%	65.2%	100%
中学校数	66	9	75
(%)	88%	12%	100%
合計	121	112	233
(%)	51.9%	48.1%	100.0%

## 別室開設の場所

別室として使用されている場所が多いのは、小学校では保健室を使用している割合が最も多く5割を占め、続いて相談室である。

中学校では相談室が最も多く5割を占め、次いで保健室である。また、別室用に整備されている余裕教室があり、相談室と合すると7割近くの中学校が保健室以外に別室をもっていることがわかる。(表1-1)

表1-1 別室開設の場所

開設場所	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1)別室用に整備されている余裕教室	3	4.3%	11	12.9%
(2)余裕教室	5	7.2%	5	5.9%
(3)保健室	38	55%	18	21.2%
(4)相談室	14	20.2%	43	50.6%
(5)その他	9	13%	8	9.4%
合 計	69	100%	85	100%

(複数回答)

## 別室開設希望の有無 [ 別室を開設していない場合 ]

現在開設していないが別室は必要かどうかを尋ねたものであるが、小学校、中学校合せて約8割が「別室が必要」と考えており、約2割が「必要ない」と考えている。(表1-2)

表1-2 別室開設希望の有無(別室を開設していない場合)

別室は必要と思うか		(1)思う		(2)思わない		合計
		小学校	中学校	小学校	中学校	
	小学校	78	78.8%	21	21.2%	99
	中学校	7	77.8%	2	22.2%	9
	合計	85	78.7%	23	21.3%	108

(有効回答数)

## 別室を開設できない理由 [ 別室開設希望は有るが、開設できていない場合 ]

現在、別室は開設していないが、別室が必要だと考えている小学校・中学校85校で、別室を開設する希望は有るが開設できていない理由を小学校と中学校で比べてみると、小学校は「不登校生がいらない」が約半数を占め、続いて「別室を運営する者がいない」「別室を行う場所がない」が2割台となっている。

中学校では「別室を運営する者がいない」が半数であり、「別室を行う場所がない」が2割である。

・別室開設希望はあるが、開設しなかった理由(複数回答)

開設しなかった理由	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) 別室を行なう場所がない	20	24.5%	2	22.2%
(2) 別室を運営する者がいない	21	25.6%	5	55.6%
(3) 職員の理解が得られない	1	1.2%	1	11.1%
(4) 別室の運営方法がわからない	2	2.4%	0	0.0%
(5) 不登校生がいない	37	45.1%	0	0.0%
(6) 現在開設準備をしている	1	1.2%	1	11.1%
合 計	82	100.0%	9	100.0%

別室が必要でない理由 [ 別室開設希望が無い場合]

別室が必要でないと考えている23校において、別室が必要でない理由は、中学校では「別室が溜まり場になるから」「別室では十分な配慮ができないから」である。小学校は「別室では十分な配慮ができないから」「別室より有効な手段があるから」「教室に行くのが当たり前だから」である。

・別室が必要でない理由(複数回答)

別室が必要でない理由	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) 子どもの怠け心を助長するから	1	7.1%	0	0.0%
(2) 別室が溜まり場になるから	2	14.3%	2	66.7%
(3) 教室に行くのが当たり前だから	3	21.4%	0	0.0%
(4) 別室では十分な配慮ができないから	5	35.8%	1	33.3%
(5) 他の子どもに示しが見つからないから	0	0.0%	0	0.0%
(6) 別室より有効な手段があるから	3	21.4%	0	0.0%
合 計	14	100.0%	3	100.0%

運営方針等調査【調査B】

2 別室の管理運営主体

小学校で最も多いのが「養護教諭が運営」が4割であり、次いで「学校全体で運営」が2割強である。小学校は養護教諭の比重が大きく、その運営に深く関わっている。

中学校では「学校全体で運営」「学年で運営」「校務分掌上の係が運営」がそれぞれ2割台である。中学校で特徴的なのは生活指導補助員等を活用しながら運営が行われていることである。(表2)

**表2 別室の管理運営主体**

	(1)学校全体 で運営	(2)学年で 運営	(3)委員会が 運営	(4)校務分 掌上の係 が運営	(5)養護教 諭が運営	(6)補助員 が運営	(7)その他
小学校 (%)	14 26.0%	2 3.7%	1 1.8%	4 7.4%	22 40.7%	3 5.6%	8 14.8%
中学校 (%)	16 25.0%	17 26.5%	1 1.6%	15 23.4%	6 9.4%	9 14.1%	0 0.0%

**3 別室に設置している備品と必要性はあるが現在はない(または不十分な)備品**

まず現有備品では、「机」「椅子」がほとんどの別室にあることがわかる。ついで「仕切り」、「カーテン」、「応接セット」と続く。逆に少ないものは「飼育生物」、「軽スポーツ等の遊具」、「テレビ・ビデオ」である。

また、必要性はあるがない(または不十分な)備品では多い方から、「パソコン」、「書籍」、「テレビ・ビデオ」、「仕切り」などで、これらの設置ニーズは高い。(表3)

**表3 設置している備品と必要性はあるがない(または不十分な)備品**

	(1)仕切 り	(2)じゅう たん	(3)応接 セット	(4)机	(5)椅 子	(6)カー テン	(7)テレ ビ・ビデ オ	(8)書籍	(9)パソ コン	(10)箱 庭	(11)軽ス ポーツ等 の遊具	(12)ゲー ム類	(13)飼 育生物	(14)栽 培植物
現有して いる備品	52.1%	24.0%	43.0%	90.1%	87.6%	49.6%	8.3%	38.8%	14.0%	14.9%	5.8%	19.0%	3.3%	9.1%
必要性が あるがな い(または 不十分 な)備品	16.5%	14.9%	9.9%	4.1%	5.0%	6.6%	19.8%	25.6%	33.1%	12.4%	9.9%	13.2%	6.6%	13.2%

**4 別室指導者の状況**

別室指導の中心となる主な指導者とその人数、指導時間、指導形態をまとめたものである。

小学校では、圧倒的に養護教諭の関わりが多く半数近くを占め、次いで担任である。児童と関わる人数は「1人」が半数以上であり「指導時間は特に設定していない」割合が6割を超えている。指導形態は「あえて指導者は付き添わず、通室生が自学自習を行う」が3割を超えている。次いで「空いている教員が対応している」割合が3割である。

中学校では、主たる指導者は、不登校担当教員、通室生の学年教員、担任、養護教諭、補助員等多岐にわたりそれぞれ2割弱で分散している。指導人数で最も多いのは「5人以上」が3割を超え複数で生徒に関わっていることが分かる。次いで「1人」が2割強である。指導時間については、「指導時間は特に設定していない」割合が5割である。指導形態で最も多いのは「空いている教員が対応している」が3割である。

また、「別室専任の指導者を配置している」が2割ある。これは生活指導補助員、心の教室相談員が配属されている学校では、彼らが別室専任の指導者の働きをしていることが見えてくる。(表

4 )

**表4 別室指導者の状況**

**・中心となる主な指導者**

	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1)担任	13	16.9%	18	16.1%
(2)養護教諭	35	45.5%	20	17.9%
(3)不登校担当教員	5	6.5%	21	18.8%
(4)通室生の学年教員	1	1.3%	19	17.0%
(5)全教員	5	6.5%	8	7.1%
(6)補助員(生活指導補助員,心の教室相談員等)	6	7.8%	19	17.0%
(7)学生・院生	2	2.6%	2	1.8%
(8)学生以外のボランティア	0	0.0%	0	0.0%
(9)その他	10	13.0%	5	4.5%
合 計	77	100.0%	112	100.0%

**・別室指導者の人数**

	(1) 0人	(2) 1人	(3) 2人	(4) 3人	(5) 4人	(6) 5人以上
小学校	8	29	8	4	0	4
(%)	15.1%	54.8%	15.1%	7.5%	0.0%	7.5%
中学校	1	15	13	10	4	21
(%)	1.6%	23.4%	20.3%	15.6%	6.3%	32.8%

**別室の指導時間**

	小学校	(%)	中学校	(%)
午 前	5	9.1%	13	19.4%
午 後	5	9.1%	4	6.0%
終日付き添い指導	10	18.2%	17	25.4%
特に設定していない	35	63.6%	33	49.3%

**・別室の指導形態(複数回答)**

	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) 別室専任の指導者を配置している	6	10.3%	20	23.5%
(2) 教員でローテーション等を組み,対応している	2	3.4%	9	10.6%
(3) 空いている教員が対応している	17	29.4%	28	33.0%

(4) ボランティアが付き添いで対応している	1	1.7%	3	3.5%
(5) あえて指導者は付き添わず、通室生が自学自習を行う	20	34.5%	16	18.8%
(6) その他	12	20.7%	9	10.6%
合 計	58	100.0%	85	100.0%

## 5 運営の中心となる対象

小学校は「個別指導を中心とした運営」が約8割である。中学校は「個別指導を中心とした運営」「学年を区別せず合同で運営」「各学年中心の運営」にほぼ3分される。(表5)

表5 運営の中心となる対象

	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) 各学年中心の運営	5	8.9%	17	26.2%
(2) 学年を区別せず合同で運営	5	8.9%	25	38.5%
(3) 個別指導を中心とした運営	44	78.6%	23	35.3%
(4) その他	2	3.6%	0	0.0%
合 計	56	100.0%	65	100.0%

## 6 運営方針として重視していること

別室の運営方針として考えられる8項目を提示し、重視している順に回答を求めた結果である。数字が大きい程重視していることを示す。

運営方針として重視していることは、小学校では「教室復帰に向けた準備を整える」が第1位で、「自己の自信を回復させる」が第2位、「対人関係の能力を伸ばす」が第3位と続く。「自主性・自立性を育てる」(第8位)はかなり下位である。

中学校では、「教室復帰に向けた準備を整える」が第1位で小学校と同じであるが、「生活習慣の安定を図る」が第2位となり、「対人関係の能力を伸ばす」が第3位と続く。「自主性・自立性を育てる」(第8位)はかなり下位である。(表6)

表6 運営方針として重視していること

	小学校 (順位)	中学校 (順位)
(1) 自主性・自立性を育てる	16	26
(2) 集団参加の力を育てる	40	28
(3) 対人関係の能力を伸ばす	45	58
(4) 生活習慣の安定を図る	29	61
(5) 自己の自信を回復させる	55	45
(6) 教室復帰に向けた準備を整える	81	90

(7) 学習面の遅れがないように指導する	21		26	
(8) 自分をゆっくりと見つめる場を提供する	43		44	
(9) その他	3		6	

(注) 8項目を重視している順に3位まで順位づけをした。1位3点2位2点3位1点とし、その合計をした。点数が高いほど重視していることを表す。

## 7 教室復帰に対する方針

小学校・中学校とも「最終的には教室復帰を目標としているが当面は個々の児童生徒の成長を図るよう指導している」が8割であり運営方針と重なる。(表7)

表7 教室復帰に対する方針

	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) 最初から教室復帰を目指した指導をしている	10	17.9%	4	6.3%
(2) 最終的には教室復帰を目標としているが当面は個々の児童生徒の成長を図るよう指導している	42	75.0%	55	85.9%
(3) 個々の児童生徒の成長を図ることが目標で、その結果、教室復帰を選んでも別の道を選んでも良いと考えている	3	5.4%	5	7.8%
(4) 教室を意識させることはむしろマイナスと考えており、教室復帰を意識した指導は基本的に行わない	0	0.0%	0	0.0%
(5) その他	1	1.7%	0	0.0%

## 8 日常の活動内容

教室内でどのような活動をどの程度しているかを示したものである。ただし、通室者が2人以下の別室も存在し、これらの別室では集団活動が成立しにくい状況があると考えられる。

ほぼ毎日行っている活動では、「個人での学習活動」が6割、「指導員との会話・相談」が5割であり、この2つの活動を基本として日常の活動が行われていることがわかる。カウンセリングは6割が1ヶ月以内に1度は受けている(表8)

表8 日常の活動内容

	有効回答数	ほぼ毎日行っている	週2~3日程行う	週1回程行う	2~3週間に1度程行う	ほとんどしていない
(1) 個人での学習活動	112	63.4%	17.0%	8.0%	3.6%	8.0%
(2) 個人での体育活動	107	2.8%	1.9%	12.1%	7.5%	75.7%
(3) 個人での創作活動	108	7.4%	13.0%	14.8%	18.5%	46.3%
(4) 集団での軽スポーツ活動	107	3.7%	5.6%	6.5%	6.5%	77.6%

(5) 集団でのゲーム・レクリエーション	107	1.9%	9.3%	4.7%	7.5%	76.6%
(6) 集団での調理体験	106	0.0%	0.0%	0.9%	8.5%	90.6%
(7) 集団での野外体験	106	0.0%	0.9%	1.9%	7.5%	89.6%
(8) 指導員との会話・相談	107	46.7%	19.6%	9.3%	8.4%	15.9%
(9) カウンセリングまたはセラピー	108	5.6%	3.7%	34.3%	18.5%	38.0%
(10) 飼育・栽培活動	108	2.8%	1.9%	4.6%	8.3%	82.4%
(11) その他	29	3.4%	6.9%	0.0%	3.4%	86.2%

### 9 通室生に対する外部機関との連携

小学校では、「教育相談機関との連携」が4割で最も多く、次いで「スクールカウンセラーとの連携」が2割である。

中学校では、「スクールカウンセラーとの連携」が4割で最も多く、次いで「適応指導教室との連携」が2割5分、「教育相談機関との連携」が1割5分である。（表9）

表9 通室生に対する外部機関との連携（複数回答）

	小学校（%）		中学校（%）		合計（%）	
(1) 適応指導教室等との連携	7	8.8%	34	25.4%	41	19.2%
(2) 教育相談機関との連携	31	38.8%	21	15.7%	52	24.3%
(3) こどもセンター等との連携	5	6.2%	5	3.7%	10	4.6%
(4) 病院との連携	5	6.2%	8	6.0%	13	6.1%
(5) 幼小中学校間との連携	3	3.7%	6	4.5%	9	4.2%
(6) スクールカウンセラーとの連携	16	20.0%	55	41.0%	71	33.2%
(7) その他公的機関との連携	3	3.8%	3	2.2%	6	2.8%
(8) NPO及び民間施設との連携	2	2.5%	2	1.5%	4	1.9%
(9) その他	8	10.0%	0	0.0%	8	3.7%
合計	80	100.0%	134	100.0%	214	100.0%

### 10 入室の経路

小学校、中学校ともに、保護者、本人、担任からの申し出が上位を占める。（表10）

表10 入室の経路（複数回答）

	小学校（%）		中学校（%）	
(1) 保護者からの申し出により入室させている	35	35.0%	45	27.6%
(2) 担任の申し出により入室させている	23	23.0%	38	23.3%
(3) 学年からの申し出により入室させている	4	4.0%	24	14.7%

(4) スクールカウンセラーからの申し出により入室させている	2	2.0%	14	8.6%
(5) 外部機関(適応指導教室等)からの申し出により入室させている	1	1.0%	4	2.5%
(6) 本人からの申し出により入室させている	32	32.0%	34	20.9%
(7) その他	3	3.0%	4	2.5%
合 計	100	100.0%	163	100.0%

### 11 別室の1週間あたりの開設日数・開設時間

5日開設が最も多く小学校は半数，中学校は8割近くである。

開設時間では，小学校は「特に設定していない」が5割台で最も多く，次いで「終日付き添い指導」が3割台である。

中学校は「終日付き添い指導」が6割で最も多く，次いで「特に設定していない」が2割である。

(表11)

表11 別室の1週間あたりの開設日数・開設時間

#### ・開設日数

	5日	4日	3日	2日	1日	その他
小学校	27	2	3	1	3	19
(%)	49.1%	3.6%	5.5%	1.8%	5.5%	34.5%
中学校	50	2	1	4	4	5
(%)	75.8%	3.0%	1.5%	6.1%	6.1%	7.6%

#### ・開設時間

	小学校	(%)	中学校	(%)
午 前	5	9.6%	10	15.2%
午 後	2	3.8%	1	1.5%
終日付き添い指導	17	32.7%	40	60.6%
特に設定していない	28	53.8%	15	22.7%
合 計	52	100.0%	66	100.0%

## 通室生現状チェック【調査C】

### 12 別室に通室した児童生徒の男女別，学年の内訳

2学期末現在で別室に通室した児童生徒の男女別，学年の内訳を示したものである。まず，小学校と中学校を比べてみると中学生が約8割と大部分を占めている。

次に、中学校を学年別にみると中学3年生が最も多く、次いで中学2年生、中学1年生と続く。増加の変化をみると、1年生から2年生で2.3倍に急増し、2年生から3年生で1.3倍に増えている。

更に、この変化を男女別にみると、男子では1年生から2年生で2.8倍に急増し、2年生から3年生で1.8倍に増えている。女子では1年生から2年生で2.1倍に急増し、2年生から3年生は横ばいである。男女別にみると、4:6の割合で女子が多い。

次に、小学校では学年が上がるにつれて増加の傾向がみられ、6年生が最も多い。男女別にみると、およそ4:6の割合で女子が多い。(表12)

**表12 別室に通室した児童生徒の男女別、学年の内訳**

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	小合計	中1	中2	中3	中合計	小中合計
男子	3	4	0	7	6	13	33	15	43	76	134	167
(%)	9.1%	12.1%	0.0%	21.2%	18.2%	39.4%	100%	11.2%	32.1%	56.7%	100%	
女子	2	4	7	10	17	18	58	39	82	84	205	263
(%)	3.4%	6.9%	12.1%	17.2%	29.3%	31.1%	100%	19.0%	40.0%	41.0%	100%	
合計	5	8	7	17	23	31	91	54	125	160	339	430
(%)	5.5%	8.8%	7.7%	18.6%	25.3%	34.1%	100%	15.9%	36.9%	47.2%	100%	

**13 通室生の不登校タイプ**

文部科学省の分類(不登校の態様区分)に従って、児童生徒を分類したものである。

小学生では、「不安など情緒的混乱の型」が最も多く、次いで「複合型」、「学校生活に起因する型」と続く。

中学生でも、「不安など情緒的混乱の型」が最も多く、次いで「複合型」、「学校生活に起因する型」である。小学校・中学校とも同じ傾向である。「遊び・非行型」は少ない。(表13)

**表13 通室生の不登校タイプ**

	(1) 学校生活起因型	(2) 遊び・非行型	(3) 無気力型	(4) 情緒混乱型	(5) 意図的拒否型	(6) 複合型	(7) その他
小学校	36	3	23	105	13	61	14
中学校	82	16	38	115	16	91	9
合計	118	19	61	220	29	152	23

(注) 7項目を多いものから順に3位まで順位づけをした。1位3点2位2点3位1点とし、その合計をした。点数が高いほど多いことを表す。

**14 別室に通い始めた時期**

小学生、中学生ともに多い時期は4月と9月である。(表14)

**表14 別室に通い始めた時期**

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小学校	17	15	12	12	1	26	19	15	15
中学校	117	61	50	35	1	64	47	54	40
合計	134	76	62	47	2	90	66	69	55

**15 通室状況**

現在別室に通室している子どもたちの通室状況についてまとめたものである。

小学校では、「通室当初から、現在までずっと通室状況は概ね良好である」が最も多く、次に「通室当初から来たり来なかつたりを繰り返している」である。

中学校では、「通室当初から来たり来なかつたりを繰り返している」と「通室当初から、現在までずっと通室状況は概ね良好である」がそれぞれ3割である。（表15）

**表15 通室状況**

	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) 通室当初から、現在までずっと通室状況は概ね良好である	26	32.9%	97	32.3%
(2) 通室当初は、来たり来なかつたりだったが現在は安定した通室状況である	11	13.9%	26	8.7%
(3) 通室当初は、安定した状況だったが、現在はときどきしか来ない	7	8.9%	29	9.7%
(4) 特定の時間帯だけ通室している	10	12.7%	34	11.3%
(5) 通室当初から来たり来なかつたりを繰り返している	17	21.5%	99	33.0%
(6) その他	8	10.1%	15	5.0%
合計 (有効回答数)	79	100.0%	300	100.0%

**16 授業等への参加状況**

現在別室に通室している子どもたちの授業等への参加状況についてまとめたものである。

小学校では、「行事には通っている」が3割で最も多いが、「ほとんどの授業に通っている」と「特定の授業には通っている」をあわせると3割5分の不登校児童が授業に参加できている。「別室しか通っていない」は2割5分である。

中学校では、「別室しか通っていない」が半数以上を占めている。次いで「行事には通っている」が2割、「ほとんどの授業に通っている」と「特定の授業には通っている」をあわせると2割の不登校生徒が授業に参加できている。（表16）

**表16 授業等への参加状況(人数)**

	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) ほとんどの授業に通っている	15	20.0%	21	7.1%
(2) 特定の授業には通っている	11	14.7%	36	12.2%
(3) 行事には通っている	21	28.0%	61	20.6%
(4) 別室しか通っていない	18	24.0%	157	53.0%
(5) その他	10	13.3%	21	7.1%
合 計 (有効回答数)	75	100.0%	296	100.0%

### 17 児童生徒の活動状況の変化

小学校・中学校合計であるが、「かなりあてはまる」と「わりとあてはまる」をあわせてみると、「一人で読書や学習などの活動ができるようになった」が7割で最も多く、次いで「学習について指導者に質問したり相談したりできるようになった」が5割、「特定の通室児童生徒と会話ができるようになった」が5割である。

反対に、あてはまらない項目は、「一人で(又は指導員と)スポーツ活動に取り組める」、「集団でのスポーツ活動に参加できるようになった」、「みんなと相談しながら学習ができる」などである。(表17)

表17 児童生徒の活動状況の変化

	かなりあてはまる	わりとあてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
(1) 一人で読書や学習などの活動ができるようになった	43 38.4%	36 32.1%	15 13.4%	18 16.1%
(2) 学習について指導者に質問したり相談したりできるようになった	22 19.8%	34 30.6%	33 29.7%	22 19.8%
(3) みんなと相談しながら学習できるようになった	7 6.5%	10 9.3%	23 21.3%	68 63.0%
(4) 一人で(又は指導者と)スポーツ活動に取り組めるようになった	9 8.3%	9 8.3%	13 12.0%	77 71.3%
(5) 集団でのスポーツ活動に参加できるようになった	9 8.2%	9 8.2%	15 13.6%	77 70.0%
(6) 創作活動に意欲的に取り組めるようになった	11 10.1%	24 22.0%	25 22.9%	49 45.0%
(7) 自由時間に友だちと遊ぶことができるようになった	13 11.9%	25 22.9%	21 19.3%	50 45.9%
(8) 特定の通室児童生徒と会話ができるようになった	29 27.6%	22 21.0%	16 15.2%	38 36.2%
(9) 多くの通室児童生徒と会話ができるようになった	18	9	20	58

	17.1%	8.6%	19.0%	55.2%
(10) 別室外の体験活動に積極的に参加できるようになった	6 5.6%	16 14.8%	27 25.0%	59 54.6%
(11) 自分の考えをみんなに伝えることができるようになった	7 6.5%	17 15.7%	41 38.0%	43 39.8%

### 18 別室に来なくなった者の有無・理由

別室に来なくなった学校の割合は、小学校，中学校とも5割を超えている。

次に，別室に来なくなった学校のうち別室に来なくなった理由として，小学校では，「ほぼ継続的に教室（授業）に通えるようになった」が最も多く，半数以上の児童が教室復帰をしている。しかし，「引きこもりにちかい状況である」児童が2割近くいるのも現実である。中学校では，3割が「ほぼ継続的に教室（授業）に通えるようになった」が，引きこもりが2割以上いる。また，「別室とは別の支援機関（適応指導教室等）に通っている」が2割である。（表18）

表18 別室に来なくなった者の有無・理由

#### ・別室に来なくなった者の有無(学校数)

	小学校 (%)		中学校 (%)	
別室に来なくなった者がいる	28	56.0%	39	62.9%
別室に来なくなった者はいない	22	44.0%	23	37.1%
合 計	50	100.0%	62	100.0%

#### ・別室に来なくなった理由

	小学校 (%)		中学校 (%)	
(1) ほぼ継続的に教室(授業)に通えるようになった	29	60.4%	31	30.1%
(2) 断続的だが教室(授業)に通えるようになった	3	6.3%	7	6.8%
(3) 高校(中学)受験を目指して自宅で勉強している	0	0.0%	9	8.7%
(4) 閉じこもりにちかい状況である	8	16.7%	23	22.3%
(5) 別室とは別の支援機関(適応指導教室等)に通っている	1	2.1%	20	19.4%
(6) 不明	1	2.1%	1	1.0%
(7) その他	6	12.5%	12	11.7%
合 計	48	100.0%	103	100.0%

## 4 調査のまとめと今後の課題

今回の調査でわかったことは、小学校では、別室の開設状況は4割弱であり、別室として使用されている場所は、保健室が最も多く開設校中の約半分を占めていたということである。相談室が設置されている学校は開設校中約2割に留まっている。実際に小学校において別室で中心となる指導者は、養護教諭が対応している割合が高く、半分以上を占めており保健室、養護教諭の比重が大きく、その運営に深く関わっていることがわかった。

保健室が利用されている理由として、不登校児童にとって保健室は心理的な安らぎがあり教室とちがってほっとできる居場所であるなど、心のよりどころとしての人と場所の「居場所」となっていることが考えられる。

今後の課題として、多忙な日常業務をこなしながら不登校児童と関わっている養護教諭のみに負担をかけるのではなく、学級担任や関係者と適宜連携を図り、組織的な対応が期待される。

実際の運営面から浮かび上がってくるのは、養護教諭に頼らざるを得ない学級担任制による人的な課題がクローズアップされてくる。別室を開こうと思っても別室を運営する者がいないことが挙げられている。保健室以外で実施している別室の現状は、校長や教頭がみている、空いている教員が対応している、児童がいるにもかかわらず指導者はいないで自学自習をしているという状況であり、不登校児童に寄り添いじっくり関わられる指導者が不足しているということである。小学校では学級担任外の教員がいないため対応に苦慮しているのが分かる。別室指導を効果的に行うために専任の指導者の配置が望まれるところである。

次に、別室登校をしている児童は学級に戻ることができているのかは気にかかる内容であるが、別室しか通っていない児童は2割4分であり、他の児童は別室と教室を行き来しており、なんらかの関わりをもっていることが分かった。復帰率は3割であった。

ただし、教室復帰という行動の変化が別室指導における効果なのか、時間の経過による成長の結果なのか、あるいはその他の要因によるものなのかについては今回の調査では分からない。

中学校では、別室の開設状況は約9割であり、ほとんどの学校で設置されている。(阪神間で不登校生徒がいない中学校はない状況である。)別室として使用されている場所は、相談室が最も多く半分以上を占めており、次いで保健室が2割である。

相談室における別室指導の運営は、多岐にわたっているが、学年単位か学校全体または不登校担当・生徒指導担当が主に運営している。別室で不登校生徒と関わっている指導者は、不登校担当教員・担任・通室生の学年教員等である。運営の実情は、不登校担当教員が空き時間に個別指導を行っている、学年で授業の空きの教員が部屋を覗き、各自の課題を指導している、全教員でローテーションを組み指導にあたっている、指導者は付き添わず自学自習を行っているなど様々であるが、継続的な指導が難しい、通室生との濃密な関わりを持ちにくいなどの問題を抱えている。

今後の課題として、別室指導を効果的に行うために専任の指導者の配置が望まれるとこ

るである。

授業等への参加の様子であるが、別室しか通っていない生徒は5割を超え、行事には参加できる生徒が2割、なんとか授業に通えるのが2割である。復帰率は1割であった。別室から教室への道程には厳しいものがあることがわかる。

今後の課題として、教室の受け入れ態勢を整えていく必要がある。不登校生徒が別室から教室へ復帰するために、受け入れ母体であるクラスが不登校生徒にとって安心して入っていける居場所であることが大切である。そのためにも担任は、別室登校から教室に入るまでに、不登校生とかかわりやすい仲間との接触の機会を設けたり、放課後教室にさそったり、長期休業中に教室で学習したり等級友がいない時の入室など、環境に慣れさせ、クラスの受け入れ態勢をつくることを心がけ別室から教室への手立てを具体的に考えていく必要がある。

最後に、別室に通う不登校のタイプの多くは、小学校では、「不安など情緒的混乱型」と「複合型」であり、中学校は、「不安など情緒的混乱型」「複合型」に加え「学校生活起因型」である。更に、軽度発達障害を伴う不登校もあり、きめ細かい柔軟で個別的な対応が求められているのが現状である。

今後の課題として、別室に通う不登校児童生徒が教室に復帰できるようにするため、その対応に当たっては不登校児童生徒の状況を的確に把握し、具体的な指導・支援計画を立てて学校全体で組織的、継続的に対応していくことが必要である。校内の指導体制については、学級担任や養護教諭に任せきりにすることなく不登校対策委員会など校内の支援体制を充実させ効果的な対応を組織的に行うことが重要である。また、必要に応じて、外部の専門関係機関と連携してサポート体制をつくることも必要である。

#### 参考文献

- 1) 不登校問題に関する調査研究協力者会議 「今後の不登校への対応の在り方について」  
(報告) 平成15年3月
- 2) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 「中1不登校生徒調査(中間報告)」 平成15年8月
- 3) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 生徒指導資料第2集「不登校への対応と学校の取組について 小学校・中学校編」 平成16年6月

## 心を育てる学級経営

### - 「学校・園が楽しい」学級づくり -

指導主事	廣井 尋美
研究員	福田 明美（浦風小）
”	柳 伸彦（大庄小）
”	橋本 悦明（水堂小）
”	今村 七美（武庫東小）
”	大形 幸枝（園田幼）

#### 【内容の要約】

「学校・園が楽しい」につながる要因としては、教師と子どもの関係より子どもと子どもの関係が大きいのではないかと。そして、所属感・存在感があり、友だちから認められている安心感がある時、その集団にいることが「楽しい」と感じるのではないかと。その折、素直な感情として、子ども達は「ありがとう」ということばを発する。

そこで、「ありがとう」がたくさんあふれる仲間づくりをめざして、子どもの実態に即した手だてを工夫し、実践する中で「学校・園が楽しい」学級づくりを図る。

キーワード：学級，友だち，仲間づくり，「ありがとう」，存在感，所属感，関わり合う，認め合う，安心感

1	はじめに	17
2	本年度の研究の概要	17
	（1）言われてうれしいことばしらせ実施	
	（2）「ありがとう」があふれる仲間づくりのための手だての工夫	
	（3）アンケート調査実施	
3	実践「ありがとう」	
	（1）実践事例1（小学校6年生）	18
	（2）実践事例2（小学校5年生）	21
	（3）実践事例3（小学校5年生）	25
	（4）実践事例4（小学校4年生）	27
	（5）実践事例5（幼稚園年長）	30
4	考察	33
5	おわりに	36

## 1 はじめに

子ども達は、どういう時に「楽しい」と感じるのでしょうか。

所属感・存在感があり、友だちから認められている安心感がある時、その集団にいることが「楽しい」と感じるのではないだろうか。

そのことをふまえ、昨年度は、自分が伸び、互いに認め合う仲間づくりが重要であると考えた。そのために、子どもの実態に即して、自己の成長を知り、友だちへの理解を図る手だてを工夫・実践し、「学校が楽しい」学級づくりを図った。

昨年度の実践やアンケートから、「学校が楽しい」と思える要因は、教師と子どもの関係より子どもと子どもの関係が大きいのではないかということがわかった。

また、基礎的集団である学級が楽しい・好きと思えることが、「学校が楽しい」と思えることに繋がることもわかった。(調査対象H15年度459名分・H16年度949名分)

昨今、児童生徒指導上の問題が急増し、合わせて、心の問題が注視されている。本市においても、不登校児童数50名・不登校生徒数441名(H15年度)である。起因は、学校生活・家庭生活・それらの複合など、様々であるが、「学校は楽しくない」という声もある。

また、今年度当初、園児においては、独り占めなどの自己中心的な面が多く見られた。児童においては、状況判断がしにくいという幼い面や自分の気持ちを素直に表現できない面が多く見られた。そこから、自分の気持ちをコントロールできない・友だちの考えを受け入れないという子ども同士の関わり(気持ちの交流)の希薄さの現状が見えた。

以上をふまえ、本年度は、子ども達が「楽しい」と感じることの追求をする。その中で、子ども同士の関わりを、教師がどう環境整備していくかに力点を置いて「学校が楽しい」学級づくりを図る。

## 2 本年度の研究の概要

所属感・存在感があり、友だちから認められている安心感がある時、その集団にいることが「楽しい」と感じるのではないだろうか。その折、素直な感情として、子ども達は「ありがとう」ということばを発する。

そのことをふまえ、「ありがとう」がたくさんあふれる仲間づくりが重要であると考えた。

子ども同士の関わりを、教師がどう環境整備していくかを、「ありがとう」に着目して、力点を置くこととした。そして、「ありがとう」がたくさんあふれる仲間づくりのためには、子どもの実態に即した手だての工夫が重要である。その手だてを工夫し、実践する中で「学校・園が楽しい」学級づくりを図る。

以下に、本年度の実践の概要を挙げる。

### (1) 言われてうれしいことば調べ実施

言われてうれしいことばを調査する。(1人3つまで)

各々、理由も書く。(園児は聞き取り)

### (2) 「ありがとう」があふれる仲間づくりのための手だての工夫

どうぞ・ありがとう方式　ハッピーレター　については、全学級で実施。

授業「心を伝え合おう」　新聞投稿記事を利用した授業　ありがとう週間

「ありがとう」の木　「ありがとう」言えたかな?言われたかな?カード

パネルシアター 紙芝居など については、各学級の子どもの現状に合わせて実施。  
手だての前後に、「ありがとう」言えたかな？カード」を利用し、子ども自身の自己  
評価と担任による観察・記録で、子どもの変化・手だての有効性を考察する。

**「ありがとう」言えたかな？カード**

年 組 (                      )

月日	言えた かな	いつ？	どこで、だれに？
/			
/			
/			
/			
/			

A : 言えなかった      B : 1 回だけ言えた  
C : 2 ~ 3 回くらい言えた  
D : 5 回くらい言えた  
E : 7 ~ 8 回くらい言えた  
F : それ以上言えた

(3) アンケート調査実施 ( 6 月・12 月に実施 )

**アンケート (                      ) 小学校 (                      ) 年 男 女**

	とても 思っ つ	少し 思っ つ	ど う も な い	あ り 思 わ な い	全 く 思 わ な い
Q1 学校は楽しいですか。	5	4	3	2	1
Q2 学校は好きですか。	5	4	3	2	1
Q3 自分のクラスは好きですか。	5	4	3	2	1
Q4 休み時間は好きですか。	5	4	3	2	1
Q5 給食は好きですか。	5	4	3	2	1
Q6 勉強は好きですか。	5	4	3	2	1
Q7 参観日は好きですか。	5	4	3	2	1
Q8 人の話を聞いていますか。	5	4	3	2	1
Q9 名前を呼ばれたら返事をしていますか。	5	4	3	2	1
Q10 宿題は必ずしていますか。	5	4	3	2	1
Q11 相談に乗ってくれる友だちはいますか。	5	4	3	2	1
Q12 くん・さんをつけて友だちを呼んでいますか。	5	4	3	2	1
Q13 休み時間に遊べる友だちがいますか。	5	4	3	2	1
Q14 学校で「ありがとう」が言えますか。	5	4	3	2	1
Q15 あなたにいじわるをする友だちがクラスにいますか。	5	4	3	2	1
Q16 がいっぱいをいっしょに喜んでくれる友だちがクラスにいますか。	5	4	3	2	1
Q17 担任の先生は話しやすいですか。	5	4	3	2	1
Q18 担任の先生はいつもこわいですか。	5	4	3	2	1
Q19 順番を守ることができますか。	5	4	3	2	1
Q20 (学級ごとの内容)	5	4	3	2	1

### 3 実践「ありがとう」

(1) 実践事例 1 ( 小学校 6 年生 )

#### 1. 現状

- ・高学年としての自覚に乏しい。
- ・幼く、自己中心的な言動が多い。(精神的、情緒的な発達に格差が大きい)
- ・感情の抑制がうまくできず、見下げた発言や乱暴な言動が多い。

- ・プライドの高い男子の影響力が強く，その子の言動に流されやすい。
- ・自己表現力に乏しく，単刀直入な会話ですませたり，思いこみが激しい。

## 2. 手だて

どうぞ・ありがとう方式

プリントや手紙・テストの配付時に，渡す側は「どうぞ」・受け取る側は「ありがとう」と，顔を見てことばをかけ合う。

ハッピーレター

友だちの良い所や誉めてあげたい事を手紙に書き，お互いに読み合う。必ず，返事を書く。

	時間	方法	児童の様子
1回目 (10月)	30分	一人に3枚配付 ・1枚目 隣の席の人 ・2枚目 異性 ・3枚目 自由 必ず，全員に届くように配慮した。	真剣に取り組み，本当にもらえるかな？と不安そうであった。「なんだかとっても嬉しかった」「ほんとにハッピーになった」と学級にあたたかい雰囲気広がった。「今度はいつ？」と意欲的に取り組む姿勢が見られた。
2回目 (11月)	30分	・1回目にももらった人への返事 ・追加で書きたい子は枚数，書く相手は自由とする。	「もっと来るといいな」「みんなをハッピーにしたい」など前向きな姿勢であった。[ハッピーBOX]設置の提案が生まれるほど楽しんで取り組んでいた。
3回目 (12月)	45分	個人用(B4用紙)を順番に回す。 「ぐるぐるハッピーレター」と名づけて，円形の座席になって隣に回す。一人あたり1分。	「はい，どうぞ」「ありがとう」と自然にかけ声が出た。一枚に全員の気持ちやことばがあるので「すごい」「大事にしよう」と喜んでいて。自分が友だちからどのように見られているのか気がかりで，戻ってきたレターに見入っていた。

「ありがとう」言えたかな？言われたかな？カード

言えたかな？言われたかな？と自己分析し，コミュニケーションの広がりを見る。

授業実践

### ア. 学級活動(新聞投稿記事を用いた授業より)

- ・新聞の投稿記事(結論部分を隠す)を読む。
- ・考えを書く。・・・もしも自分がこの場にいたら，どうするか？  
この投稿者は，どのように結論を書いているか？

- ・結論部分を読む。
- ・全文を通して感想を書く。

### イ. 道徳(心のノートなど)

- ・「ありがとう」と言えますか？

言う時，言われる時調べ

言う時，言われる時の気持ちは？

「ありがとう」のことばから生まれるものは？

- ・「ありがとう」の心

学校生活以外の身の回りから，「ありがとう」の気持ちが込められている他のことばや行動があることに気づき，感謝の気持ちを表したり，進んで「ありがとう

とう」と言える自分になりたいという気持ちを持つ。

さあGO運動

さ：「さようなら」あ：「ありがとう」G：「ごめんなさい」O：「おはよう」  
顔をみたり，目と目が合ったりしたらどちらが先に言うか競争し合う。

### 3. 考察

抽出児の様子

#### ア、コミュニケーションの多いA児 [「ありがとう」言えたかな？カード]より

	言えたかな	感想
1回目	D E D D E	プリントを配る時によく言う。係の友だちに言う事が多いので他にも言えるようになりたいと思う。
2回目	C C C C B	休み時間や何か一緒にしたりする時に言う事が増えた。口だけで簡単に言わなくなった気がする。

学級代表をし，男女共に信頼されている。「ありがとう」と言うことが習慣づいている。[授業実践]で，ことばの意味や内容に注目するようになり，それを，大事に考えて言うようになった。「ありがとう」を通じてよりよい人間関係を築く軸となり，進んで広めている。特に [新聞投稿記事を用いた授業]が効果的であった。

#### イ、コミュニケーションの少ないB児 [「ありがとう」言えたかな？カード]より

1回目	A B B C C	最初はなかなか言えなかったが，段々とプリント渡しの時は，言えるようになったけど，恥ずかしい気分になる。
2回目	A B B C A	恥ずかしさはなくなったけど，プリント渡し以外は，言おうと思うのに，すぐにことばがでないのが悔しい。

消極的な性格で無口だが，協調性はある。[どうぞ・ありがとう方式]の活用で，言い慣れてきたが，ことばを発する時に勇気が必要である。[「ありがとう」言えたかな？言われたかな？カード]の自己分析で，言われている回数が多い事に気づき，学級での所属感・存在感を感じ，自信を持つことができた。仲間意識の向上に役立った。

曜	回数	言えたかな？		言われたかな？		
		誰に	どんなときに	回数	誰に	どんなときに
月	3	A君	転びそうな時	4	Cさん	給食を配った時
		Cさん	体育でボールを持ってきてもらった時		Dさん	答えを教えた時
					F君	テストを配った時
		Eさん	プリント渡しの時		Eさん	本を見せた時

#### ウ、学級経営上気になるC児 [「ありがとう」言えたかな？カード]より

1回目	C C D E E	初めは2～3回くらいだったけど，段々言えるようになってうれしい。これは良いことなので続けてほしい。
2回目	C C C C C	いつでもすぐに言えるようになってきた。自然に言えるし，グループ以外の人とも仲良くなった気がする。

女子のグループで行動することが多く、友だちが固定している。仲間外れになっているのではないかと悩んでいた時に、[どうぞ・ありがとう方式][ハッピーレター]に取り組み、自分の思い込みであったことに気づいた。その後、幅広く交流できるようになり、手だてによって気持ちが変化したことがわかる。

C児にとって、「ありがとう」言えたかな？カード」は、自己分析・自己評価となり「ありがとう」を言う場の広がりにつながった。

2学期になって仲良しのグループから何となく仲間はずれになっているかな？と感じていた時、先生が[どうぞ・ありがとう方式]と「ありがとう」言えたかな？カード」をはじめてくれた。やっているうちに、今まであんまり喋らなかった友だちと「ありがとう」が言えて、やっているうちに仲間はずれのことを忘れていった。今まで仲良しのグループのことばかり考えてきたから、自分で勝手に仲間はずれと思っていたみたいだった。これからも頑張って「ありがとう」と言おうと思う。

(C児の日記より)

### Ⅰ. 変化の大きかったD児 「ありがとう」言えたかな？カード」より

1回目	C B B B C	良いことをしてくれているのに、「ありがとう」がすぐに言えなくて友だちに悪いなと思う。もっと言いたい。
2回目	C D D D D	「ありがとう」を言うと「ありがとう」がたくさん返ってきて、つながってるなど感じられてうれしくなる。

素直な性格で、リーダー的存在で活動的である。周囲に対することばがけや思いやりをいつも心がけ、実直で優しい。様々な手だてに対して興味深く対応し、チャレンジできる。カード式の手だてでは、自己分析したり、状況判断をして、学級の意識向上に大きく貢献している。自己評価できるカード式に変化がみられる。学級の様子

子ども達にとって、目に見えるカード式の手だては、意識づけになると共に、自己分析・自己評価することができ、自己を振り返る材料となった。また、[ハッピーレター]は、学級での所属感・存在感などを確認し合うことができた。道徳的教材や新聞投稿記事などの手だては、感謝のことばとして発する「ありがとう」から、内容に深み・温かみがあり互いに尊重し合う「ありがとう」に変化させることができた。そして、日記や授業の感想などに「ありがとう」言えたかな？カード」や[どうぞ・ありがとう方式]についてふれる文面があり、確実に子ども達の中に「ありがとう」のことばが意識づいてきている。

以上のような手だてによって、学級の間人間関係が円滑になり、交流に幅ができていく。また、お互いを認め合い、尊重し合う気質が生まれ始めている。「ありがとう」ということばは、気持ちを優しくさせ、温かい心の交流を深め、よりよい人間関係を育むことに大きく貢献したといえる。

## (2) 実践事例2 (小学校5年生)

### 1. 現状

- ・「ちび」「デブ」など人を傷つけることばや「あほちゃうか」「ふん」など軽視することばが子ども達の生活の中で見られる。

- ・あいさつがあまり言えていない。
- ・自己中心的な行動をする子がいる。
- ・自分の気持ちをコントロールすることができなくて（我慢できない）、乱暴な行動をする子がいる。

## 2. 手だて

どうぞ・ありがとう方式

ハッピーレター

	時間	方法	児童の様子
1回目 (10月)	45分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人に3枚配付（1枚は異性に、2枚は誰にでも）</li> <li>・返信</li> <li>・追加で自由に</li> </ul> （約400枚使用）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちの良さを見つけ、書き出すのが早いのは、女子に多い。</li> <li>・「そんなん、わからんわ」「なんかなあ」「そんなんないわ」とつぶやきながら、鉛筆の進まない男子が5人いた。返信をもらおうと、笑顔。「もっと書こう」とカードを取りに来た。</li> <li>・「わあ、こんなにももらえるとは思わなかった。うれしい」「返事書くの大変やわあ」</li> </ul>
2回目 (12月)	45分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス全員で机を円形にして座る。</li> <li>・個人用（B4用紙）を順番に回す。</li> <li>・各自、気に入ったことばを選び短冊に書く。</li> <li>・全員の短冊を集める。（5の1みんなの詩へ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちの顔を見ながら、全体にニコニコうれしそうな様子。</li> <li>・書き終わったとき、「楽しかった」「もう1回しよう」という声があがる。</li> <li>・自分のレターが帰ってきたら、笑顔でじっと見入っていた。</li> <li>・選ぶ時、「どれにしようかなあ」「二つ、三つをくっつけてもいい？」</li> </ul>

### ありがとう週間

〔さあGO運動〕の取り組みの一つである。子ども達と相談し、1週間ごとに、（おはよう週間・ありがとう週間・ごめんなさい週間）を設け、進んで言い合おうと取り組んだ。（ありがとう週間）では、教室に（ありがとうの木）を作り、「ありがとう」と言えたら、いつ、だれに、どんなことをした時に言ったのかをメモ用紙に書いて、自分の場所に重ねて貼っていく。

学級活動の授業「心を伝え合おう」（心のノート）

心を伝えることばについて考えさせ、気持ちの良いあいさつや素直な「ありがとう」「ごめんなさい」などを、心と心をつなぐことばとして見つめ直す。

- ・心を伝えることばを考える。（ありがとう、よろしく、ごめん、おはよう等）
- ・言われてうれしいことばをふり返る。
- ・心のノート 「ありがとう」って言えていますか。自分をふり返る。
- ・「ありがとう」と言われた経験について話し合う。

ミニ授業（新聞投稿記事を用いた授業）

新聞に投稿された記事（結論部分を隠す）を読んで、感想を書き、自分の考えを発表し合う。「ありがとう」や「大丈夫？」などのことばで相手を思いやる気持ちを表現することの大切さに気づく。

## 3. 考察

抽出児の様子

ア, コミュニケーションの多いA児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	DDCDC	自分で気づかないうちに、ちょっとしたことで言ってた。ちょっとしたことでも「ありがとう」と言えるのは、とってもいいなあと思った。これからももっと「ありがとう」を言おう。
2回目	DDEDC	結構、身近なところで言えてた。だんだん自然に言えるようになってきて、うれしい。これからも、もっともっと「ありがとう」って言いたいし、「ありがとう」と言われるようにする。

男女問わず、誰とでも話したり、遊んだりできる活発な女子である。女子にだけではなく、男子(クラス11名中の4名)に対しての「ありがとう」が見られた。また、言うだけでなく言われるようにと心がけ、態度に変化が見られた。気の強いところがあり、1学期の頃、男子と口げんかになることがあったが、2学期には見られなくなり、ふり返りカードの「悩み、心配なこと」の欄に「自分が人にやさしくできているだろうか心配」と自分の行動をふり返るようになった。このA児の場合、どの手だてにおいても素直に反応し、積極的に取り組んでいた。

前とちがってとっても「ありがとう」と言えるようになりました。はずかしかったりもしたけど、だんだんはずかしくなくなってきたし、「どうぞ」と「ありがとう」が言えるようになりました。「ありがとう」と言うと、言ってる方もうれしくなるし、言われる方もうれしいと思う。心と心の会話は大切だと思う。(A児の日記より)

イ, コミュニケーションの少ないB児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	BBBBB	給食の時、手伝ってもらった時に、「ありがとう」って言った。プリントをもらった時にも言った。
2回目	BBBCB	あまり、「ありがとう」とか言わなかったし、同じ人にしか「ありがとう」を言ってない。

表情が乏しく、会話も少ない女子である。1回目は[どうぞ・ありがとう方式]でプリントをもらった時だけであった。2回目、物を拾ってもらった時や貸してもらった時の他、清掃中や給食準備中に手助けしてもらった時等「ありがとう」を伝える場面が広がっている。

最初は全然言っていなかったけど、今では、いっぱい言っている。友だちに、物を落としたときに、すぐにとってくれてうれしかった、「ありがとう」って言った。初めて言ったら、どんどん、5、6回くらい言えるようになった。いっぱい友だちからも「ありがとう」言われて、うれしかった。

(B児の日記より)

[「どうぞ・ありがとう方式」]や[「ありがとう」言えたかな?カード]で「ありがとう」を意識させたことにより、「ありがとう」を交わし合う心地よい体験ができた。

ウ, 学級経営上気になるC児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	BBBAA	そんなに「ありがとう」と言えなかった。
2回目	AAAAA	[「ありがとう週間」]を始めてから、「ありがとう」が自然と言えるようになった。だから、今度からもっと「ありがとう」を言う

人を傷つけたり、軽視したりする言動がよく見られ、男子の中で影響力の大きい存在である。調査活動などについては、興味を示さず、真面目に取り組まないC児であるので、調査では、ほとんど変化がないという結果が出た。しかし、様子を見てみると、友だちに何かをしてもらった時、下校時に友だちが待ってくれた時には、「ありがとう」、友だちとぶつかった時には、「ごめん」とその場ですぐ言えていた。やや前向きな態度が見られる。

Ⅰ. 変化の大きかったD児 [「ありがとう」言えたかな? カード] より

1回目	BBCCB	たくさん言えた日、少ししか言えなかった日、いろいろあったけど、前から比べればたくさん自然に言えてきている気がする。5回、6回とたくさん言えるようになったらいいと思う。
2回目	CDECF	前は、あんまり言えてなかったけど、今回はたくさん言えて、今日は9回も言えた。「ありがとう」って言うと、気分が良くなった。「ありがとう」は大切。感謝を表すことばだもの。ありがとうを言っている方も言われる方もどちらも気分が良くなる。妹とけんか中、何かをしてもらって、「ありがとう」と言ったら、仲直りしてしまった。ことば一つで仲良しになれるんだなと思う。「ありがとう」ということばが大好きになった。先生に感謝します。ありがとうを身につけることをしてくれて「ありがとう！」

自分から話しかけるタイプではないが、人の話をじっくりと素直に聞き入れるので、周りの子たちから頼りにされる女子である。1回目は「ありがとう」が言えた回数は計7回であったが、2回目は28回となり、飛躍的に言えた回数が増えた。「ありがとう」のことばを介して人間関係が円滑になることを体験し、「ありがとう」の大切さを実感していた。日常生活の中でも習慣化されてきていることがうかがわれる。大きな変化が見られたのは次にあげる手だて後である。

ハッピーレター2回目；自分の良さって何だろう。最初は、友だちから見た自分の良さを知るのがはずかしかった。(略)びっくりした。たくさん見つけてくれる子、少しだけど、しっかり良さを見つけて書いてくれる(略)みんな私の良い所を見つけてくれる。とてもうれしかった。

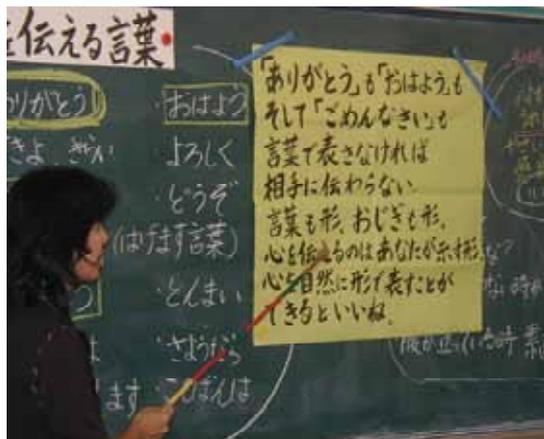
(D児の感想文より)

自分をふり返ったり、友だちを見つめ直したりすることで、自分に自信をもったり、人間関係を広げたり、深めたりすることができた。

学級の様子

[どうぞ・ありがとう方式] や [ありがとう週間] などの手だてを通し、子ども達は、声をかけ合うゲーム感覚で始まった意識的な「ありがとう」を継続するうち、自然な「ありがとう」や気持ちを込めた「ありがとう」へと変化してきた。また、「ありがとう」を交わし合う心地よい体験をし、「ありがとう」への意識を高めた。さらに家族や近所の人に言えるなど、「ありがとう」の数の増加や場面の広がりが見られた。[ハッピーレター] は、友だち同士がお互いに自分を知り、認め合えることにより、自信・所属感につながった。

[ミニ授業]や[学級活動の授業]は、自分をふりかえるとともに、経験からことばのもつ温かみややさしさを思い起こすことにつながった。特に、嫌なあだ名や疎外することば、悪口があまり交わされなくなった。また、だれかがそのようなことばを使うと、「それは、人が嫌がることばでしょ。」と注意する子ども出てきた。これらの手だてにより、学級の人間関係が穏やかになり、交流に広がりが出てきた。



手だてを変えながら、継続して一つのことにに向けて取り組むことが大切であり、効果をあげたといえる。

### (3) 実践事例3 (小学校5年生)

#### 1. 現状

- ・男女差を意識せず、ケンカをしてもすぐに仲なおりができる。
- ・調子に乗り過ぎて、羽目を外しやすい。
- ・小学校高学年としては、非常に幼い言動が多い。
- ・自己中心的なわがままが多い。 友達の考えを受け入れない。人の気持ちを考えない。
- ・気持ちのコントロールができない子がいる。 我慢ができない。

#### 2. 手だて

どうぞ・ありがとう方式

ハッピーレター

時期	時間	方 法	児童の様子
1回目 (9月)	45分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ B 4 の白紙を配り，上に名前を書く。</li> <li>・ 全員が円になって座り，1分毎に時計回りに回していく。</li> <li>・ その子の良い所と自分の名前を1分以内に書く。</li> </ul> (紙が一周して戻ってくると，全員からの自分に関する良いところが書き込まれている)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1分で回すというゲーム的要素が受けたのか，非常に楽しんでいた。</li> <li>・ 最後に戻ってきた紙を満足そうに読んでいた。</li> <li>・ 普段から，友だちについて考えたり感じたりしていなければならず，時間が足らず，書きにくそうにする姿もあった。</li> </ul>
2回目 (12月)	45分	レター形式で実施。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各自3通の手紙を出す。</li> <li>・ 友達の良いところや感謝の気持ちを書く。</li> <li>・ 3通のうち必ず男女共に出す。</li> <li>・ 3通のうち，1通は隣の席の子に出す。(全員が必ず手紙をもらえることになる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 低学年での生活科を思い出したのか，非常に積極的に取り組んだ。</li> <li>・ 3通以上出したがる子が大量出たので，返信のルールを確認して，認めた。</li> <li>・ クラス平均で，1人4.4通出し，最高9通もらった子が</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必ず返事を出す。</li> <li>・後日、担任が配達する。</li> </ul>	1人、最少1通の子が2人いた。
--	---	-----------------

### 「ありがとう」の木の実施

日時	方 法	児 童 の 様 子
12/13 より 1週間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ありがとう」を言う度に、用意した小さな紙に、誰にどんなことをしてもらって「ありがとう」を言ったかを書く。</li> <li>・それを、「[「ありがとう」の木]」(模造紙)の自分の場所に貼っていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言う度に貼っていくのが面倒だったようで、まめに貼った子と関心をあまり示さなかった子に分かれた。</li> <li>・期間中に1人で50枚近く貼った子もいた。</li> </ul>

### 3. 考察

#### 抽出児の様子

#### ア、コミュニケーションの多いA児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	D F D E D	プリントを配ってもらったときに言ったのが多いけど、ランドセルをもってきてもらったときや鉛筆を捨ててもらったとき、社会見学ではバスの運転手さんに言えたりした。けっこう言えてると思った。毎日Fになるようにしたい。
2回目	E D C E D	プリントを配ってもらったときやランドセルをもってきてもらったときにやっぱりよく言ってる。回数は前より減ったのは残念だけどなぜ減ったかよくわからない。言う機会が少なかったのかなあ。

口数は少なめだが、ユーモアのセンスがあり、運動神経にも秀れる男子である。普段から男女問わず信望があり、ハッピーレターを最も数多くもらった子である。1回目初日でも、「ありがとう」が言えており、普段から自然に「ありがとう」のことばを使えることが窺われる。

#### イ、コミュニケーションの少ないB児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	A D D 欠 B	プリントをもらうときに、前の子に言った。社会見学で、ガス科学館の人に言った。
2回目	B A A A C	あまり言えなかったと思う。よく覚えていないことも多い。でも、1日目と最後は、友達に言えた。

普段から口数の少ない、声も小さい女子である。1回目の実施時は、ほとんどが[どうぞ・ありがとう方式]で言ったものである。ただ、最終日の社会見学時に、自分から、科学館の人に「ありがとう」とあいさつができたことは、B児にとってはこれまでに見られなかった行動であった。2回目実施時、回数が増えずにいたが、友達に対して言えていることは変化である。また、2回目の初日にも「ありがとう」と言えることから、「ありがとう」を言う意識が芽生えつつあると思われる。

ウ、学級経営上気になるC児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	A F C C F	プリントをもらった時や友達にものを貸してもらった時に言った。社会見学では、スタンプを押してもらった時に、おじいさんに言った。もっと頑張れば良かった。
2回目	B C A A D	プリントをもらったときや消しゴムを拾ってもらったときに言った。Aの日はあまり覚えていないけど、これからもできるだけ言っていこうと思う。

友達との会話の中で突如として怒りだし暴れまわるということが、多々ある男子である。そのためか、仲の良い子も少ないのだが、本人もいろいろな場面でそれを感じ、改善していかなければという気持ちでいた。そんな折に、このような手だてが効果的に働いたように感じられる。本人も、積極的に取り組んだ結果、暴れることが減り、落ち着いてきた。

学級の様子

[言われてうれしいことば調べ]の結果を受けて、「ありがとう」のことばを中心に据えた学級作りを行ってきた。[どうぞ・ありがとう方式]では、当初、形式的に言っていた「ありがとう」が自然に言えるようになってきた。また[「ありがとう」言えたかな?カード]を使うことによって、自分の言動を振り返り反省すると共に、「ありがとう」ということばに対する意識を高め、友達関係をスムーズにし、深めることに役立てることができた。[「ありがとう」の木]では、その高まった意識を個人個人が再確認することができた。特に、コミュニケーションの少ない子や学級経営上気になる子にとっては、このような手だてによって、積極的にコミュニケーションを図ろうとしていた様子が窺われ、非常に効果的であった。

自分の紙を全員に回す[ハッピーレター]では、学級一人一人の良いところを考える機会を持つことができた。また、学級の皆が、自分の良いところを分かってくれているということを感じ、互いの信頼関係を築くうえで、効果があり、仲間意識を深めることができた。

以上のような手だてから、互いの事をよく知り、尊重し合える土壌ができ、学級の雰囲気があたたかいものになってきた。そして、人間関係がスムーズになり、友だち同士の関わりが広がり、深まった。「ありがとう」のことばの大切さはわかっているつもりだったが、今回意識的に取り組むことによって、教師も子ども達も、このことばの持つ力や効果の大きさに改めて驚かされた。

#### (4) 実践事例4 (小学校4年生)

##### 1. 現状

- ・全体的におとなしく自己表現をあまりしない子が多い。
- ・自信がなく、積極性に乏しい。
- ・固定した友だちで遊ぶことが多く、友だち関係の広がりが少ない。

##### 2. 手だて

どうぞ・ありがとう方式

ハッピーレター

	時間	方法	児童の様子
1回目 (10月)	45分	・一人に6枚配布 ・3枚, 誰にでも書く ・3枚, 返信用 (追加で自由に書く)	初めてなので、「えー, いいところなんかないわ」「どんなことでもええの?」戸惑いながら書いていた。ハッピーレターが届くと, うれしそうな表情に一変。男女間のやり取りは少なかった。
2回目 (11月)	45分	・一人に3枚, 配布 ・1枚は隣の席の子, 1枚は誰にでも, 1枚は返信用 (追加で自由に書く)	隣の席の人に書くという設定を加えた。結果, 前回より広がりができ「もっともらってもいいですか」と意欲的だった。準備していた400枚はなくなり, 休み時間になっても続ける子もいた。

新聞投稿記事を用いた授業

「一言ほしかった2人の若い女性」(毎日新聞11/11(木)朝刊 参照)の記事を読み, 『もし, 自分だったら...』どうするかを考え, 「ありがとう」など大切なことばを意識する。



3. 考察

抽出児の様子

ア, コミュニケーションの多いA児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	A A A A A	この1週間「ありがとう」とは言えなかったけど, ずっと「ありがとう」が言えるといいな。
2回目	A C A C F	この1週間「ありがとう」がいっぱい言えたとし, 前のありがとうカードよりもっと「ありがとう」が言えました。またやる時は, 今回のよりももっといっぱい言えたらいいな。

クラスのムードメーカー的な存在で, 幅広く友だちと遊べる男子である。1回目は全く言えなかった。2回目には回数が増えている。5日目には給食の配膳の時などでも言えており, [どうぞ・ありがとう方式]や[「ありがとう」言えたかな?カード]が効果的であり, かなり意識が高まったと思われる。

イ, コミュニケーションの少ないB児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	A A A A A	空白
2回目	A A A A A	「ありがとう言えたかな?カード」で全部言えなかった。またあったら言うことにしたい。

普段から教師とは関わりを持つことができるが, 友だちとは関わりを持ちにくい女子である。2回とも全く言えていないが, 2回目の感想を見ると, 意欲面で一歩踏み出しつつあるのではないかと思われる。

ウ、学級経営上気になるC児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	B B B A B	毎日1回しか言えなかった。
2回目	B B A A B	ほとんど1回しか言えなかった。もっと「ありがとう」といいたい。

学級のリーダー的存在であるが、強引なところもあり、学級の中で孤立しないかと気になる男子である。自己評価上の変化は見られないが、音楽の時間に床に落とした木琴のバチを友だちに拾ってもらい、「ありがとう」と自然に言っていた。

エ、変化の大きかったD1児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	A A A B A	もっと「ありがとう」をふやす。
2回目	D C C C F	Cより上でよかった。「ありがとう言えたかな?カード」をやってなくても「ありがとう」をいうようにする。

少し乱暴な男子である。1回目は1回しか言えていないが、2回目は飛躍的に回数が増えている。[「ありがとう」言えたかな?カード]に記録することで意識が向上したと思われる。言う場面はほとんどがプリントを配られた場で、「どうぞ・ありがとう方式」が気に入っている様子であった。2回目の感想を見ると、意識の変化を感じることができる。実際に、はさみなど文具を教師に返す時に「ありがとうございました」と言えるようになった。

変化の大きかったD2児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

1回目	A C C A C	けっこう言えたと思った。けど、もっと言った方がいいと思った。「ありがとう」を言っている時は教室が多かった。何かをしてもらった時、かしてもらった時は、「ありがとう」を言わないといけないと思う。
2回目	C C C C E	今回は「ありがとう」をたくさん言えた。これからももっと言いたいです。「ありがとう」と言うことは、今回あらためて、いいことだと思いました。

コミュニケーションの多い女子である。D2児の感想より、言わなければという義務感による「ありがとう」から、意欲的な「ありがとう」へと、気持ちの変化があったと考えられる。[新聞投稿記事を用いた授業]でD2児は、「気遣ってくれた男性に対して、なにかお礼のことばを言うほうがいいと思う。もっと気遣ったほうがいいと思う。」と記述していることから心の変化が感じ取れる。

学級の様子

[どうぞ・ありがとう方式]は「ありがとう」の意識づけのために役立った。継続して行うことで「ありがとう」ということの恥ずかしさはかなり軽減され、物を借りたり、返したり、何かをしてもらったりした時に「ありがとう」と自然に言えるようになってきた。

[新聞投稿記事を用いた授業]では人に助けてもらった時には「ありがとう」ということが大切であることや当たり前であることを学習した。

子ども達が感想の中で、

- ・「ありがとう」ということばが無いだけで、こないやな話になるんだなと思った。
- ・「大丈夫ですか」や「ありがとう」を言わない大人にはなりたくない。

と記述していることから、意識がかなり高まったことがわかる。

[ハッピーレター]は友だちの良さを見つけること(他者理解)に効果を発揮した。また、自分が認められ(受容感)、自信を持つ(自己肯定感)機会になった。

子ども達が感想の中で、

- ・友だちは、どんないいところがあるのか、探すのもたのしかった。ふだんあんまり話しない人からもきて、うれしかったです。自分が手紙を渡すと相手もうれしそうな顔をすると書いてるのが楽しくなった。またやりたいです。
- ・5枚しか返事はこなかったけど、その人の返事はよかった。どんな人の返事でも、その手紙にはその人の心がこもっている。だから、名前がハッピーレターなのかな。
- ・友だちや男子からもらって、わたしのことをどう思っているのかわかって良かったし、手紙に「計算が速いね」とか、「やさしいね」とか書いてくれた子がいてとってもうれしかったです。友だちが私のことをこう思っているのかなぁと思った。そんなに話をしない男の子からもきたし、思いもしなかった子から手紙をもらってうれしかった。

と記述していることから、普段関わりの少ない子同士が交流するなど仲間関係の広がりをつくるきっかけとなったことがわかる。

## (5) 実践事例5(幼稚園年長)

### 1. 現状

- ・母親と離れられずに泣く子、遊び出せない子が数名いる。
- ・全体活動でも、緊張のあまり反応できなかったり、逆に椅子に座っていられずに好き勝手におもちゃで遊び始めたり、保育室から外に出る子もいる。
- ・我先に教師の前に来て自分の思いを伝えようとし、友達のことは耳に入らない子もいる。

### 2. 手だて

どうぞ・ありがとう方式

出席ノート・プリントを配る当番の子が「どうぞ」、受け取る子が「ありがとう」と渡す。

ハッピーレター

	方法	援助	園児の様子
1回目 (9月27日 ~ 10月1日 で全員)	ことばで、その日の当番(5人)の良いところをみんなで伝え合う。	・外見「かわいい」「かっこいい」などにとどまらず、心情面にも気付けるようことばかけをする。 ・具体的な経験や場面を思い出して伝えられるように援助する。 ・ことば不足のところがあれば補い、どの子にも分かるよう伝えるようにする。	・友達に自分の良いところを言われている間はとても恥ずかしそうにする子が多かった。 ・友達から出た良いところと自分が思っている自分の良いところとズレがあった時には自ら自分の良いところを伝えようとする子もいた。 ・回数を重ねるごとに、より具体的な例を挙げて友達の良いところを学級の友達に伝えよ

			うとしていた。
2回目 (11月 10日 ~ 11月 12日)	自分の渡したい相手とペアを作り互いに書き合う。文字が書けない子については、教師が代筆する。また絵も可能とする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>手紙をもらって(内容を理解した後)どのように感じたか、思いを表現できるよう時間を持つ。</li> <li>素直に感じたままを表現できる雰囲気を作る。</li> <li>相手を知る(良い所を探す)ことで自分自身をふりかえる機会になるよう援助していく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「悪いことをしたら叱ってくれる」「泣いてる人、困っている人を、慰められる」「悲しいことを嬉しいことに変えてくれる」と友達を見る目が変わってきた。そして、「最後まで頑張る」「へこたれへん」などと、自分の良いところを見つげられるようにもなってきた。</li> </ul>

### 宝探し

教材こまを宝にする。

- ・保育室の出入り口に誘いの手紙を1枚置く。
- ・所定のところに2枚目・3枚目の手紙を置く。
- ・最後の手紙と、こまを置いておく。
- ・食後、自由に手紙が書けるように、テーブルに用紙を準備しておく。

遊びの中で、心から「ありがとう」と感謝の気持ちを感じる。

### パネルシアター

他の学級の子が、楽器を貸してほしいとやってきて、楽器を渡すとそのまま行ってしまう場面を見る。パネルシアターを見た後、話し合いをもつ。友達とかかわる中で「ありがとう」が必要だと感じる。

### 紙芝居(1枚のみ)

1枚の絵を見ることから、「ありがとう」がどこにあるか考える。友達のことばや気づいたことを手がかりに「ありがとう」を伝える場を感じ取る。

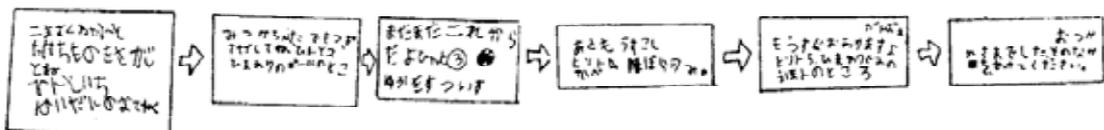
## 3. 考察

### 抽出児の様子

ア、コミュニケーションの多いA児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

入園当初から、好きな遊びを見つけて遊んでいた。顔見知りの友達と遊ぶ中	1回目	BBACF	覚えてられない
	2回目	CCDF	楽しかった

で、自分のしたいことが優先で、トラブルになることもあった。[宝探し]の教材こまを手にするると、「誰がくれたんやろう?ありがとうって言いたい、お礼の手紙を書こう」と感謝の気持ちを表現しようとしていた。友達と一緒に手紙を書き始め、相手が、誰か分からないので、自分たちの経験した宝探しの手順で礼状を渡そうとしていた。



「ありがとう」にあまり関心を示さなかったが、意識して「ありがとう」と言ったり、記憶しておこうと努力したりしていた。また、自分だけでなく、友だちや

教師が「ありがとう」と言ったことまでも感じるようになってきた。[宝探し]の手だては、A児にとって自分の力を十分に発揮し、友だちと協力して活動することの楽しさを味わうことにつながった。

イ、コミュニケーションの少ないB児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

友だちに誘ってもらえると遊びに参加できるが、できないことには挑戦しようとしなかった。また何度も「これでいい?」と確認しないと次へ進めなかった。過去の

1回目	??AAA	?
2回目	ABACC	うれしい

と、今日一日のこととの区別がつけにくく、「ありがとう」についても記憶できていないのではないかと思われる。手だて後の変化も本人からは、聞くことはできないが、様子を見てみると、物を渡してもらった時、助けてもらった時など、「ありがとう」と言えているので [紙芝居]での具体的な例が影響しているといえる。

ウ、学級経営上気になるC児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

内弁慶で、人前でほとんど話すことはなく、目で表現していた。学級の友だちの遊びを

1回目	AABBA	無言
2回目	A?BAB	楽しかった

見ていることが多く、「ありがとう」と言わず笑顔で表現していた。手だて後、限られてはいるが、「ありがとう」と言える場面が出てきた。教師には、「ありがとう」と自分から言えるようになってきた。

エ、変化の大きかったD1児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

2学期、友だちの意見を聞き、少しずつ自分の考えを言えるようになってきた。

1回目	A欠BAA	普通。
2回目	ADCFB	うれしいがいっぱい涙が出そうになる。

[紙芝居]の花の水やりの場面を見た時は、ありがとう探しを積極的にし、発表もした。花の気持ちになって、ありがとうの大切さに気づいていた。その後、自分から進んで「ありがとう」を言うようになってきた。

変化の大きかったD2児 [「ありがとう」言えたかな?カード]より

自分の意見は言うが、自分の思いが優先であった。

1回目	AAACA	忘れて分からなくなった。
2回目	ABCF C	言われたときに自分も言いたくなる くらいうれしいきもちになった。

[パネルシアター]を見ている途中に、「ありがとう」が必要であることに気づくことができ、その後の話し合いでも、「ありがとう」の必要性を感じており、自分が言えているか振り返り、自分から進んで「ありがとう」を言うようになった。

学級の様子

どの子ども達も、「ありがとう」を言うことについて、嬉しいとか楽しいという感想をもっていた。中には、自分ももっと「ありがとう」って言いたい気持ちになったと言う子。

「うれしいけど悲しい」と言うので、尋ねると「なんだか涙が出る気持ち」とのことばに周り

から「それうれし泣きや」「うれしすぎてん」「感動してるんやん」のことば。また、「心があたたかくなった」と驚くべきことばを聞くこともできた。5, 6歳の子ども達が、このような気持ちを感じる機会になり「ありがとう」を意識させることは、幼稚園の子ども達にとっても、重要であるといえる。「ありがとう」と言うことにより、友だちと繋がっていることを知り、心の満足や安心を得られた。

#### 4 考察

##### (1) 言われてうれしいことば調べより (調査人数: 127名)

- ・「ありがとう」「すごい」はどの学校・園でも[言われてうれしいことば]の上位にあることから、子どもたちにとって、感謝や称賛の気持ちを示されることはうれしいことがわかる。
- ・60のうれしいことばが挙がっているが、種類分けすると以下ようになる。
  - [称賛, 賞賛] すごい, おめでとう, 優しいね, 頭いいね(賢いね), ナイス, やったね, えらい, おもしろい, かわいい, 字がきれい, 天才, 明るい, 強い, 最強, カッコいい, ~がうまい
  - [認知・承認] がんばったね, できたやん, 上手になったなあ, 上手だね, 役に立ったね
  - [感謝] ありがとう, うれしい, 君のお陰だ, 気持ちがいい
  - [励まし] 頑張ろう(頑張れ), 大丈夫, 気にしたらあかんで, やったらできで
  - [同意] そうやな, よかったな
  - [誘い] 一緒に~やろう(遊ぼう), 今日遊べる?, おいで
  - [好意] 大好き
  - [謝罪] ごめん
  - [仲間意識] 友達だよ, 秘密だよ
  - [その他] おはよう, バイバイ等

##### [言われてうれしいことばベスト5](発達段階別)(複数回答あり)

	高 学 年		中 学 年		幼 稚 園
	ことば	割合	ことば	割合	ことば
第1位	ありがとう	70.7	ありがとう	54.3	誘い(一緒に~しよう, あそぼう等)
第2位	すごい	26.1	上手だね	14.3	称賛・賞賛(カッコいい, かわいい)
第3位	がんばろう・がんばれ	18.5	すごい	11.4	その他(おはよう, バイバイ等)
第4位	おめでとう	9.8	おめでとう	11.4	感謝(ありがとう)
第5位	よかったな	7.6	おはよう	8.6	励まし(がんばれ, やったらできで)

##### [言われてうれしいことば一覧](総合) (%)

ことば	割合	ことば	割合	ことば	割合
ありがとう	66.1	あいさつ	3.9	友達だよ	2.4
すごい	20.5	優しいね	3.9	ナイス	1.6
がんばろう(がんばれ)	15.0	大好き	3.1	やったね	1.6
おめでとう	10.2	ごめん	3.1	走りが速いね	1.6
がんばったね	8.7	大丈夫	2.4	えらい	1.6
上手だね	7.9	できたやん	2.4	おもしろい	1.6
よかったな	7.1	頭いい(賢い)	2.4	うれしい	1.6
一緒にやろう(遊ぼう)	7.1	おはよう	2.4	やったらできで, カッコいい	~がうまい等

- ・種類別 [感謝] の「ありがとう」は、95.5%もの支持があり、ほとんどの子ども達が“うれしい”ことばと感じている。
- ・子ども達が友だちに言われて一番うれしいことばが「ありがとう」であったことから、「ありがとう」に着目して力点を置き、手だてを工夫することとした視点は方向として、的を射ていたといえる。

**【言われてうれしいことば一覧】(種類別)(複数回答あり)** (%)

種類	人数(人)	最も多いことば	割合	2番目に多いことば	割合
感謝	88	ありがとう	95.5	うれしい	2.3
賞賛・称賛	65	すごい	40.0	おめでとう	20.0
認知・承認	26	がんばったね	42.3	上手だね	38.5
励まし	23	頑張ろう(頑張れ)	82.6	大丈夫	13.0
同意	10	よかったな	90.0	そうやな	10.0
誘い	10	一緒にやろう(遊ぼう)	90.0	今日遊べる?	10.0
仲間意識	4	友達だよ	75.0	秘密だよ	25.0
その他	9	おはよう	66.7	バイバイ	11.1

(2) 実践(1)～(5)より

コミュニケーションの多い子について

どの手だてについても効果がみられた。日頃から「ありがとう」が言えているので、回数的には大きな変化は見られない。しかし、どの手だてにも素直に前向きに取り組んでいくので、内容に深まりや広がりが見られる。「ありがとう」がたくさんあふれる仲間づくりを進めていく上で、「ありがとう」を発信する存在であるといえる。

コミュニケーションの少ない子について

【「ありがとう」言えたかな?カード】そのものが、効果的であった。「ありがとう」を発したいという気持ちは持っているが、タイミングがとれなかったり、勇気が出なかったりして、ことばとして発せない傾向がある。具体的なカードや紙芝居を用いることで「ありがとう」を言おうとする態度がみられた。そして、「ありがとう」が言えた時には、ことばを交わす快さを味わい、友だちとの関わりを感じることができ、所属感につながるものと考えられる。

学級経営上気になる子について

粗暴、影響力の大きい子には、自己評価上の記録としては変化があまり見られなかった。しかし、教師の観察からは、少しずつ「ありがとう」を発する場面や思いやりのある行動が見られた。内弁慶傾向の子(園児)は、教師とのコミュニケーションを媒介とする手だてがまだまだ必要であり、子ども同士の仲間づくりへと広がっていくことが、今後の課題である。

友だち同士の関わりの少ない子は、[どうぞ・ありがとう方式] [ハッピーレター]などで自分を振り返り、互いの良さを認識することで、友だち同士の関わりに広がりができ、内面に変化が見られた。

### 変化の大きい子について

どの手だてにおいても効果が見られたことが、変化の増大につながったと考えられる。自己分析ができ、向上する意欲をもち、手だてによって、自分を見つめ直すことができた。「ありがとう」と言う回数が増えることが、自分自身の楽しみや励みになり、さらに意欲をかきたて、良い循環につながったと考えられる。

### 全体の様子

次のような効果が現れた。

- ・[どうぞ・ありがとう方式]の手だてにより、「ありがとう」を意識し、「ありがとう」を交わし合う体験につながった。また、自己分析・自己評価することができ、「ありがとう」を言う場の広がりにもつながった。
- ・[ハッピーレター]の手だてにより、学級の友だちや自分の良さを知り、認め合えた。また、学級での所属感・存在感などを確認し合うことができ、仲間意識の向上につながった。
- ・手だてを重ねる中で、「ありがとう」のことばが学級の中で多数交わされるようになった。
- ・最初は形から入った「ありがとう」が、ことばを交わし合うという心地よい経験を繰り返すうちに、心のこもった「ありがとう」につながった。
- ・「ありがとう」を通して、人間関係が穏やかになり、友だち同士の関わりが広がった。

このように、「ありがとう」の様々な手だては、学級の仲間づくりや現状を改善するには、効果があったといえる。また、[どうぞ・ありがとう方式][ハッピーレター]は、「ありがとう」があふれる仲間づくりにつながる手だてであると考えられる。

### (3) H16年度アンケート調査(6月・12月)より (調査人数:127名)

「ありがとう」が言えるようになった子の比率が増え、かつ(あまり思わない・思わない)の子が0%ということから、子どもの実態に即した手だてに効果があったということがわかる 表3。

また、休み時間に遊べる・がんばりをいっしょに喜んでくれる友だちが増え、友だちとの関わりがより深まったこともわかる 表4 表6。相談に乗ってくれる友だちについては、(あまり思わない・思わない)は減少しているが、(とても思う・少し思う)は増加はしておらず、他の手だてが必要であることを感じさせられる 表5。

「ありがとう」がたくさんあふれる仲間づくりのために、子どもの実態に即した手だてを工夫し、実践することで「学校・園が楽しい」学級づくりを図ることができた 表1。

調査項目のほとんどで(あまり思わない・思わない)を選択した子ども達が少なからず存在する。本年度の手だてだけに頼る取り組みでは、十分とはいえない。今後、(あまり思わない・思わない)の子ども達の存在を減少させる取り組みを工夫することが、重要な課題として残っている 表1 表2 表4 表5 表6。

表1		6月	12月	6月	12月	(%)
Q1 「学校は楽しいですか」	とても思う	34.1	37.6	67.4	74.4	
	少し思う	33.3	36.8			
	どちらでもない	22.2	17.6			
	あまり思わない	7.1	5.6			
	全然思わない	3.2	2.4	10.3	8.0	

表2		6月	12月	6月	12月	(%)
Q3 「自分のクラスは好きですか」	とても思う	34.9	39.5	68.2	72.6	
	少し思う	33.3	33.1			
	どちらでもない	19.8	20.2			
	あまり思わない	7.9	4.8			
	全然思わない	4.0	2.4	11.9	7.2	

表3		6月	12月	6月	12月	(%)
Q14 「学校で『ありがとう』が言えますか」	とても思う	52.0	49.6	75.6	87.2	
	少し思う	23.6	37.6			
	どちらでもない	18.9	12.8			
	あまり思わない	3.1	0.0			
	全然思わない	2.4	0.0	5.5	0.0	

表4		6月	12月	6月	12月	(%)
Q13 「休み時間に遊べる友だちがいますか」	とても思う	75.6	75.2	89.8	91.2	
	少し思う	14.2	16.0			
	どちらでもない	5.5	4.8			
	あまり思わない	3.1	0.0			
	全然思わない	1.6	4.0	4.7	4.0	

表5		6月	12月	6月	12月	(%)
Q11 「相談に乗ってくれる友だちはいますか」	とても思う	42.9	53.6	74.6	73.6	
	少し思う	31.7	20.0			
	どちらでもない	11.9	18.4			
	あまり思わない	5.6	4.0			
	全然思わない	7.9	4.0	13.5	8.0	

表6		6月	12月	6月	12月	(%)
Q16 「がんばりをいっしょに喜んでくれる友だちはいますか」	とても思う	32.5	40.3	56.3	61.3	
	少し思う	23.8	21.0			
	どちらでもない	22.2	24.2			
	あまり思わない	8.7	6.5			
	全然思わない	12.7	8.1	21.4	14.6	

## 5 おわりに

本年度は、子ども達が「楽しい」と感じることを追求しつつ、子ども同士の関わりを、教師がどう環境整備していくかに力点を置いて「学校・園が楽しい」学級づくりを図ってきた。特に、子ども同士の関わりを、教師がどう環境整備していくかを、「ありがとう」に着目して、力点を置くこととし、手だてを工夫し実践した。

5つの実践の結果、[どうぞ・ありがとう方式][ハッピーレター]の手だてなどは、友だちとの関わりを深めるために効果的であったことがわかった。

今後、「ありがとう」がたくさんあふれる仲間づくりのための手だてを、子どもの実態に即して、さらに探求していきたい。

## 確かな言葉の力を育てる指導の探究 - 「書くこと」を意識した授業へのアプローチ -

係長 檉野 友弥  
研究員 岡本 祐子（長洲小）  
" 濱田 玲子（武庫南小）  
" 小寺 佳苗（園和小）

### 【内容の要約】

昨今、子どもの国語力（読み書き）が話題になっている。なかでも“書くこと”が不得手と言われる。

そこで本研究は，“書くこと”を意識した授業へのアプローチを実践研究していく。そこから，“書く力”を育てる指導を探究する。次の2点をそれに迫る着眼点とする。

手紙文を手立てとする「書くこと」への興味・関心を高める授業開発。

体系的な手紙文指導により「書く力」が育つ指導の考察。

実践例は、3学年（2，3，5年）を挙げ指導案を提示している。

キーワード：書くこと，書く力，手紙文，短作文，招待状，図工展，音楽会，  
作文指導，子どもの変容，指導と手だて，真情，形式，野口シカ，  
授業，指導計画

1	はじめに	37
2	本年度研究の概要	38
3	実践事例	38
(1)	実践事例2年 「手紙を書こう - 気持ちいっぱいのお手紙 - 」	38
(2)	実践事例3年 「手紙を書こう - 簡単な形式を知ろう - 」	44
(3)	実践事例5年 「野口シカの真情に学ぶ」	50
4	おわりに	56

## 1 はじめに

昨今、子どもの国語力（読み書き）が話題になっており、なかでも“書くこと”の不得手が指摘されている。

昨年度の研究では、子どもの“書けない”原因は、鶴田清司（都留文化大学）の指摘する以下の三つであるとした。

書けない子どもの意識	原因
a 長く書くのがめんどう	大量な文章を書かなければならないという義務感 （作品主義・大作主義）
b 書き方がわからない	作文技術が習得できていない（作文技術の曖昧さ）
c 書くことがない	自分の日常にテーマを見つける目を持っていない （出来事・行事作文中心）

（ 鶴田清司著『21世紀授業づくり75 国語の基礎学力を育てる』より）

このことから、「書く力」を育てる授業開発の要点は次の3つであることが分かる。

- a 長く書く必要がない。
- b 「書き方」を明確にする。
- c 子どもの日常にテーマを見つける。

この3つの要点を全て満たしているものとして、手紙文の指導が考えられた。

上記のaとcに関しては、手紙文の特性上周知の事実である。またbの『書き方』を明確にする」に関して説明を加えると、手紙には日本古来から伝えられている以下のような慣用形式がある。

頭語	前文	主文	末文	結語	後付け
	季節のあいさつ、お礼、 相手を気づかう言葉、 おわび、など	一番伝えたいこと	相手を気づかう言葉、 今後のお願い、 また会いたい気持ち、など		

このような慣用形式にのっとり書くことで、「書き方」を明確にすることができる。また上記a～c以外にも、手紙文は相手意識・目的意識が明確であるため書く動機付けがしやすいことや、コミュニケーションの楽しさを知り得る、という利点もある。

昨年度の研究では、手紙文の指導が子どもの書く力を育てるために有効であることが明らかになった。

本年度は手紙文の提示題材等も工夫する中で、小学校における低・中・高学年の発達段階に応じた、“書くこと”を意識した授業へのアプローチを更に進めた。

## 2 本年度研究の概要

本年度は、手紙文を手立てとする授業開発を更に進めることとした。授業開発を進めるにあたり、体系的な手紙文指導を積み重ねることが“書く力”を育てることにつながると考え、学年に応じた実践を行うこととした。

そこで学習指導要領に基づき、それぞれの学年に応じた手紙文指導におけるねらいを次のように設定した。

低学年	楽しんで伝えたいことを簡単な手紙に書く
中学年	相手や目的を意識して、ある程度形式をふまえた手紙を書く
高学年	書式や様式を活用して依頼状、礼状、案内状などを書く

以下に、手紙文を手立てとした書く力を育てるための実践事例を示していく。

## 3 実践事例

(実践事例中の意識調査「学級の傾向」の蘭に示されている数値は、個別アンケートで「とても好き」を+2点、「好き」を+1点、「どちらでもない」を0点、「あまり好きでない」を-1点、「きらい」を-2点として学級全体の回答を集計したものである。)

### (1) 実践事例2年 「手紙を書こう - 気持ちいっぱいのお手紙 - 」

#### 1. 子どもの実態 - アンケート調査より -

本年度担任している学級の「国語科」の話す、聞く、書く、読むことに関する意識調査を以下に示す。

< 国語科に関する子どもの意識調査 (平成16年9月) >

質 問 内 容	学級の傾向
あなたは、みんなの前で感想や思ったことを言うのが好きですか。	+ 8
あなたは、先生や友達の話聞くことが好きですか。	+ 10
あなたは、感想や思ったことを書くことが好きですか。	+ 6
あなたは、自分で本を読むことが好きですか。	+ 13

アンケートの結果から、「国語科」の話す・聞く・書く・読むことのうち、「書くこと」についての好感度が一番低いのが特徴である。そこで、学習指導要領による低学年の「書くこと」の基本である「楽しんで表現しようとする態度」を育てることに留意しながら手紙文に関する授業を進めることとした。

#### 2. 実践の概要 - 図工展の招待状 -

##### 単元の目標

「本年度研究の概要」で述べたように手紙文に関して低学年がつけるべき力は、「楽しんで伝えたいことを簡単な手紙に書く」である。この留意点をふまえて、次のような単元の目標をたてた。

##### 単元目標

- ・伝えたいことを簡単な手紙に書くことができる。
- ・手紙を書くことで書く楽しさを味わうことができる。

教材「招待状」について

子どもたちは、体育大会の見どころやがんばったところをワークシート形式の招待状に書いて、家族の人から返事をもらって嬉しかったという経験がある。今回も子どもたちが楽しんで書くことが出来るような状況を設定することによって、書くことの意味を実感して書く力を伸ばしたいと考えた。そこで、家族の人に「ぜひ来てほしい」という相手意識を持った招待状を書く活動を取り入れることにした。

単元計画

単元名は「手紙を書こうー図工展の招待状ー」とし、全3時間の計画とした。

単元計画と子どもの意識の流れを、以下に示す。

単元計画

<子どもの意識の流れ>

第一次（2時間） 「図工展の招待状を書こう」	第1時 「学習の見通しを持とう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「図工展の招待状」を家族に書くことを知る。</li> <li>・体育大会の招待状(ワークシート)を見て思い出す。</li> <li>・日時や作品の紹介などを書く。</li> <li>・来てほしい気持ちを書く。</li> </ul>	誰に図工展の招待状を書こうかな。
	第2時 「前時に書いた手紙を調べよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に書いた手紙(招待状)を読み合う。</li> <li>・転校生にあてた手紙を調べる。(気持ちが書かれているところにハートマークのシールを貼る。)</li> <li>・紹介された手紙に気持ち以外の文が書かれていることに気づく。</li> </ul>	体育大会の招待状ではどんなことを書いたかな。 見に来てほしい気持ちも書いてあるよ。 気持ちのハートが沢山ついたね。こんな手紙をもらったら嬉しいだろうな。
第二次（1時間） 「手紙を完成しよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・送る相手を思い、ていねいに清書する。</li> <li>・書いた後で声に出して読み返す。</li> <li>・誤字、脱字等がないか調べる。</li> </ul>		はじめの言葉とおわりの言葉がかいてあるね。 読んでくれる人が喜んでくれるように、丁寧に書こう！間違いはないかな。

### 3. 授業の実際と成果

#### 第一次 第1時

「招待状」を想起させるため、体育大会の招待状を紹介して、伝えたいことは何かを確認(日時,場所,作品の説明など)させた。子どもたちは以前書いた招待状から、自分の気持ちが書かれていることに気づいた。その結果、家族に来てほしい気持ちや作品作りで頑張ったことや苦労したことを書こうということになった。

#### 体育大会の招待状の中から

<ul style="list-style-type: none"> <li>・大玉ころがしをがんばってところがすからおうえんしてね。まん中には、マットでお山を作っているよ。</li> <li>・ラジオ体操はちょっとむずかしいけどがんばるよ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダンスはきれいな光るかざりをもって、おどるよ。ぱつになったり円になったりするところが、むずかしいよ。</li> <li>・おべんとうは肉だんごを作ってね。</li> <li>・走りがはやい人ばかりだけど、がんばる。</li> </ul>
--	--

#### 第一次 第2時

第一次第2時は、来てほしい気持ちを書くことを中心に以下の流れで授業を行った。  
学習指導案

学 習 活 動	教師の支援	評価の観点
1. 前時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フラッシュカードを提示して、学習課題と学習方法を明確にする。</li> </ul>	
図工展の招待状を「手紙」で書こう		
2. 図工展の招待状を読み合う。 ・家の人にどんな気持ちが表せるか考える。 (頑張ったところ、見てほしいところ、来てほしい気持ちなど)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちが書かれているところにシールを貼らせて、一目でわかるようにする。</li> <li>・気持ちがたくさん書かれている手紙がもらって嬉しい手紙になることに気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちが書かれているところを読み取れているか。</li> <li>・友だちの手紙を読んで自分の手紙と比べることができたか。</li> </ul>
3. 転校した友だちにあてた手紙を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前文と末文が書かれていることに気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちや用件以外の部分があることに気づいたか。</li> </ul>
4. 簡単な前文と末文を考えて、短冊に書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他人の家を訪ねた時の寸劇を見せて、前文と末文の必要性に気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前文と末文が書けているか。</li> </ul>
5. 短冊を並べて読んでみる。 6. 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わかりやすいように色別の短冊にする。</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・次時の予告をする。</li> </ul>		

<転校生へあてた「お別れの手紙」>

<Tくんへのお別れの手紙>

Tくん元気ですか。ぼくはすごく元気です。一学期がおわってまた会えると思ったら会えませんでした。ぼくはTくんのことは、ぜったいわすれません。すごたのしかつたです。ぼくはTくんが大すきでした。すごくかなしいです。あそんでくれてありがとう。

Sより

Tくん元気ですか。むこうの学校はなれましたか。わたしはTくんのにこってわらっているのが、おもしろかったです。でもTくんのことはわすれていません。むこうの学校のともだちはいっぱいできましたか。また、学校にあそびにきてください。まってます。

Mより

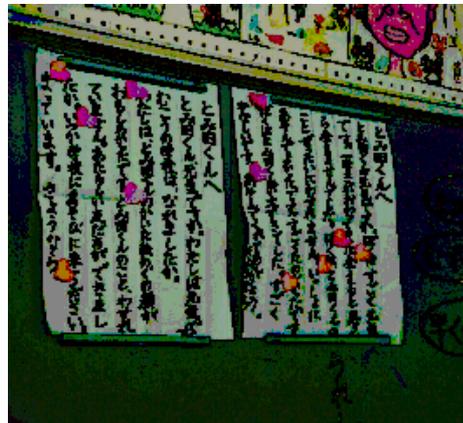
この手紙の中の気持ちが表れているところにハートマークのシールをつけて調べていく活動をした。すると、書いた人の気持ちがたくさん書かれていることに気づいた。

あわせて、気持ちがたくさん書かれている手紙は「もらって嬉しい手紙」であることも子どもたちは実感できたようである。

また、自分の書いた手紙（図工展の招待状）を友だちと交換して読み合い、気持ちの表れているところにシールを貼る活動によって、自分の手紙について意識することが出来た。

<ハートマークがいっぱいの手紙>

さらに、気持ちが書かれているかという視点に加えて、文の構成（はじめのあいさつなど）に気づくこともできた。しかし、簡単な手紙の形式に気づかせるため、（はじめ） - （伝えたい気持ち） - （おわりの言葉）として、短冊に分けて書く学習活動は、かえって子どもたちを混乱させてしまった。



その原因は、低学年の子どもたちの文は、無意識のうちに前文も末文も手紙の中(本文)に書かれている場合があるということである。やはり、(はじめのことば)や(おわりのことば)を書く活動は、発達段階から「相手や目的を意識して、ある程度の形式をふまえた手紙を書く」というねらいのある中学年へと移行しなければならなかったと再認識した。

## 第二次

第二次では、手紙を完成しようと呼びかけ、各自が清書した。送る相手を思い、ていねいに書いていた。書いた後で必ず声に出して読み返すよう指示したので、誤字や

脱字に気づく子がいた。

生活科の学習も含めて作った封書に入れて各自で手渡した。事前に家庭へ連絡を取り返事がもらえるようにした。

以下、招待状の手紙文と保護者からの返事を記す。

< 図工展の招待状 >

おうちの人へ

11月19日(金)と20日(土)に図工てんがあります。場しよは体いくかんです。絵は、「ふしぎな生きもの」と「おいもランド」と「虫たちのうんどうかい」の絵のどれか一つをえらびます。「ふしぎな生きもの」は赤とかの色を手でぬりました。白いせんはポスターカラーでぬりました。工作は、未来の町ではこをどんどんポンドでつみあげていきました。さいごはアルミホイルでつつみました。きれいなのできてください。2年生はみんなアルミホイルでつつんでいるから、きれいです。くろうしたときは、はこをつみあげていくのとアルミホイルでつつむときです。ぼくは「おいもランド」をえらびました。ほんもののいもを見てかきました。たのしかったです。早くお母さんに見せたいです。絵も見てください。電気にてらすとアルミホイルが光るのできれいです。絵はかべにつけているので見て下さい。ぼくもみんなの工作とか絵を見たいです。20日までなので早くきてください。

11月17日(水) U・Rより

大すきなお母さんとお父さんと へ

11月19日(金)から20日まで図工てんがあつて場所は体いくかんでやります。絵と工作があります。絵はおいもランドと虫たちのうんどう会とふしぎな生きものです。わたしは、おいもランドがえらばれたよ。工作は未来の町です。人間は紙ねんどで作ったよ。それからはこを組みたててアルミホイルでかこんだよ。やねのところをアルミホイルでかこむところがむずかしかったよ。「みんなの家」です。ビーズをつける時たのしかったよ。大きいビーズをつける時とれるかなーと思ったらとれました。でも、もう一回やってみるとできたよ。それが本とうの家だったらよかったなあ。

おいもランドのいもは、赤と青と黄色をつかってぬったよ。赤と青でいもをぬったよ。赤をこくぬると赤むらさき、青をこくぬると青むらさきになるよ。

工作もむずかしくて「ぜったいできない」と思ったけどできたよ。

お母さん、ざいりょうをあつめてくれてありがとう。人間がへんになったけど見てね。かならず をつれてきてね。まってるよ。ぜひぜひきてね。早くきてください。

11月17日(水) I・Kより

(注：手紙文の中の下線は気持ちが書かれていると思われるところである。)

作品についての説明や図工展に来てほしいという素直な気持ちを書いていることがわかる。一番身近な家族という相手意識を持って書いた結果であると思う。

< 保護者からの返事 >

ちゃんへ

お手紙ありがとう。図工てんは一番に二年生を見ました。あきばこやペットボトルがキラキラ光る町にへんしんしていましたね。 ちゃんのおうちも上手にできてたよ。やねのもようもかわいかったよ。ふしぎな生きものの絵はしっぽが3本ありはねがあるネコだったね。のびのびと上手にかけてたよ。 お母さんより

くんへ

しょうたいじょうありがとう。お手紙を読むと絵は何をかいたのか、どこがむずかしかったのかどんなふうにしたのかよくわかりました。お母さんにとっては くんのが一番かっこよかったです。 お母さんより

くんへ

とても気持ちがこもった手紙どうもありがとう。図工てん見ました。とてもじょうずにできていましたね。大きくなったなあとお母さんはうれしく思います。のびのびしたたのしそうな絵だったよ。いっしょうけんめい作ったのがよくわかりました。 よくがんばりましたね。 お母さんより

上記のように、保護者からの返事をもらうことで、さらに書くことが楽しくなった子どもが増えた。

4. まとめにかえて - 子どもの変容 -

以上、本年度の実践研究について述べてきたが、子どもの意識はどう変化したか、授業後に行ったアンケートの結果を以下に示す。

< 国語科に関する子どもの意識調査 >

質 問 内 容	学級の傾向	
	12月	9月
あなたは、みんなの前で感想や思ったことを言うのが好きですか。	+ 10	+ 8
あなたは、先生や友達の話聞くことが好きですか。	+ 9	+ 10
あなたは、感想や思ったことを書くことが好きですか。	+ 15	+ 6
あなたは、自分で本を読むことが好きですか。	+ 12	+ 13

上記の結果から「書くこと」について、9ポイントふえている。4項目の中で「書くこと」が一番好きな項目になっていることがわかる。これは、授業後も教材や交流活動の後で常に相手意識を持った手紙文を書く活動を取り入れたことにより、書く楽しみを味わうことができたからではないだろうか。また、家族の協力も得て返事をいただいたことで、手紙が心と心を結ぶコミュニケーションの役目を果たしていることにも気づいたようである。国語だけでなく、他の教科でも自分の書いた文を読み返す子どもが増えてきた。誤字や脱字など表記上の問題に加えて、表現を付け足したり簡単な推敲（自己評価）をしたりする子どもの姿も見られた。

## (2) 実践事例3年 「手紙を書こう - 簡単な形式を知ろう - 」

### 1. 子どもの実態 - アンケート調査より -

本年度担当学級の「書くこと」に関する子どもの意識調査を、以下に示す。

< 「書くこと」に関する子どもの意識調査（平成16年9月） >

質 問 内 容	学級の傾向
あなたは、黒板や教科書に書かれたことをノートに写すことが好きですか。 (視写)	- 21
あなたは、感想や思ったことを書くことが好きですか。	- 28

【特徴】 文字を単に写すこと（視写）自体が嫌いである。ましてや、自分の考えや感想などの気持ちを書くことはもっと嫌いであり、5月に書いた作文では、自分の思いが書けない子どもが学級の1/4もいた。

これらの特徴から、本年度の研究は、次の2点を重点目標にして授業開発に取り組んだ。

< 研究の重点目標 >

「書くこと」によって自分の気持ちや伝えたいことを相手に伝える楽しさを感じさせる手立ての開発  
だれもが簡単に書け、書けたことでの達成感を感じさせる手立ての開発。

### 2. 実践の概要 単元「手紙を書こう」 -

単元目標について

「手紙を書くこと」の中学年がつけるべき力は、「本年度研究の概要」で述べた「相手や目的を意識して、ある程度形式をふまえた手紙を書くこと」である。この目標がどの子ども達成できるように次のような単元目標をたてた。

< 単元目標 >

- ・書く相手や目的を意識し、書くべき事柄を選択・構成し、手紙を書くことができる。
- ・相手を尊重しながら、自分が言いたいことを伝えることができる。
- ・手紙の書き方の基本的な形式を知ることができる。
- ・封書の書き方を知り、手紙を届けることができる。

本単元を通して、簡単な形式をふまえることが、相手を尊重する手立てであることを知らせ、低学年で学んできた「伝えたいことを簡単な手紙に書くこと」から中学年の「ある程度形式をふまえた手紙を書くこと」へと学習を進めていきたい。加えて、手紙文の特性を生かし、自分の表現を見直すことも指導したい。

教材について

手紙の簡単な形式（前書き、主文、後書き、後付け）を学習するにあたり、作成した。形式が整っているだけでなく、心遣いがある・丁寧である手紙とそうでない手紙の二つの教材文（おばあちゃんへの手紙）を作成した。二つの手紙文は主文の内容（伝えたい内容）を全く同じにし、二つを比較すると形式の有無が明確になるようにした。また、形式の整った手紙文は、文末のみを丁寧にすることで手紙をおくる相手をはっきりと意

識させるようにした。さらに、二つの手紙の対比により相手に対する気遣いの気持ちに気づき、もらってうれしい手紙について考えさせたい。(三次で提示した二つの手紙教材文については、「3. 授業の実際と成果」で紹介する。)

単元計画について  
単元計画と子どもの意識の流れは以下である。

<子どもの意識の流れ>

<単元計画(全6時間)>

第一次(1時間) 「音楽会の招待状を書こう」	・いつ、どこで、だれが、何をどうするかの大仕事柄を逃さず主文を書く。 ・来て欲しい気持ちを書く。	大切なことはなんだろう。 一生懸命練習してきたので聞きに来て欲しいな。
第二次(1時間) 「招待状の返事を読もう」	・返事もらった経験や返事を書いた経験を紹介し合う ・音楽会の招待状の返事を読み、友達がどんな招待状を出したのか想像し、心の交流を読み取る。 ・手紙の良さに気づき、もらってうれしい手紙とは何か考える。	おうちの人は喜んでいる様子。どんな招待状を出したのだろう。 思いが詰まった手紙っていいな。
第三次(5時間) 「手紙を書こう。」	第1時 「書く相手と内容を決め、本文を書こう。」	・だれに、どんな手紙を書くか考える。 誰にどんな手紙を書こうかな。
	第2時 「簡単な形式を知ろう」	・手紙の基本的な形式(前書き、本文、後書き、後づけ)を知る。 ・手紙の前書き、後書きを書く。 相手を気遣う言葉が入った手紙もいいな。
	第5時 「手紙を清書しよう」	・誤字脱字や言葉づかいに気をつけて手紙を清書する。 手紙は、言いたいことを書く本文の他に前書き、後書きがあるんだな。
	第6時 「封書を書き送ろう」	・封書の書き方(宛名、住所、宛名の位置関係)を知る。 ・封書を書き、ポストに投函する。 手紙を読んだ相手はどんな気持ちだろう。喜んでくれるかな。 きちんと届くかな。返事が返ってくるかな。

### 3. 授業の実際と成果

#### 第一次

第一次は、書く目的、伝えるべき内容がはっきりしている「音楽会の招待状を書くこと」から学習を進めていった。目的や内容は指導者が提示し、気持ちのこもった手紙を書くことに焦点を絞る。一学期から取り組んできた音楽会への子ども達の意気込みは強く、がんばりを見てもらいたいという気持ちは大きい。自分の気持ちを表現するのが苦手な子ども達ではあるが、ここでは比較的素直に表現できた。具体的には、懸命に練習してきた気持ちや見に来て欲しい気持ちの一つ一つをハート型のワークシート(ピンク

色)に短文で書かせた。次にそれらの中から3～4つ選択させ、前述の伝えるべき事柄と共に内容を構成できるようにした。ワークシートの一部を紹介する。

<子どものワークシートより>

ね。 事がひまならきて  
おかあさんは  
これるかなあ。仕

しきしゃをし  
っかり見るよ  
うにがんばっ  
たよ。

1 学きから  
れんしゅうし  
てきたよ。

きてほしい。  
ぜったい見に

おじいちゃん、お  
ばあちゃんもきて  
くれるかな。

リズムがむず  
かしかつたけ  
どがんばって  
れんしゅうし  
たよ。

音楽会のしゅうたいしゅうしを  
書いて招待状を書いてほしい。

第一次での成果として、書くことが苦手(特に気持ちを書くことが苦手)なA君とB君が書いた招待状を紹介する。

<A君の例>

<A君の意識と学習前の実態>

- ・視写 嫌い
- ・感想や思ったことを書く 嫌い
- ・5月の作文では筆が進まず、一言も書けなかった。

<A君が書いた手紙>

おとうさん、おかあさんへ

11月13日九時半からたいいくかんでぼくたちは音楽会をします。  
リコーダーは、「うんめいだ」、うたは「赤いやねの家」合奏は「地上のほし」です。  
6番目です。  
くふうしたことは地上のほしのリズムです。リコーダーがむずかしいので特にぼくはがんばりたいです。  
リコーダーもむずかしいけどがんばりますので、見に来て下さい。おねがいします。

より

<B君の例>

<B君の意識と学習前の実態>

- ・視写 嫌い
- ・感想や思ったことを書く 嫌い
- ・5月の作文では気持ちや自分の考えが全く書けず、できごとのみ書いていた。日記でもできごとしか書かない。200文字がかけない。
- ・作文を全く読み返さない。

<B君が書いた手紙>

おうちの人へ

11月13日九時半からたいいくかんでぼくたちは音楽会をします。(前部分略)

ぼくは、いっしょうけんめいがんばってれんしゅうしました。ぜひきて、ぜひ見て、自分の耳で聞いてください。なんかいもれんしゅうして、やっとうまくなりました。ぜひ、きてください。

より

左に示したように、書くことが苦手な子どももワークシートに書き込み、選択構成していくうちに手紙を完成することができた。しかし、まだここでは形式にはふれず、相手を意識した手紙を書き、伝えるべき事柄と自分の気持ちを伝えることに重点をおかせた。ほとんどの子どもが手紙を読み返し、間違いを訂正していた。

第二次

第二次では、招待状の返事や音楽会終了時のアンケートを子ども達に紹介し、心をつなぐ手紙のやりとりについて考えさせた。手紙をもらう立場にたって考えさせ、届いた返事を読むことで学級の友達が実際に出した手紙について検証した。

第三次

第三次の第1時では、「誰に」「どんな」手紙を出すのかを考え手紙の主文を書いた。この時第一次で学習した書く目的、伝えたい(伝えるべき)内容や気持ちをワークシートに書き出させ、選択・構成させた。第2時は、手紙の簡単な形式を学習させた。「教材について」述べた形式が整っている・心遣いがある・丁寧である手紙とそうでない手紙の二つを対比させることで、もらってうれしい手紙について考えさせた。第2時の目標、授業展開は次の通りである。

< 第2時の目標 >

- ・手紙の基本的な形式(前書き, 本文, 後書き, 後づけ)を知り, 自分の手紙を見直すことができる。
- ・手紙の前書き, 後書きを書くことができる。

< 授業の展開 >

学習活動	教師の支援	評価の観点
1 提示された1つ目の手紙(形式なしの手紙)を読み, 内容を確認する。 ・誰が・誰に ・どんな手紙をだしたのか。	・手紙の用件がわかるように板書する。	・手紙を読み, 内容を発表できたか。
2 もう一方の手紙を読み, 内容を確認し気づいたことを発表する。	・それぞれの手紙の良さをわかりやすく板書する。	・2つの手紙の違いが見つかりられたか。
もらってうれしい手紙はどんな手紙か考えよう。		
3 手紙の形式を知る。	・形式が一目でわかるように手紙を色別に囲む。	・手紙には形式があることがわかったか。
4 自分の手紙を見直す。 ・前書きはあるか。 ・後書きはあるか。 ・自分が書いていた前書き, 後書きを発表する。	・前書き, 後書きの例をあげ, 自分の手紙から前書き, 後書きを見つけやすいようにする。 ・前書き, 後書きがない子ども達には, 後でつけたすことを伝え, 安心させる。 ・前書きは選びやすいように手紙の内容別に板書する。	・自分の手紙を見直し, 前書き, 後書きがあるかどうか確認できたか。
5 前書き, 後書きを付け足す。		・自分の手紙にあった前書き, 後書きを見つけることができたか。
6 本時の学習を振り返る。 ・次時の予告を聞く。		

展開で使用した二つの教材文を次に紹介し、あわせて子どもの反応も紹介する。

<主文のみの手紙>

[本文] あと一ヶ月で冬休み。一月三日のお昼に家族でおばあちゃんの家へ遊びに行く。お正月は毎年、いとも集まってくるので楽しみ。いっしょにおいしいお料理を食べよう。

<形式の整った手紙>

[前書き] おばあちゃん、長い間会っていませんが、お元気ですか。  
冬になるとひざがいたむようですが、今年は大いじょうぶですか。

[本文] あと一ヶ月で冬休みです。一月三日のお昼に家族でおばあちゃんの家へ遊びに行きます。お正月は毎年、いとも集まってくるので楽しみです。いっしょにおいしいお料理を食べましょう。

[後書き] では、その日まで。寒いのでかぜをひかないようにしてください。  
さようなら

[後付け] 11月20日

さま

(注：下線は、丁寧な表現を、二重下線は相手を気遣う言葉を示している)

形式が整った手紙文を提示したときの子どもの反応は、以下の通りである。

<授業での子どもの意見>

- ・二重線のところが、相手を心配している。
- ・下線のところが丁寧で相手を大切にしている。
- ・(形式が整った手紙の方は) どんどん読みたくなる。
- ・(形式が整った手紙の方は) 用件以外のことが書いてある。
- ・「さようなら」とあいさつが書いてある。
- ・「11月20日」と手紙を書いた日付が書いてある。
- ・(形式が整った手紙の方は) 相手へのやさしさがある。

子どもは、二つの手紙を比べることで前書きや後書きに書いてある相手への気遣いの気持ちに気づいた。二つの手紙の主文が文末以外同じであったことで形式が浮き彫りになった。また、形式有りの手紙の前書きと後書き部分を色分けすることでその二つの部分に相手への気遣いが詰まっていることにも気づくことができた。さらに、形式の整った手紙を通して「自分の気持ちを表現すること」だけでなく「相手を気遣う気持ちを表現すること」の良さにも気づいていた。

前書きや後書きの存在を知り、自分の手紙を見直し前書きや後書きを付け足していくことが本時の二つ目の活動であった。既にこの二つを書いている子どもも多数おり、自分の手紙の中に前書きや後書きがあるかどうかまずは探させた。まだ書いていない子は、教師が紹介した例文を参考に前書きと後書きを書き込んでいった。主文を書いた段階で後書きが書けており、後から前書きと後付けを付け足したC子さんの手紙を紹介する。

< 清書後の子どもの手紙 >

< 前書き > おじいちゃん、おばあちゃんお元気ですか。わたしは、元気です。おかあさん、こちらのおじいちゃん、おばあちゃんも元気です。

< 本文 > 金曜日だったかな？お手紙ありがとう。うれしかったよ。また、おばあちゃんの家におかあさんとおとうととで行くね。楽しみにしておいてね。

< 後書き > おじいちゃん、おばあちゃん冬休みまで元気でいてね。まってね。じゃあ、さようなら。また、おへんじくださいね。

さようなら

< 後付け > 11月29日 月曜日

C子

おじいちゃん、おばあちゃん

(注：太字は学習前にはなかった文で、学習中に付け足した文である。)

以上のような授業展開を行って次のような反省点があげられた。

- ア 子どもが書く手紙の内容や種類をそろえておくことの必要性。  
初めて形式を学習する時は、手紙の内容や種類をそろえた方が形式の明確化がはかれる。多様な種類の手紙の中から前書き、後書きを自分で見つけるのが大変難しかったようだ。  
また、相手を気遣う文を書くことができてもそれを前書きと後書きどちらに入れたらよいのか混乱していた子どもが多かった。二つの違いを明確化する為には手紙の内容や種類を同一化する必要がある。
- イ 手紙を書く機会を増やすことの必要性。  
中学年で形式を学習するならば、低学年でもっと手紙を書くことの楽しさを味わう活動を増やすべきである。

4. まとめにかえて - 子どもの変容 -

(1) で書いた子どもの意識はどう変わったか。授業後のアンケートの結果を以下に示す。

< 「書くこと」に関する子どもの意識調査 (平成16年12月) >

質 問 内 容	学級の傾向	
	12月	9月
あなたは、黒板や教科書に書かれたことをノートに写すことが好きですか。(視写)	- 10	- 18
あなたは、感想や思ったことを書くことが好きですか。	- 1	- 20

【子どもの変容1】 より、視写は研究前に比べて8ポイント増えた。

【子どもの変容2】 より、感想や思ったことを書くことは、19ポイント増えた。

【子どもの変容3】 5月の時点で作文が200文字書けなかった子ども達も手紙を最後まで書き上げた。

このことから、手紙が書けるようになったことを通して、自分の気持ちを表現することが好きになった子ども達が増え、視写もあまり億劫がらなくなったと考えられる。また、本年度の研究の成果として、

「書くこと」を通して、子ども達は自分の気持ちや伝えたいことを相手に伝える楽しさを感じられるようになった。

誰もが簡単に書ける手立てを用い、書けたという達成感をつませることで子どもの書く力が伸びてきた。

以上の2つがあったと言える。

(3) 実践事例5年 「野口シカの真情に学ぶ」

1. 子どもの実態 アンケート調査より

本年度担任している学級の「国語科」と「書くこと」に関する意識調査の結果を以下に示す。

<「国語科」と「書くこと」に関する子どもの意識調査(平成16年9月)>

質問内容	学級の傾向
あなたは、国語の学習が好きですか。	- 1
あなたは、黒板や教科書に書かれたことをノートに写すことが好きですか。(視写)	+ 2
あなたは、感想や思ったことを書くことが好きですか。	+ 3

【特徴1】 より国語科に関する好感度は良くも悪くもなく、「好き」と「きらい」が拮抗している状態である。

【特徴2】 より「視写」と「感想や思ったことを書く」には差が見られず、どちらもあまり好感度が高いとは言えない。このことから、「感想や思い」を書くのが苦手なわけではなく、「書く」こと自体を億劫と感じている子どもの実態がうかがえる。

この2つの特徴から、本年度の研究は、

一人一人に主体的な関わりをさせ、言葉を通して学ぶことを「おもしろい」と感じさせる実践を工夫し、国語科に対する意識改革を目指すこと。

「書くこと」に楽しさや価値を見いだせるよう工夫し、「書くこと」の良さを感じさせる手立てを明確にすること。

以上の2点に留意しながら進めた。

2. 実践の概要 野口シカを用いて

教材(野口シカの手紙)について

手紙の慣用形式については、昨年度の研究紀要や「はじめに」でも述べているので(紀要41号参照)重複を避ける。昨年度の研究で、形式を超えた情感豊かな手紙文を作るために、名文として有名な野口シカの手紙を子ども達に読ませることが有効ではないかということが話題になった。そこで本年度は野口シカの手紙を教材として使うこととした。

野口英世の母親として有名な野口シカは、貧農の出であるためもともと文字の読み書きすらできなかった。そのシカが、アメリカ留学中の息子英世に便りを出したい一心で文字を習い、つたない文章で書いた手紙が、有名な「野口シカの手紙」である。以下にその文章を紹介する。

<野口シカの手紙>

おまいの・しせ(出世)にわ・みなたまけ(驚ろき)ました・わたくしもよるこんでおりまする・なかつのかんのんさまに・さまにねん(毎年)・よこもり(夜籠り)を・いたしました・べん京なぼでも(勉強はいくらしても)・きりかない・いぼし(烏帽子)・ほわ(には)こまりをりますか・おまいか・きたならば・もしわけ(申し訳)かてきましよ・はるになるト・みなほかいド(北海道)に・いて(行って)しまいます・わたしも・こころぼそくありまする・ドか(どうか)はやく・きてくだされ・かねを・もろた・ことたれにもきかせません・それをきかせるトみなのれて(飲まれて)・しまいます・はやくきてくたされ・はやくきてくたされ・はやくきてくたされ・いしょ(一生)のたのみて・ありまするにし(西)さむいてわ・おかみ(拝み)・ひかし(東)さむいてわおかみ・しております・きた(北)さむいてわおかみおります・みなみ(南)たむいてわおかんておりまするつたち(一日)にわしをたち(塩断ち)をしております・み少さま(栄晶様)に・ついたちにわおかんてもろておりまする・なにおわすれても・これわすれません・さしん(写真)おみるト・いただいておりまする・はやくきてくたされ・いつくるトおせて(教えて)くたされ・このへんちちまちて(返事を待つて)をりまする・ねてもねむられません  
(野口英世記念館の資料より)

文字すら知らなかったシカが手紙文の慣用形式を知っているはずはなく、自分の思いだけをただ切々と綴っている文章であるが、不思議と読み手の心を打つ。

梅棹忠夫氏(注1)が、手紙に嘘偽りのない真実の気持ちを書くことを「形式」に対し、「真情」と言った。シカの手紙は、この「真情」が溢れているため名文として知られるようになったのだろう。

授業実践に当たり、この教材から子ども達に以下のような気付きをもたらしたい。

<野口シカの手紙から、子ども達に気づかせたいこと>

自分の思いを手紙で伝えるためには、「形式」と「真情」の2つを大切にしなければならぬ。

単元の目標と単元計画

「本年度研究の概要」で述べた手紙文に関して高学年がつけるべき力は、「書式や様式を活用して依頼状、礼状、案内状などを書く」である。また、上で述べた教材の特性をふまえ、次のような単元の目標をたてた。

<単元目標>

- ・手紙の慣用形式(前文・主文・末文)を知り、それを用いて礼儀正しい手紙文を書くことができる。
- ・野口シカの書いた手紙を読むことを通して、手紙に真情(いつわりのない心)を書くことの大切さに気づくことができる。
- ・真情のこもった手紙を慣用形式に沿って書くことができる。

また、単元名は「心を結ぶ手紙文をつくろう」とし、全5時間の計画とした。

＜単元計画＞		子どもの意識の流れ	
第一次（2時間） 「音楽会の招待状を書こう」	第一時 「主文を書こう」	・短冊に、音楽会の概要、見所や来て欲しい気持ち、を書く。	音楽会の案内状を書こう！
	第二時 「前文・末文を書こう」	・手紙の慣用形式を知る。 ・前文、末文をそれぞれ短冊に書く。 ・短冊をワークシートに貼り、手紙を完成させる。	この間書いた文章だけではだめなの？ 手紙には形式が大事なんだな。 形式がないのに、いい手紙もあるの？！
第二次（1時間） 「野口シカの手紙を読もう」	・野口シカの手紙を読み、話し合いを通して手紙を書く時には「真情」が大切であることに気づく。		形式も大事だけど、真情を書くことも大切なんだな。
第三次（2時間） 「心を結ぶ手紙文をつくろう」	第1時 「書く相手と内容を決めよう」	・だれに、どんな手紙を書くか考える。 ・ワークシートに手紙を書く。	形式と真情、両方がそろった手紙を書いてみよう！
	第2時 「手紙を完成させよう」	・手紙を便箋に清書する。 ・お互いの手紙を読み合う。	こんな風に書いたら思いが伝わるんだな。

### 3. 授業の実際と成果

#### 第一次

第一次では、手紙の定型を用いて昨年度と同じ実践を行った。「本年度研究の概要」で考えたねらいに基づいて、手紙のテーマは「音楽会の案内状」に統一した。

第一次での成果として、書くことが苦手なH君とMさんの例を以下に紹介する。

＜H君の実態＞	
・視写	きれい
感想や思ったことを書く	きれい（9月に行ったアンケートより）
H君の書いた手紙	
おばあちゃんへ	
前文	こんにちは、おばあちゃんの家では柿がとれるからくってると思う。ずずしくなってきたのでかぜをひかないように。
主文	音楽会のお知らせ。11月3日9時30分開場（略） 「情熱大陸」はかっこよくて、「花の首飾り」はとてもむずかしいです。でも、練習してきたから来てください。
末文	今後も長生きしてください。クリスマスもちかくなってきたのでプレゼントもおわすれなく。



< 第二次の学習指導案 >

学習活動	教師の支援	評価の観点
<p>1 .前時の学習を振り返る。</p> <p>2 .野口シカの手紙(原文)を読み、気づいたことを発表する。</p> <p>3 .野口シカの手紙が「いい手紙」と言われていることを知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の学習内容を簡単に振り返り、「音楽会の招待状」を何人かの児童に読ませる。</li> <li>・第一印象を自由に発表するよう指示し、児童の意見を板書する。</li> <li>・シカの手紙には形式がないことを確認する。</li> <li>・野口シカの手紙が「いい手紙」だと言われていることを知らせ、なぜ形式のない手紙が「いい手紙」なのか考えるよう指示する。</li> <li>・野口シカが手紙を書いた理由について知らせ、手紙の訳文を読ませる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙を読み、気づいたことを発表できているか。</li> </ul>
<p>野口シカの手紙が「いい手紙」と言われる理由を考えよう</p>		
<p>4 .野口シカの手紙が「いい手紙」と言われる理由を考える。</p> <p>5 .授業の感想をワークシートにまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを配り、理由を書かせる。書けた児童は、他の児童と意見交換をするよう指示する。</li> <li>・意見を発表させ、児童の発言を板書する。</li> <li>・黒板を見せながら、野口シカの手紙の良さを「真情」という言葉でまとめる。</li> <li>・手紙には2つの大切なこと(形式, 真情)があることをおさえる。</li> <li>・形式よりも真情が大切であることを気づかせるよう、板書を工夫する。</li> <li>・授業を通して分かったことや、思ったことを自由に書くよう指示する。</li> <li>・早く書けた児童には発表をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野口シカの手紙が「いい手紙」と言われる理由を考え、ワークシートに記入しているか。</li> <li>・自分なりの感想が書けているか。</li> </ul>

第三次

第三次では、「形式」と「真情」両方そろった手紙を書こうと呼びかけ、各自自由なテーマで送りたい人に手紙を書かせた。一次で書いた手紙をもう一度書き直したいという子どももいたので、それも認めることとした。

同じ音楽会の案内というテーマで手紙を書いた子どもを例に、野口シカに触れる前と後の変容を以下に示す。

< 第一次での手紙 >

おばあちゃんへ

(前文) 元気ですか。夏より寒くなってきたから、かぜはひいてないですか？もう秋だからスポーツの秋ということで大好きなスポーツをいっぱいしたいと思います。

(主文) 音楽会の日時は11月3日で9時30分開場，10時開演です。場所は長洲小学校の体育館だよ！

おすすめポイント！わたしのおすすめは「情熱大陸」だよ。楽器をするよ。何かはひみつ。 (弟)も出るよ。いままでいっしょうけんめいれんしゅうしてきたよ。つらいこともあったけど、本番は成功するようにがんばるよ。

(末文) いっしょうけんめい練習したよ。すごく楽しい音楽会にするから、ぜひ来てね。心をワクワクさせて、待ってるよ！元気でね。さようなら。

Wより

< 第三次での手紙 >

K先生へ

(前文) 元気にしてますか？少し寒くなりましたね。かぜはひいていませんか？もうプールの季節が終わって秋になりました。スポーツの秋ということで私はいろいろなスポーツをいっぱいしていつまでも元気でいたいと思います。K先生は秋といえばなんだと思いますか？2,3年生の時はありがとうございました。ケンカをしたこともありましたね。あの時はごめんなさい。

(主文) 今度、音楽会があります。日時は11月3日文化の日で9時30分開場10時開演です。いっぱい練習してきました。Sちゃんといっしょに私達のがんばるすがたをぜひ見に来て下さい。

来年はK先生が帰ってくる年ですね。K先生が帰ってくるのをすっごく心をワクワクさせて待っています。来年K先生がたんにんになれるといいなと思います。そして6年生でしか行けないしゅうがくりょこういっしょにいきましょう。そしてもっといっぱい思い出をつくりましょう。

2,3年生の時は本当にありがとうございました。すっごくたくさんのいい思い出ができました。おこったらこわいけどふだんはとってもやさしいK先生がだいすきです。

(末文) 来年がくるのをすっごく楽しみにしています。でもK先生がたんにんになるかはわからないけど、先生がもどってきてくれるだけでうれしいです。

かぜをひかないでいつも明るいK先生でいて下さい。Sちゃんを産んで大変だと思います。だけどいつものあの笑顔をわすれないで下さい。さようなら。

Wより

(注：手紙文中の下線は本人(W)が、真情を書いたと思う所に引いたものである。)

第一次に書いた手紙と、第三次に書いた手紙を比べると、「真情」の点で大きく成長していることが分かる。野口シカの手紙を読むことを通して、「真情」を書くことの大切さに目を向けることができた結果の成長である。

#### 4. まとめにかえて - 子どもの変容 -

以上、本年度の実践研究について述べてきたが、1.で書いた子どもの意識はどう変化したか。授業後に行ったアンケートの結果を以下に示す。

<「国語科」と「書くこと」に関する子どもの意識調査(12月)>

質問内容	学級の傾向 (12月)	学級の傾向 (9月)
あなたは、国語の学習が好きですか	+14	-1
あなたは、黒板や教科書に書かれたことをノートに写すことが好きですか。(視写)	+15	+2
あなたは、感想や思ったことを書くことが好きですか。	+15	+3

##### 【子どもの変容1】

より、国語の学習への好感度が、研究前に比べて15ポイント増えた。

##### 【子どもの変容2】

より、視写は13ポイント、感想や思ったことを書くことは12ポイント増えた。

また、書くことが「とても好き」もしくは「好き」と回答した子どもが、13人から20人に増加した。

このことから、手紙が書けるようになったという以外の、本年度の研究の成果として言葉を通して学ぶことを楽しむことができる子どもが増え、国語に関して意欲的な傾向が見られるようになった。

「書くこと」に楽しさや価値を見いだせる子どもが増えた。視写もあまり億劫がらなくなった。

以上の2つがあったと言える。

(注1)...梅棹忠夫著『知的生産の技術』(岩波書店刊)

#### 4 おわりに

“書く力”の育成を目指した研究の2年目になる本年度は、手紙文指導を用いて“書く力”を育てるための授業開発研究をさらに進めた。前年度提示できなかった2、3学年を実践し、連続となった5学年では、野口シカの手紙文を手掛かりに課題に取り組んだ研究であった。

手紙文の指導は、各実践の子どもの変容からも、年に一度という形で取り扱うのではなく、時と場合、相手に応じて様々な手紙の書き方を使い分ける中でこそ、「形式」や「真情」が生きてくるのではないだろうか。したがって、小学校の低・中・高学年段階に応じて、もっと積極的に機会をとらえて手紙を書かせる必要があるだろう。今後の課題は、手紙文指導の帯単元化ということになる。

指導の過程や結果から、書く目的を持ち、書く内容を見つけ、そして書き方を知った時、“書くことが嫌い”だった子ども達が生き活きと書き始めることも再認識した。とりわけ手紙文指導は、人間関係が希薄になりがちな現代社会の中、子ども達が色々な人と心をつなぎ、豊かに生きることができる人間に成長する一助になろう。今後も指導実践を継続し、書くことを楽しむ子ども達を育てるための方法を模索していきたい。

## 授業に活用できるコンピュータ教材の研究

－ 理科好きな生徒を育むために －

指導主事 藤井 健三郎  
研究員 貴島 徹 (日新中)  
" 小寺山 道久 (若草中)  
" 小畑 志保 (常陽中)

### 【内容の要約】

「理科離れ」がいわれている。コンピュータを利用した教材は、実物を見せることのできないものを仮想現実な世界として見せることができる。その教材を活用することで、生徒の興味・関心を高め、理解を深めることが期待できる。教師が自分の授業に合わせた教材を作成することも可能である。2年間にわたって作成した教材と考察を報告する。

キーワード：コンピュータ，教材，資料の収集，教材のデータベース化

1	はじめに	57
2	研究について	57
3	教材の作成と考察	59
4	作成した教材の傾向	67
5	一般教室での授業	68
6	教材のデータベース化	71
7	資料のリンク集	73
8	おわりに	74

## 1 はじめに

昨年度からの継続した研究である。

中間報告\*1で、児童生徒の「理科離れ」がいられていること、理科に対する日本の生徒像は「理科は好きではないが、テストの点数はとる」であることを指摘し、尼崎市の理科教師として理科好きな生徒を育てるために何ができるのかと問題提起した。

そして、今年度「平成16年度 尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告」\*2が公表された。その中の「調査結果の主な傾向や課題」で、「学力調査では国語以外は各教科とも全国をかなり下回っている。」「教科に関して、社会と理科は小学校の段階から得点率が低い。理科は全国と同様に、小学校5年を境にして、教科に対する好きであるとか、役に立つといった意識が大きく低下している。」ということが浮き彫りにされている。それを受けて「今後の取組の方向」で、「教材の開発や指導方法の研究・研修に取り組む」ことが大切であると指摘されているが、2年間にわたって研究してきたことが、理科の学力を高める授業を行う手助けになればと思う。

## 2 研究について

### (1) 研究テーマ

授業に活用できるコンピュータ教材の研究

- 理科好きな生徒を育むために -

### (2) 昨年度の研究の概要

昨年の研究の概要は、次のとおりである。

#### 1. 教材の作成と考察

プレゼンテーション・ツール「パワーポイント」(マイクロソフト株式会社)を使って教材を作成することは容易である。プレゼンテーション・ツールの使い方を知らなくても、簡単なマニュアルがあれば教材を作成することはできた。

しかし、授業で使用できる資料(静止画や動画のファイル)をインターネット上で探すのが、非常に時間のかかる作業であった。

#### 2. 作成した教材について

パワーポイントには様々な機能があり、スライドの背景をいろいろなものを選択することができたり、アニメーション効果をつけることができる。しかし、背景やアニメーション効果によっては、生徒にとってわかりにくい教材になった。基本的には、シンプルなものが生徒にとってわかりやすい教材であった。

#### 3. 教材を使用する教室

昨年度は3つの教材を作成したが、いずれの作成者も一般教室では授業を行わず、コンピュータ室と理科室で行った。それは、教室にコンピュータ、プロジェクター、暗幕がないからである。コンピュータやプロジェクターは台数に限りがあり、暗幕も授業の度に設置するのは無理がある。現状では、一般教室で作成した教材を使用するのは困難であるという結論に達した。

### (3) 研究の方法

昨年度の研究成果に基づき、次のように研究を行った。

#### 1. 教材の作成と考察

昨年に引き続き、教材を作成した。昨年度とプラットフォームを同じにするため、比較的操作が容易で、一般的にも使われているパワーポイントを使用することとした。

作成する教材は、昨年度同様次の3点を指すものとする。

- ・市販の教材のパッケージソフトの多くは、そのソフトに合わせて授業者が授業を組み立てなくてはならない。ここでは、あくまでも授業の補助として利用する教材を目指す。
- ・市販の教材のパッケージソフトの多くは、内容を変更することが難しい。ここでは、授業の間の休憩時間などの短い時間に内容を変更できることを目指す。
- ・年間の授業で一番多い授業形態は、一斉授業である。ここでは、一斉授業を前提とした教材を目指す。

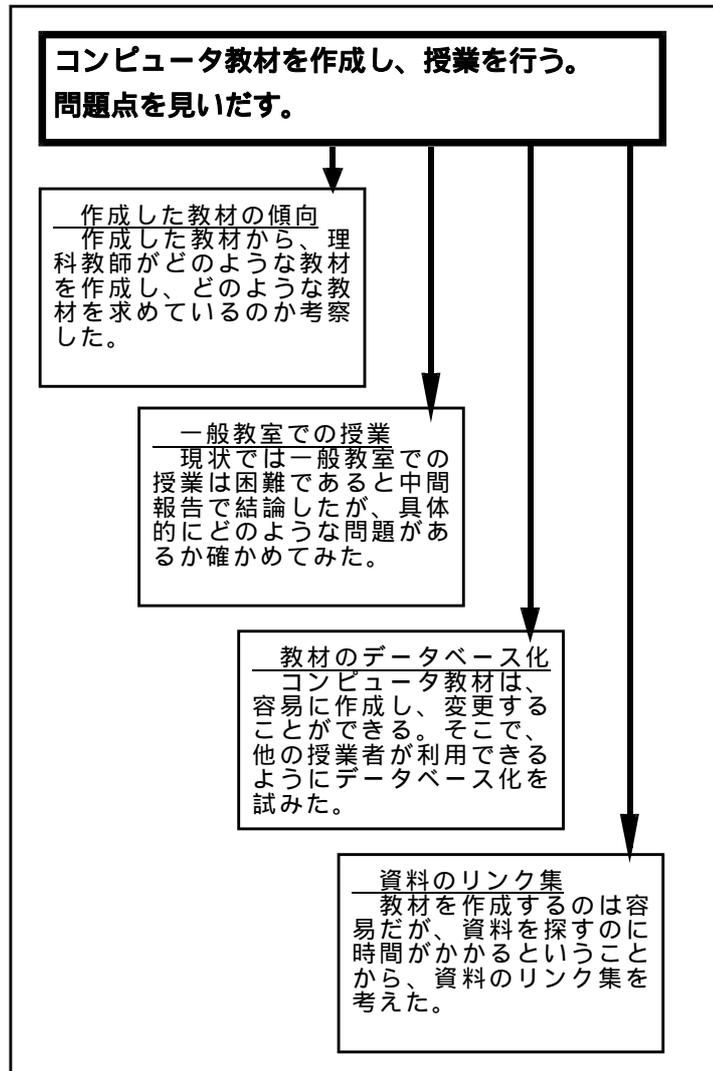
なお、今年度初めてパワーポイントを使って教材を作成する研究部員については、昨年度作成したテキストを用いて研究部員内で操作研修を行うこととした。

#### 2. 作成した教材の傾向

昨年度と今年度作成した教材を検討し、理科教師がどのような教材をパワーポイントで作成し、どのような教材を求めているのか考察した。

#### 3. 一般教室での授業

昨年度の研究で、プロジェクターを使って作成した教材で一般教室で授業を行うことが困難であることを指摘した。しかし、将来的には一般教室でコンピュータ教材を使用することが想定される。そこで、一般教室での使用を試み、その問題点を考察した。



#### 4. 教材のデータベース化

作成した教材が作成者以外の教師が授業で使えるのであれば、教材はすべての理科教師が共有化することで、利用され、改善されていく。そこで、作成者以外の教師が授業を行うことができるのか検証してみた。また、作成した教材のデータベース化を試みた。

#### 5. 資料のリンク集

昨年度の研究で、教材を作成するために資料を探すのが困難で、そのために多くの時間を割かねばならないことがわかった。そこで、資料を探すための手助けするためのリンク集を作成した。

### 3 教材の作成と考察

#### (1) 実践事例 1

##### 1. 作成した教材の概要

資料を提示するための教材を作成した。

(スライド総数 17枚)

スライド1「溶岩(動画)」

スライド2「噴火1(動画)」

スライド3「噴火のしくみ(動画)」

スライド4「噴火2」

スライド5「マウナロア山」

スライド6「火山模式図(静止画)」

スライド7「伊豆大島1」

スライド8「伊豆大島1」

スライド9「開聞岳」

スライド10「桜島」

スライド11「溶岩流」

スライド12「浅間山」

スライド13「三原山」

スライド14「楯状火山(静止画)」

スライド15「成層火山(静止画)」

スライド16「鐘状火山(静止画)」

スライド17「富士山」

作成した教材



【図1 スライド1「溶岩」(動画)】\*3



【図2 スライド3「噴火のしくみ(動画)」】\*3



【図3 授業風景】

理科室で暗幕を閉め，蛍光灯の一部を消して授業を行った。

2. 授業の流れ

単元 「活きている地球」「大地が火を噴く」

対象 中学1年生

場所 コンピュータ室

授業の流れ	作成した教材
<p>導入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな火山の噴火の特徴について学習することを確認する</li> <li>・火山活動の例を紹介する。</li> </ul>	<p>スライド 1 ~ 3</p>
<p>展開</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・写真などの資料を見ながら，火山の噴出物にはどんなものがあるかの説明を聞く。</li> <li>・映像や写真を見て，火山の噴火とはどのようなもので，その噴火の様子は火山によってどんな特徴があるかを考える。</li> </ul>	<p>スライド 4 ~ 17</p>
<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・火山の噴出物には，どんなものがあつたかを確認する。</li> <li>・火山の形や噴火の様子は，それぞれの火山によって異なることを確認する。</li> </ul>	

### 3. 授業の観察結果

#### a よかった点

- ・溶岩の流れる様子の動画をはじめ画像を生徒が身をのりだして画面を見ており、単元のはじめの動機付けになった。
- ・あえてスライドショーの形式をとらなかった。スライドショーの形式で授業を行うとスライドの順番で授業に制約ができてしまう。授業の流れで、自由に資料を見せることができた。
- ・研究部員が作成した教材を、他の教師が容易に自分の授業に合うように変更することができた。

#### b 悪かった点

- ・動画は、パワーポイントを使うことにとらわれず、ビデオを使用してもよかったのではないか。
- ・音のない動画は、インパクトがない。
- ・1枚のスライドに1枚の画像であったが、複数の画像を同時に比較する工夫が必要ではないか。
- ・資料を探すのに多くの時間を必要とした。

## (2) 実践事例2

### 1. 作成した教材の概要

資料の提示、板書がわりとしての教材を作成した。

(スライド数 21枚)

スライド1「学習のねらい」	スライド12「フーコーの振り子2」
スライド2「天動説と地動説1」	スライド13「地球の運動」
スライド3「プトレマイオスの宇宙」	スライド14「地球の自転」
スライド4「天動説と地動説2」	スライド15「太陽の日周運動」
スライド5「太陽系」	スライド16「課題 太陽の日周運動」
スライド6「惑星の見え方」	スライド17「星の日周運動 動画」
スライド7「金星の見え方」	スライド18「季節と星座 動画」
スライド8「天体の見かけの動き」	スライド19「季節と太陽高度 動画」
スライド9「課題 地球の自転」	スライド20「太陽系 動画」
スライド10「地球の自転の証拠」	スライド21「金星の見え方 動画」
スライド11「フーコーの振り子1」	



<p>展開</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地動説と天動説について説明</li> <li>・太陽（星）の日周運動について説明</li> <li>・太陽の年周運動について説明</li> <li>・地軸の傾きによる昼夜の長さ</li> <li>・四季の移り変わりについて説明</li> <li>・太陽系の惑星について説明</li> <li>・内惑星の見え方について説明</li> </ul>	<p>スライド 2 ~ 15</p> <p>スライド16 スライド17</p> <p>スライド18 スライド19</p> <p>スライド20</p> <p>スライド21</p>
<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート及びワークで、本時のまとめ</li> </ul>	

### 3. 授業の観察結果

#### a よかった点

- ・教師の説明の時、動画の人物の動きを真似しながら考えをまとめようとしていた。
- ・課題が出されたとき、「さっきのやつ（動画）でこういうた」と話しながら問題を解決しようとしていた。
- ・復習プリントをするとき、教科書を見るよりビデオを思い出しながら考えている生徒が数人みられた。

#### b 悪かった点

- ・細かい画像を生徒に見せるためには、暗幕を閉め、蛍光灯を消す必要があった。
- ・資料を探すのに多くの時間を必要とした。

### (3) 実践事例3

#### 1. 作成した教材の概要

実験器具の説明、実験操作の説明についての教材を作成した。

(スライド数 29枚)

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| スライド1「学習のねらい」  | スライド16「グラフ1」     |
| スライド2「水溶液の特徴」  | スライド17「グラフ1」     |
| スライド3「水溶液の説明」  | スライド18「グラフ1」     |
| スライド4「水溶液の例」   | スライド19「水溶液の温度変化」 |
| スライド5「課題」      | スライド20「グラフ2」     |
| スライド6「課題説明」    | スライド21「再結晶」      |
| スライド7「飽和水溶液説明」 | スライド22「グラフ2」     |

スライド8「グラフ説明」  
 スライド9「グラフ1」  
 スライド10「グラフ1」  
 スライド11「グラフ1」  
 スライド12「グラフ1」  
 スライド13「グラフ1」  
 スライド14「グラフ1」  
 スライド15「グラフ1」

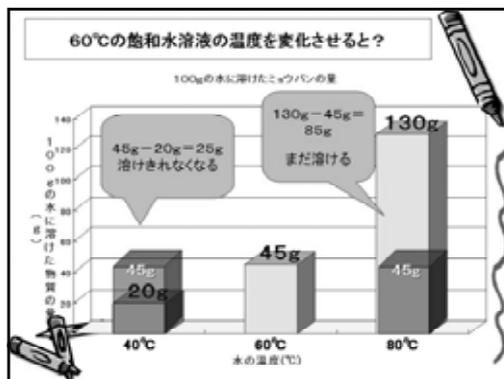
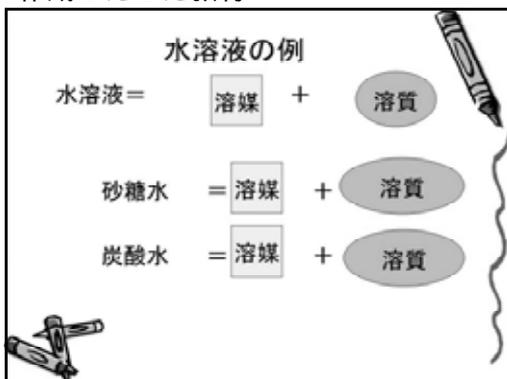
スライド23「グラフ2」  
 スライド24「食塩の溶ける質量」  
 スライド25「グラフ3」  
 スライド26「食塩の再結晶」  
 スライド27「塩田1」  
 スライド28「塩田2」  
 スライド29「まとめ」

\* グラフ1・・・温度によるミョウバンの溶け方を，温度ごとにスライドを作成

\* グラフ2・・・ミョウバンの飽和水溶液の温度を下げたとき，上げたときのグラフ

\* グラフ3・・・食塩の飽和水溶液のグラフ

作成した教材



【図8 スライド4「水溶液の例」】

【図9 スライド23「グラフ2」】



【図10 PCなどの配置】

コンピュータを教卓の上に  
 プロジェクターをその近くに配置  
 電源や接続ケーブルの取り回しには工夫  
 がある。



【図 1 1 授業風景】

理科室で暗幕を閉めている  
理科室は広いので、後ろの席の生徒は小さい文字や細かい図表は見づらい。

## 2. 授業の流れ

単元 水溶液から物質を取り出す方法

対象 中学 1 年生

場所 理科実験室

授業の流れ	作成した教材
導入 ・水溶液の特徴	スライド 1 ~ 2
展開 ・溶質・溶媒の説明  ・砂糖が水温によって溶け方が異なることを考える。  ・ミョウバンのグラフを見せる  ・食塩のグラフを見せる  ・ミョウバンと食塩の取り出し方を考える。	スライド 3 ~ 4  スライド 5 ~ 7  スライド 8 ~ 2 3  スライド 2 4 ~ 2 5  スライド 2 6 ~ 2 9
まとめ ・ワークシートを記入し、本時のまとめ	

## 3. 授業の観察結果

### a よかった点

- ・溶解度曲線の説明は、教科書と板書で説明することが多いが、パワーポイントで作成した教材を提示することで、これまでの方法より理解がしやすく、導入段階で学習に入り込めていない生徒も画像を提示することで、前に集中するなど効果があった。また「プリントで説明しながらスクリーンで映したのがよかった。」などの生

徒の感想があった。

- ・理科では、実験や観察による具体的な事象を一般化し、抽象化していく思考過程をとまなう。ここの部分で、生徒の思考を支援し、より効果的なものにするのに、パワーポイントで作成した教材は有効な方法である。「コンピュータの方が立体的でわかりやすかった。」「グラフがめっちゃわかりやすいと思う。めっちゃよく理解できた。」「ノートに書くときに、まとめやすい。」などの生徒の感想を得た。

b 悪かった点

- ・グラフの提示について、棒グラフのパターン（平面的に立体的かなど）や効果音を入れるかどうかなどもっと検討する必要があるがあった。
- ・教示提示による説明とプリントにまとめが小刻みにあったので、説明とプリントへの記入の場面をしっかりと区切りをつけて、一つのことに集中させる方が生徒の理解にとっては、より効果的であった。

(4) 教材作成についての考察

1. 教材の作成について

実践事例3の教材作成者は、ワープロで文章を作成したり表計算ソフトでデータを入力するということはしてきたが、初めてパワーポイントで教材を作成した。その感想は容易に教材を作成することができたと述べている。昨年度初めてパワーポイントで教材した者と同様であり、教材を作成すること自体は難しくないことがわかる。

作成した教材が生徒の興味・関心を持たせるなど効果的であることはわかったが、さらに理解を深める教材を作成するためにはどうすればよいのか。今後の研究課題である。

作成した教材を作成者と異なる教師が自分の授業用に変更し、授業を行った。教材の作成者が自分の授業に合わせて容易に変更することを目標として教材を作成してきたが、自分だけでなく他の教師も容易に変更することができた。このことは、作成した教材は、データベース化することによって尼崎市の理科教育に貢献できることを示唆している。データベース化の試みは、後述する。（「6 教材のデータベース化」）

実践事例1と実践事例2の教材作成者の共通した授業後の感想は、「スライドに載せる資料を探すことがたいへん時間がかかった」であった。これは昨年度の結果でも同様のことがいわれており、これを解消する試みとしてリンク集を作成したので、詳細は後述する。（「7 資料のリンク集」）

2. 作成した教材について

実践事例2の教材作成者の授業後の感想は、「スライドの背景のために、生徒にとって文字が見えにくいものとなった。」また実践事例3の教材作成者は、「無駄なアニメーション効果（文字や図を動きをもって表示させること）が、多かった。」

つまり、生徒にわかりやすい教材を作成するためには工夫が必要であるということである。

3. 教室について

昨年の教材作成者と同様、一般教室で授業を行わなかった。それは、作成した教材を使用することができなかったからである。理由は、遮光カーテンがないため教室内

が明るすぎることで、生徒の机の配置の関係でプロジェクターとスクリーンの距離が十分にとりにくいこと、プロジェクターの数が少ないことなどである。

では、一般教室で授業をすることは無理なのか検証したので、後述することとする。  
 (「5 一般教室での授業」)

#### 4 作成した教材の傾向

##### (1) 作成した教材

下記の表は、昨年度と今年度で作成した教材の一覧である。

	単元	内容	内容の分類	授業の場所
1	大地がゆれる (スライド9枚)	<ul style="list-style-type: none"> <li>地震の伝わり方</li> <li>生徒に震源からの距離と震度の関係を色分けさせる作業の説明</li> <li>初期微動と主要動</li> <li>プレートと地震</li> </ul>	板書 資料提示 説明	理科室
2	天気の変化 (スライド5枚)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1年間の雲の動きの動画</li> <li>天気予報</li> <li>天気要素の記号</li> <li>気圧, 気温, 風向きの図表</li> </ul>	板書 資料提示	C P 教室
3	温度による物質の変化 (スライド8枚)	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験方法</li> <li>実験器具</li> <li>実験装置の組み立ての注意</li> <li>実験上の注意</li> <li>まとめ</li> </ul>	板書 実験説明	理科室
4	大地が火を噴く (スライド17枚)	<ul style="list-style-type: none"> <li>火山, 噴火, 溶岩の写真</li> <li>火山のでき方</li> <li>火山の分類</li> </ul>	資料提示	理科室
5	地球と宇宙 (スライド21枚)	<ul style="list-style-type: none"> <li>太陽系</li> <li>太陽や星の日周運動</li> <li>季節と星座</li> <li>季節と太陽の高度</li> <li>金星の満ち欠け</li> </ul>	板書 資料提示	C P 教室
6	水溶液から物質を取り出す方法 (スライド29枚)	<ul style="list-style-type: none"> <li>水溶液の特徴</li> <li>物質の溶け方</li> <li>飽和水溶液</li> <li>溶解度曲線</li> <li>塩田</li> </ul>	板書 資料提示 説明	理科室

## (2) 作成した教材の傾向

### 1. 作成した教材の内容の分類

- ・板書 作成した6つの教材中5つまでが、板書のスライドを入れている。これは、授業を行ったのがコンピュータ教室と理科室で、スクリーン上で教材を映しながらの説明になるので、板書もパワーポイントで作成しておくことで、円滑に授業をすすめることができるのである。
- ・資料提示 教科の特性上資料提示をすることが多い。静止画や動画をスライドに貼り付けるだけで教材が作成できるので、この使われ方が多い。内容は、実物を見せることができないもの、学習内容を理解させるための模式図、関心をもたせるための動画、学習活動の説明などである。
- ・実験説明 理科室で実験を行う場合、実験の説明に時間を多くさくと生徒に実験させる時間が不足する。パワーポイントで作成した教材で、実験器具の詳細な説明・実験操作の説明・実験を行う上での注意事項など、ポイントを絞った説明ができる。
- ・説明 例えばグラフなど抽象概念を理解の補助となる。

### 2. その他の傾向

- ・プリント 作成した6つの教材中4つまでが、生徒が作業する学習プリントを使用している。単元、授業スタイルなどで学習プリントが必要になってくる場合がある。見せた資料は生徒の手元に残らない。そこで学習プリントを配布して生徒の理解や定着を補うのである。
- ・スライド 教材1と教材3、教材2と教材4は同じ作成者であるが、どちらもスライドの数が増えている。単元、授業スタイルなどで多くのスライドが必要になる場合がある。しかし教材の作成者から理由を聞き取ると、資料の探し方になれてきた、普段から資料を探しており記録していた、教材の作成になれてきたなどが、スライドの数が増えてきた理由である。

## (3) 作成した教材の傾向についての考察

画像や音の資料の提示、実物を見せることのできないものの説明を多く求められる理科という教科とパワーポイントで作成した教材の親和性は極めて高い。それは作成された6つの教材の内容が説明している。

次の段階として、提示する資料を厳選することや効果的な見せ方など、どのような教材が生徒の理解や定着に有効なのかということである。今後の研究課題である。

## 5 一般教室での授業

### (1) 一般教室での試み

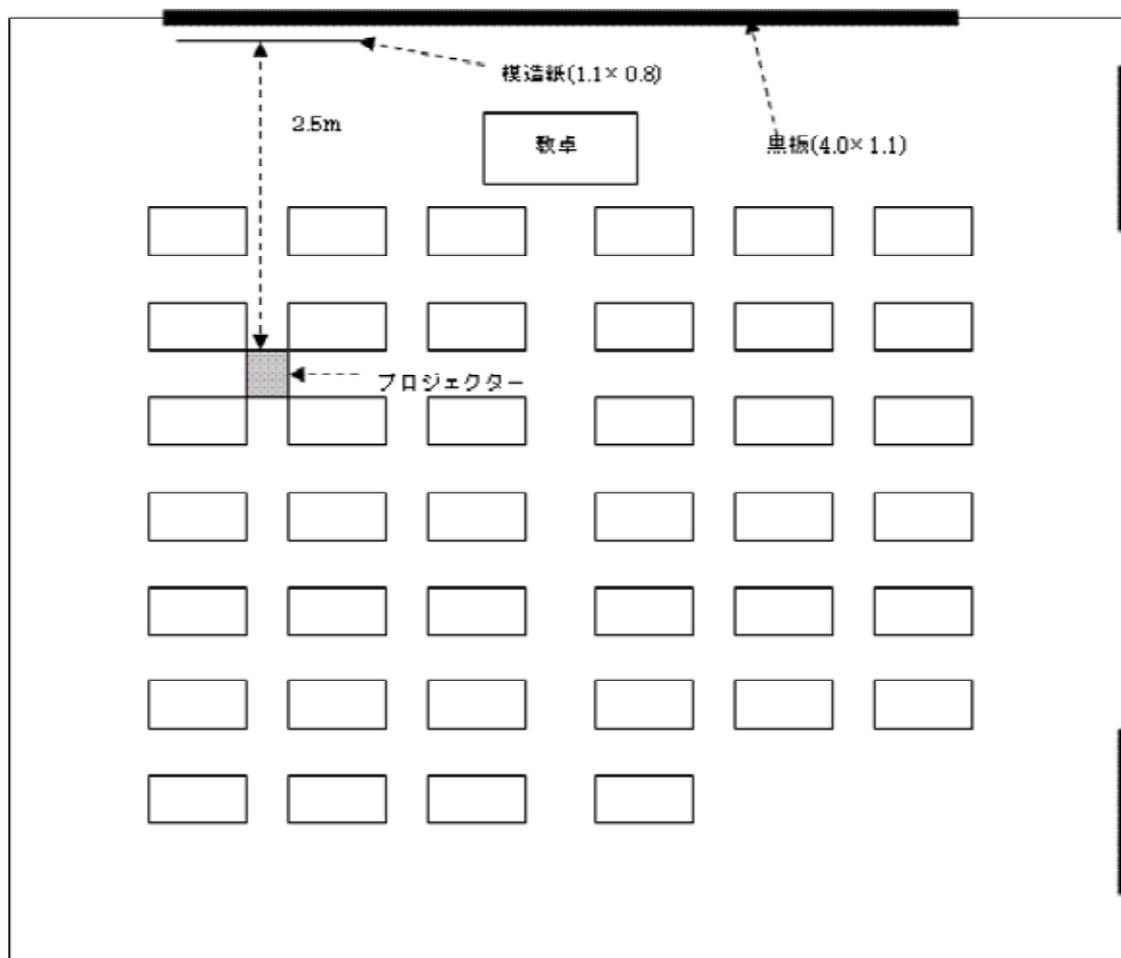
現状では、一般教室で作成したコンピュータ教材を使って授業を行うことは困難であることは指摘したとおりである。しかし、将来的には一般教室で使用することは想定しておかねばならない。今回の試みが、その基礎資料となればと思う。

## (2) 環境

日時 8月20日(木) 14:00 晴れ

教室 2階 南向き 白いカーテン

プロジェクター 明るさ 1300ANSIルーメン, 焦点距離 55 ~ 72mm



【図12 機器の配置】

## (3) 結果



【図13 教室の様子】

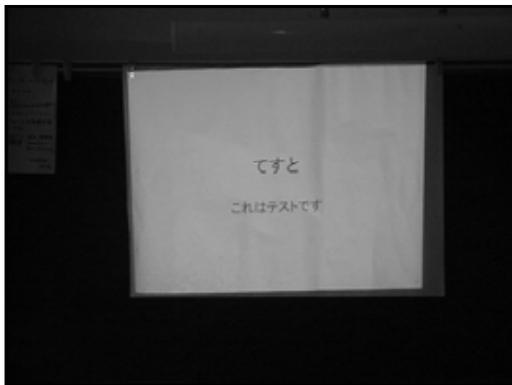
- ・大きなスクリーンを正面に設置すると、天井からの蛍光灯で画面がけられたり、最前列から見づらい。
- ・大きなスクリーンを斜めに設置しても、同様であった。
- ・そこで、黒板に模造紙をはることで座席を移動させることなく、教室のすべての場所から見る事ができた。



- ・ 投影された画像の全体像を把握する程度には映し出すことはできるが、白いカーテンを引いただけでは全体像がぼやけてしまった。
- ・ 模造紙大のスクリーンでは、最後列から見ると、映像が小さすぎて、画像の細かいところなどは判別することができなかった。

【図 1 4 模造紙に映し出した画像】

・ 映し出す文字を、白地に黒文字と黒字に白文字のスライドを比較すると、黒地に白文字の方が、教室の後ろからでも認識しやすかった。



【図 1 5 白地に黒文字】



【図 1 6 黒地に白文字】

#### (4) 一般教室でコンピュータ教材を使って授業を行うことについての考察

現状では一般教室でコンピュータ教材を使って理科の授業を行うことは困難である。使用したプロジェクターは古く、将来的には小型で照度も大きなものがでてくるであろうから、現状よりよい映像を見せることはできるかもしれない。しかし、理科で必要とされるような精密な画像をはっきり見せるためには、遮光カーテンなどを備える必要がある。また、大きなスクリーンも必要である。しかし大きなスクリーンの画像を最前列の生徒にも見せようとする座席を全体的に下げる必要が出てくる。中学3年生で40人のクラスなどでは、生徒に相当狭い思いをさせることになるであろう。大きな文字や単純な画像で授業を行うことはできるであろうが、精密な画像を大きく見せるようなことは困難である。

今回は夏の昼頃という条件の比較的よいときに行った。これが冬の朝や夕方近いともっと結果は違っていたかもしれない。授業が時間や天気によって左右されてはならない。一般教室でコンピュータ教材を使用するならば、コンピュータが教室にあるというだけでなく、遮光カーテンなど環境を整備する必要がある。

また、授業に必要なものに加えて、コンピュータ、プロジェクター、スクリーン、電源の延長コード、接続コードなどを持って毎時間教室に行くことはできない。コンピュータが教室にあるだけでなく、そういった周辺機器がいつもある状態でないと一般教

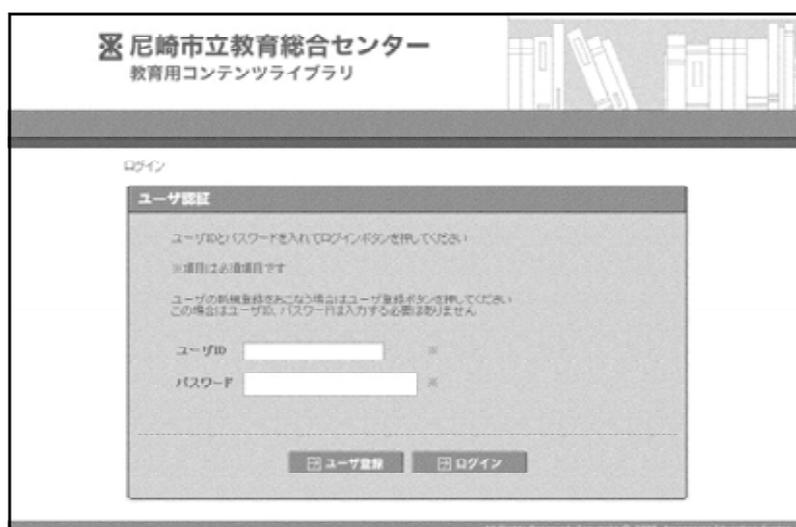
室でのコンピュータ教材を使っでの授業は広がっていかない。

## 6 教材のデータベース化

### (1) 「教育用コンテンツライブラリ」の概要

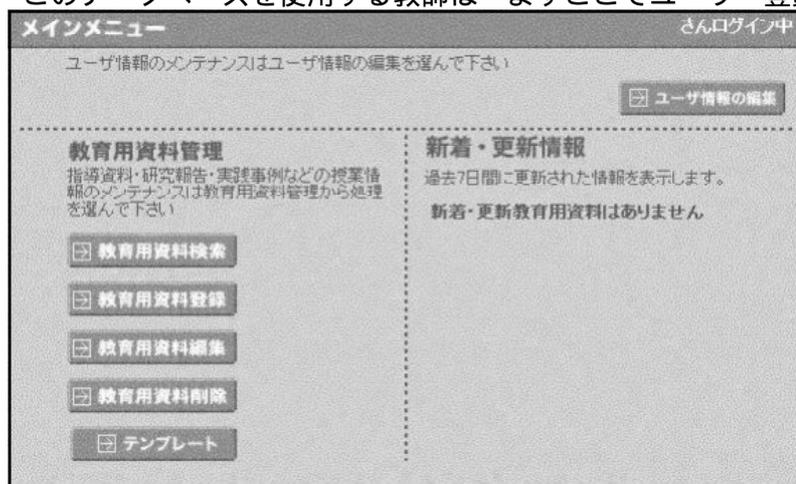
尼崎市立の小学校，中学校，高等学校と教育委員会，教育総合センターの間には，学校情報通信ネットワークシステム（以下，AMA - NET）が整備されている。AMA - NETには「教育用コンテンツライブラリ」というデータベースがある。「教育用コンテンツライブラリ」には，教師が教材を登録する機能がある。今回はこの機能を使って，教材のデータベース化を試みることにした。以下に「教育用コンテンツライブラリ」の概要を紹介する。

#### 「教育用コンテンツライブラリ」



【図17 ログイン画面】

ユーザーのログイン，ユーザーの登録，ユーザー情報の変更ができる。  
このデータベースを使用する教師は まずここでユーザー登録を行う。



【図18 メインメニュー】

教育用資料検索，登録，編集，削除を行うことができる。



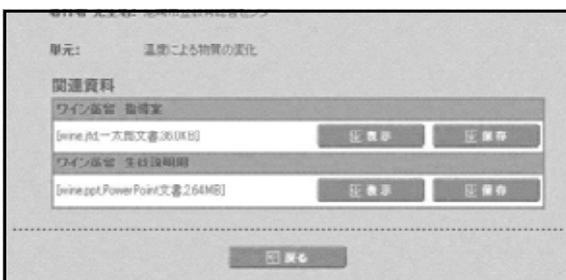
【図 1 9 検索画面】

まず校種別，または全学年対象の資料が選択次に，学年，教科，資料名，単元，著作者の学校名，著作者の名前などで検索することができる。



【図 2 0 検索結果画面】

検索された結果が表示される。  
資料名などから必要な資料を選択する。



【図 2 1 資料詳細画面】

資料に含まれる指導案などがどのようなアプリケーションソフトで作られているかなど詳細が表示され，ファイルの「表示」「保存」を行うことができる。

## (2) 教材のデータベース化についての考察

作成されたコンピュータ教材は，他の教師が自分の授業に合わせて容易に変更できるのであるから，データベース化することによって教師にとって大きな力になる。しかし，

データベースは、質もさることながら、登録されている数が多いときに価値が高くなる性質がある。「教育用コンテンツライブラリ」は、小学校、中学校、高等学校、すべての教科で使用することができる。まず、コンピュータ教材だけでなく、指導案など様々な資料を登録していくことで「教育用コンテンツライブラリ」の利用を増やしていくことを考えていく必要がある。

## 7 資料のリンク集

### (1) 資料のリンク集の概要

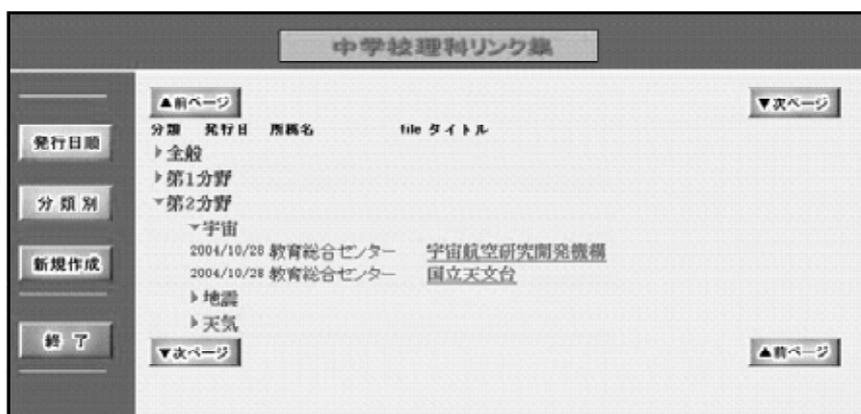
2年間にわたってコンピュータ教材を作成してきたが、「教材を作成することは容易であった。しかし、資料を探すことにたいへん時間がかかった」という結論だった。コンピュータ教材を作成するためには、授業で使える資料が、いかに教師の手元にあるかということが必要なのである。そこでA M A - N E T上で利用することができるリンク集を作成したので、以下に特徴を述べる。

- ・各学校から、教師が資料のあるURLを登録することができる。
- ・リンク先が変更されたときやリンク切れの状態になったときなど、リンクの修正や削除をすることができる。
- ・分類は登録時に、新しく作成することができる。
- ・「発行日順」「分類別」で、リンクを並び替えることができる。

### (2) 資料のリンク集についての考察

今回はリンク集という資料のあるURLを登録する場所を作成したにすぎない。現状は、まだ公開もしておらず、登録されているURLは十数件で、リンク集として役に立たない。リンク集がその役目を果たすためには、多くのURLが登録されること、登録されたURLは変更があれば削除もふくめ修正されることが必要である。これらのことは、このリンク集をどのように運用するかということにかかっている。運用の方法については、今後の課題である。

また、今回作成したリンク集は、最低限度必要と思われる機能しかない。キーワード検索をできるようにするなど、機能の充実も図っていく必要もある。



【図2.2 「中学校理科リンク集」画面】



【図 2 3 「中学校理科リンク集」詳細画面】



【図 2 4 「中学校理科リンク集」登録画面】

## 8 おわりに

この研究は、「理科離れ」がいわれている コンピュータ教材を使って授業を行えば生徒の興味・関心を高めることができるのではないかと コンピュータ教材を作成してみて、問題点を探っていこうという発想から始まった。昨年度はコンピュータ教材を作成し、生徒が興味を持って授業を受ける様子に自信を持った。今年度、その自信は確信に変わっていった。しかし、研究内容としては、多くの課題を残すこととなった。

一斉授業で使われるコンピュータ教材は、8mmフィルム、VTR、TPなどさまざまな視聴覚教材の延長線上にある。しかし、この研究で作成したようなコンピュータ教材は、他の教材にない大きなメリットがある。それは、授業を行う教師自身はその授業に合わせて容易に教材を作成、変更できることである。これだけでも大きな可能性を秘めているといえるだろう。今まで視聴覚教材によってはあまり使われなくなったものもある。コンピュータ教材もそうならないように、環境整備、研究開発していかねばならない。

\* 1 「紀要 4 1 号 研究報告書」尼崎市立教育総合センター

\* 2 「平成 1 6 年度 尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告」尼崎市教育委員会

\* 3 CEC, IPA 「教育用画像素材集サイト」 <http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/>

## 小学校英語活動の研究

### － 学級担任からのアプローチ －

指導主事 梶尾 一秀  
研究員 杣 裕之 (水堂小)  
" 深井 純志 (大庄小)  
" 大石 温子 (武庫庄小)

#### 【内容の要約】

総合的な学習に位置付け、国際理解教育の一環として展開されている「英語活動」について、昨年度はALTとの英語活動を通して、異文化理解に必要な実践的な能力や態度の育成について研究した。

本年度は、学級担任がすすめる英語活動により、コミュニケーションへの意欲や積極的な態度の育成をめざしての授業づくりを進めることにした。

していくかを探った。

キーワード：授業づくり，国際理解，コミュニケーション能力，ALT，  
HRT，音声中心，視聴覚機器，デジタルコンテンツ，題材設定

1	研究テーマと設定理由	75
2	英語活動の実践にあたって	75
3	実践事例	77
	(1) 実践例 その1	77
	(2) 実践例 その2	83
	(3) 実践例 その3	87
4	研究のまとめと今後の課題	91

## 1 研究テーマと設定理由

### (1) 研究テーマ

小学校英語活動の研究 - 学級担任からのアプローチ -
--------------------------------

### (2) 設定理由

小学校における英語活動は、総合的な学習の時間に位置づけ、国際理解教育の一環として展開されている。本研究部会では、小学校英語活動の研究を昨年度より行ってきており、研究目標として、ALTとの英語活動を通して、児童がALTに積極的に関わろうとする意欲を育て、異文化を受け入れ、共生への意識を持たせていくことを設定した。実践をすすめる途上で、課題として、次のようなことがでてきた。すなわち、ALTとの英語活動の時間を多くする必要があるのではないか。児童は、徐々に知的興奮がある活動を求めてくる。学級担任の手による英語活動を創出し、ALTを有効活用するという意識改革が必要だという点である。

以上のことを踏まえて、本年度は、学級担任のすすめる英語活動の授業づくりに取り組むこととした。学級担任が英語活動を始めるにあたっては、2つの大きな問題点が考えられる。まず、教師自身の小学校での英語活動のあり方についてのとまどいである。つまり、未知の領域である英語活動で、児童にどのような力をつけるのか、そのためには、どのような題材を選び、どのような活動内容を設定し、どのように指導するのかというようなことをはっきりと把握できていないということである。次に、教師自身の英語によるコミュニケーションの力に対する不安感を持っていることである。つまり、これまでに英語を学んできた経験は持っているものの、児童に対して英語活動を指導するといったときに、ALTとの英語でのコミュニケーションができるのか、そういった場面を児童に指導できるのか、あるいは、英語の発音を正しく児童に伝えることができるのかということ多くの困難な課題をかかえているように思われる。そのような状況下で、児童のコミュニケーションへの意欲や積極的な態度の育成目標に、児童に適した学習形態や体験的な学習を組み立てる必要がある。そこで、児童の興味関心を把握できている学級担任が、児童の実態に即した指導をすることによって学習効果を高められる授業をつくりたい。このような考えから、上記のとおり研究テーマを設定した。

## 2 英語活動の実践にあたって

英語でのコミュニケーションへの意欲や積極的な態度の育成をねらいとする英語活動の授業実践にあたって、次のような点について検討し、英語活動の授業づくりの方向づけをした。

指導形態については、学級担任による単独と、学級担任と担任外教員の2人での指導を行うということで、それぞれの場合の授業研究を進めた。

### (1) 児童の興味・関心の持てる題材を選ぶ。

児童の身の回りのもの、生活に即したもののなかから、興味・関心の高いものを題材として扱うことによって、日常的に使われている言葉のなかに英語の言葉があることに、児童は気づくようになる。そして、この日本語は、英語で何て言うのだろうかというように英語への興味・関心を高めることができると考えた。

具体的には、低・中学年では動物や色、食べ物等身近な題材、高学年では数やスポーツ、体の部分などの題材を選ぶ。

(2) 聞く・話す活動を中心に英語に親しませる。

英語に親しませるためには、成功体験を味わわせる工夫が必要である。英語をシャワーのごとく繰り返し聞かせ、たくさんしゃべる機会を持たせる活動を仕組む必要があると考えた。本研究では、本時で使う会話文を数種類の活動の中で繰り返し扱った。歌、会話練習、会話文を使ったゲーム、会話文が関係する映像を使ったクイズ、身振りを伴う活動などである。変化をもたせながら反復練習させることで、英語で発音された内容がわかった、習った英語がしゃべれた、しゃべったことが相手に伝わったという満足感を感じさせることをねらう。

(3) 実物や絵カード等を使い、興味関心を高める工夫を行う。

興味関心を持たせるためには、視覚や聴覚に訴える活動が効果的であると考えた。第1に、視聴覚教材によりネイティブスピーカーの正しい発音に触れさせることができるからである。

また、日常的にフラッシュカードを用いて発音練習をさせることにより、児童は内部情報の蓄積が可能となる。特に、単語定着のためのカルタ取りなどのゲームは、準備が簡単なうえ、児童が熱中して取り組むことができる。

児童の興味関心が非常に高まるものとしてデジタルコンテンツとタッチパネルの利用が挙げられる。これらの機器を使えば、双方向のゲームなどが可能である。また、ゲームをしている児童だけでなく、見ている児童たちにも学習効果がある。それは、カラータッチゲームや「えいごリアン」などを何人かの児童にさせた場合、後からする児童の方が正答が多いことなどに見られる現象である。コンテンツの中で発音される単語や会話文を、知らず知らずのうちに繰り返し聞くことになるからだと考えられる。

(4) 歌、ゲームなどの楽しい活動を取り入れる。

歌を取り入れることで、英語の音やリズムに慣れ、表現や語句が自然に身につくという効果が期待できる。体を動かせるようなリズムカルなもの、歌詞に繰り返しがあるもの、メロディーが知られているものが適していると考えた。また、児童は、ゲームが大好きであり、ゲームを行いながら新しい言葉を自然に口にすることができる。

そこで、1時間の英語活動の中に歌やゲームなどの楽しい活動を取り入れることにより、児童が英語に自然に慣れ親しむようになると考えた。

(5) 1時間の活動の基本的な流れ

時間	児童活動	指導のねらい	例
1分	あいさつ	・反復練習	・クラスルームイン

5分	単語練習	前時に習った英文等も使って簡単な対話をする。 ・教師がリピートさせる。 ・本時で使う単語を定着させる。 ・テンポよくすすめる。	グリッシュ ・フラッシュカード
10分	ゲーム	・単語の定着を図る。	・五色カルタなど
10分	会話練習	・ダイアローグをリピートさせ理解させる。 ・ネイティブな発音を聞かせる。	・視聴覚機器 ・エイゴリアン
15分	ゲーム	・ のダイアローグを使ってゲームを行う。	・ビンゴゲーム ・フルーツバスケットなど
3分	歌	・リズムよく 楽しく 耳に慣れさせる	・Hellow ・Seven steps など
1分	おわりのあいさつ		

### 3 実践事例

#### (1) 実践例 その1 (水堂小 4年生)

##### 1. 実践の概要

本英語活動では進んで「話す」「聞く」という活動を重視し、英語に慣れ親しみ、且つ、楽しむということをねらいとした。

まず、4年生で英語活動が始めるに当たって指導計画を立てた。はじめに挨拶、次に4年生というよりも、初めて英語活動を行う子ども達にとって身近な物を考え、それらを英語で表現するために必要なフレーズを検討し、指導計画を立案した。

初めて英語活動を行う子ども達にとって身近な物と考えたのは、色、動物、果物、数、食べ物、スポーツ、体の部分等である。これらを What や How で表現できるフレーズを考え、17時間の指導計画を立案し、指導を進めた。

また、この活動にどのようにすれば児童が関心をもち、学習意欲を持続することができるかということを念頭に置き、「始めの歌」(Hello Song)、「Classroom English A/B/C」,「Today's English」,「フラッシュカード」,「ゲーム」,「終わりの歌」(Goodby Song)というパターンを考え、必要に応じて臨機応変にそれぞれのパートに軽重をつけ指導した。文字や文法の指導は必要最低限のもので、a や an の指導は行い、単

語等はフラッシュカードの下に記入し，目に触れる程度とした。英語を通して異文化に触れ，異文化の言語を学ぶ楽しさを味わわせるようにした。

本学級の児童は，非常に活動的で興味をもったことは進んで取り組もうとする児童が多く，また，他の授業においても自分の思いや考えを進んで発言しようとする姿勢が見られる。反面，活動の意欲が長続きしない児童や周囲との関わりをうまく保てない児童もしばしば見られるのが現状である。

現時点で数時間の英語活動を実施し，児童の反応は様々である。廊下ですれ違ったときに「Hello」と声をかけてくる児童もいれば，活動で教室に来る時，「Hello」と恥ずかしそうにハイタッチをする児童もいる。目を見て話す習慣のあまりない児童にとって，握手をし，目を見て話す英語活動は，最初戸惑いの連続であったであろうと思われる。しかし，積極的に発言する児童も見られるようになってきた。最近は大分慣れてきてたのであろう。

本活動を通じて児童が，単に英語に慣れ親しむことに留まらず，普段の生活の中においても英語ならびに様々な言語に興味をもつきっかけとなったり，そのことが広く異文化への関心・理解につなげることができればと考えた。

また，児童一人一人が進んでコミュニケーションをとって，他の児童と共生意識をもち，共に成長できる集団づくりも本活動の大きな柱の一つとした。

## 2. 学習指導案

対 象 4年生児童

指導者 H R T ，学級担任外教員

単元名 英語活動

単元目標

- ・英語活動を通じて異文化に関心をもち，進んで外国の人や文化に関わろうとする態度を育てる。
- ・学んだ英語を生かして，友達等とコミュニケーションを図ろうとする意欲を育てる。
- ・英語活動を通して自信をもち，自尊感情を高めると共に，他の児童の成功に拍手を送り，失敗を励ます心豊かな集団づくりへのモチベーションの育成を図る。

単元計画(全17時間)

月	週	内 容
10月	1	ハローお元気ですか フラッシュカード・ゲーム Hello! Nice to meet you.
	2	フラッシュカード・ゲーム I'm . What's your name? My name is .
	3	フラッシュカード・ゲーム How are you?
11月	1	フラッシュカード・ゲーム I'm fine. Thank you. And you? I'm fine,too. Thank you.
	2	これなあに? 色のフラッシュカード・ゲーム What color is this? It's.....

	3		動物のフラッシュカード・ゲーム	What animal is this? It's.....
	4		果物のフラッシュカード・ゲーム	What fruit is this? It's.....
12月	1		自分を知ってもらおう数のフラッシュカード・ゲーム	How old are you? I'm        years old.
	2		食べ物のフラッシュカード・ゲーム	Do you like.....? Yes(No),I do(don't).
	3		楽しいクリスマス 海外のクリスマスの様子 クリスマスカードの交換	Merry Christmas. This card is for you.
1月	1		自分を知ってもらおうスポーツのフラッシュカード ゲーム	What sports do you like? I like ...very much.
	2		数の言い方を知ろう 数のフラッシュカード ゲーム	What time is it,now? It's ....o'clock.
	3		数のフラッシュカード ゲーム	What time is it,now? It's ....o'clock.
2月	1		数の言い方を知ろう 数のフラッシュカード ゲーム	What's your telephone number?
	2		数のフラッシュカード ゲーム	What's your telephone number?
	3		体の部分 体のフラッシュカード・ゲーム	Toch your (head).
3月	1		体のフラッシュカード・ゲーム	Toch your (head)

本時の学習 ( 7 / 1 7 )

( 1 ) 目 標

果物の名前の尋ね方と答え方を英語で行うことができる。

( 2 ) 学習語彙ならびに英語表現

What fruit is this? It's a..... . Classroom EnglishAorBorC

apple apricot banana cherry grapes orange papaya peach pear pineapple strawberry  
watermelon 等

( 3 ) 展 開

活 動 内 容	指 導 上 の 留 意 点
1 あいさつの言葉の練習 T:Good afternoon everyone. C:Good afternoon Mr.....	・ にこやかに英語であいさつし，数回繰り返して練習させる。
2 英語の歌を歌う。	・ 楽しく動作を交えて数回歌い，英

<p>Let's sing the " Hello song " を動作を交えて 2 , 3 回歌う。</p> <p>3 英語を聞いて動く。(Classroom English)</p> <p>4 フラッシュカードで新しい単語の練習をする。( 2 , 3 回練習する。) apple apricot banana cherry grapes orange papaya etc.</p> <p>5 Today's English の例を聞き , 練習する。 A:What fruit is this? B:It's a ....</p> <p>6 ゲームをする。 ルールを確認する。 ゲーム 1 フルーツバスケット 自分のフルーツを決める。 自分のフルーツの名前を言われたら場所を移動する。 みんなで What fruit is this? と聞き , 鬼がフルーツの名前を It's a..... と言う ゲーム 2 えいごリアンのゲームをする。 三つの中から正しい答えを選ぶ。 新しい単語を紹介する。</p> <p>7 英語の歌を歌う。 Let's sing the " Good by song "</p> <p>8 終わりのあいさつ Good by. See you again で授業を終える。</p>	<p>語に耳を慣れさせる。(カセットテープレコーダー・カセット)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初めのうちはジェスチャーを交えて発音する。徐々にスピードを上げていく。</li> <li>・初めはゆっくり発音してやり , 徐々にスピードを上げていく。(果物のフラッシュカード)</li> <li>・教師対教師でダイヤログを示した後 , 子ども対子どもで練習させる</li> <li>・色々なパターンで練習させる。</li> <li>・活動 5 のフレーズを使ってゲームを行う。</li> <li>・耳が慣れるまで 2 , 3 回聞かす。(プロジェクター・パソコン)</li> <li>・airplane hammer 等</li> </ul> <p>(カセットテープレコーダー・カセットテープ)</p>
--	---



Let's sing the " Hello song " を動作を交えて歌う



Today's English の例



英語を聞いて動く(Classroom English)



Today's English の例を聞き，練習する



フラッシュカードで新しい単語の練習をする



ゲーム1 フルーツバスケット



ゲーム2 えいごリアンのゲームをする

### 3. 実践の考察

2学期の英語活動を終わるに当たって4年生全員の児童にアンケート調査をした。

Q1では英語活動が楽しいか、普通か、楽しくないかを問い、Q2は、英語活動についての感想や注文を記述式で聞いた。

Q1では楽しかったが66名、普通が14名、楽しくなかったが3名という結果であった。普通および楽しくなかったの17名についても、英語活動を否定的に思っている児童はなく、ゲームをもっとしたいや、もっとレベルを上げてほしいなどの記述が目立った。楽しかったの66名についても、もっと英語を学びたい、自己紹介ぐらいは出来るようになりたい、いろいろな単語を覚えたい等の記述が多く、前向きな取り組み姿勢が多く見られた。

一部の記述を紹介する。

- ・英語活動はおもしろかったです。私は前に英語のことを勉強しようと本を買ってもらったのですが、一人でやると全然楽しくなかったけど、水堂小学校の英語は楽しかったです。これからもずっとやりたいです。
- ・私は英語はとても苦手で英語は授業でいちばんきらいでした。でも、英語活動のおかげで、英語もちょっと分かってきて英語がちょっとずつ好きになってきました。果物を英語で言えるようになったし、歌のハローソングやグッバイソングなども覚ええました。英語活動をしたからこんなにも覚えられたんだと思います。それに今では英語が大好きになりました。とても楽しいです。
- ・ぼくは英語が苦手だったけれど、英語活動を始めてからどんどん苦手だった英語もできるようになりました。だから、これからも英語活動を続けたいです。
- ・先生がゆっくりしてくれたので、分かりやすかったし、英語の発音もできるようになった。コンピュータでクリスマスカードも作りました。あと、英語の歌も教えてくれてすごく楽しかった。フラッシュカードもいっぱい作ってくれたし、英語はすごく覚えやすかった。
- ・楽しかったです。理由は、英語をあまり知らない私に優しく教えてくれて、覚えよう、考えようと思いました。発音や言葉の言い方が難しかった。でも、先生をよく見ると口を開けて舌を上につけたりするのをしたら、少しでもいい発音につながりました。3学期も楽しくなるような気がします。

2学期10時間の英語活動を終え、アンケートを取った結果以下の事が見えてきた。

- ・児童には英語活動に対する期待と不安があること。
- ・授業をパターン化することで、児童の不安はある程度除けること。
- ・教材やゲームを児童の興味・関心にそって提示することで、児童に前向きな姿勢が出てくること。

#### 4. 今後の課題

活動を児童にとってより楽しく、意義あるものにするため、教師の教材研究を深め、TTの方法も工夫していきたい。

また、一歩進めて、児童が主体的に活動に参加できるように考え、他の教科や活動への波及効果を目指していこうと思う。

いかに子どもたちの興味を引きつけ、1時間きりの活動ではなく、積み重ねをしていくということや、書くことへの希望も結構多いことから指導計画の見直しも必要と思われる。

また、指導者側の課題として、今回の英語活動は学級担任と学級担任外教員の2人で進めているため教材の準備や提示の仕方、インターネットのサイトの利用、教材研究(主に発音やイントネーション)など多くの課題をクリアしていかなければならないと考える。

## (2) 実践例 その2 (大庄小 5年生)

### 1. 実践の概要

1学期からフラッシュカードを使って、単語の発音を繰り返し練習させてきた。フラッシュカードは、『TOSSインターネットランド』前田康裕氏のサイトを引用した。

<http://www.aminet.or.jp/~yasu/illustrations/index.htm>

フラッシュカードにより内部情報の蓄積をさせながら、実践例にあるような活動を続けた。活動内容は、岡本真砂夫氏の実践の追試である。(東京教育技術研究所 渡邊憲昭 編著『小学校英会話指導年間計画集録 TOSS英会話指導案集 <低学年・3年・4年>』)

また、今年度は、新たに次の2点を試みた。

ネイティブの発音が入った映像を使い、直感で(できるだけ日本語の解説なしに)英語を理解し、答えを選択させる。【インターネットコンテンツの映像】NHK『えいごリアン』、並びに『TOSSインターネットランド』のゲーム

パペット(人形)を使い、会話のイメージ(応答)を視覚的に理解させる。【使ったパペット】ウシ君とカエル君 アニーとバート

パペットを利用することにより、対話のイメージを児童に持たせることができると考えたからである。また、インターネットコンテンツの利用は、児童の興味を持続させることができると考えたからである。ゲームに熱中する中で、児童たちは、ネイティブの発音を繰り返し聞くことになる。その結果、知らず知らずのうちに、ダイアログに反応することができるようになってきた。

### 2. 学習指導案

対象 5年児童

指導者 H R T

単元名 これは何かときく

単元目標

- ・英語でいろいろな表現ができるようにする。
- ・英語での指示を聞いて、直感的に理解し、行動できるようにする。

単元計画(全4時間)

	活動内容	主な言語表現
1	これは何かときく	What's it ? It's a .
2	これは何かときく	What's that ?
3	色をきく	What color is it ? It's .
4	ものの形をきく	What shape is it ? It's .

本時の学習(4 / 4)

- (1)目標 物の形をきいたり, 答えたりできるようになる。
- (2)単語及び英文 fish, rice, bread, cake, ice cream, salad, chicken, egg, orange, juice, milk, rectangle, circle, triangle, square, round, star, sun, moon  
What shape is it? It's rectangle.
- (3)教具 フラッシュカード(食べ物, 形), 形カルタ, 聞き取りプリント, 歌(Head, shoulder, knee and toes), 教室内の教具, 音声CD, マペット
- (4)展開

活動内容	指導上の留意点
<p>1 はじめの挨拶 英語であいさつを交わす。 T:Hellow everyone. How are you? C:I'm fine thank you. How are you? T:I'm fine too. Thank you.</p>	<p>前時に習った What color is it ? なども使って簡単な会話をする。</p>
<p>2 フラッシュカードで単語の練習をする。 食べ物の新出単語 fish, rice, bread, cake, ice cream, salad, chicken, egg, orange, juice, milk</p>	<p>テンポよく, 何度も練習させる。 11/18に来校するALTとの活動に備え練習させる。</p>
<p>3 Webダイアログ「形の名前をきく」を開き, 形について知る。 フラッシュカードで単語の練習をする。</p>	<p>CDをきかせる。 フラッシュカード rectangle, circle, triangle, square, round, star, sun, moon</p>
<p>4 マペットでダイアログの練習をする。 What shape is it ? It's rectangle.</p>	
<p>5 シェイプタッチゲームをする。</p>	<p>TOSSランド 5470038 何度もネイティブの発音を聞かせる。</p>
<p>6 形カルタで, カルタ取りゲームをする。</p>	<p>自作の形カルタ(五色カルタをコピー)</p>
<p>7 教室にある教具を見て, 次の質問に答える。 What's this ? What shape is it ?</p>	<p>ボール, 消しゴム, 三角定規, 筆箱など 2文から4文のダイアログに発展させる。</p>
<p>8 サイモンセツゲームを行う。 Please touch something rectangle.</p>	<p>教室の四角形, 三角形, 円に触らせていく。</p>
<p>9 リスニングに挑戦する。</p>	<p>プリント配布 CDをきかせる。解答させる。 「英語, はなそ!」を参考に今日のダイアログを参考に英語の指示を聞</p>

10 歌を歌う。 Head shoulder, knee and toes 11 終わりのあいさつ Good bye.	き取ることができるか試させる。
--	-----------------

『総合的な学習の時間』に児童が体験したインターネットコンテンツ

『NHK えいごリアン 学校放送』のゲーム集

<http://www.nhk.or.jp/eigorian/ja/frame.html>

- 1 三択シルエットクイズ
- 2 数はいくつ?
- 3 右向け右! 前進せよ!
- 4 かぎはどこにある?
- 5 ジャンプせよ! お金をあげろ!
- 6 今何時?
- 7 あなたの車はどれ?

『TOSSインターネットランド』のコンテンツ

『たんぼのお家』 <http://homepage3.nifty.com/masao1/>

- 1 カラータッチゲーム
- 2 ナンバータッチゲーム

### 3. 実践の考察

英語活動に関して児童へのアンケートを実施し、その結果をもとに次のような点について考察を行った。

児童の英語活動に対する興味関心について

映像を使った英語活動について全員が楽しかったと答えている。前年度、英語活動に消極的だった児童も熱中して取り組む姿が見られた。インターネットコンテンツを利用した活動は、児童の興味をかきたて、集中して取り組んでいた。

映像・音声を利用する英語活動の効果について

『えいごリアン』と『TOSSインターネットランド』のコンテンツは、オールイングリッシュである。日本語の説明は一切ない。11名の「わからなかった」児童が、ゲーム半ばから、「大体」わかるようになっている。3問目くらいまででわかった児童は、「完璧」にわかるようになったと答えている。児童たちは、既習の内部情報を使ってネイティブの発音によるダイアログを理解し、正解を出すようになっていったのである。映像を伴ったダイアログを、テンポよく、何度も繰り返し聞きさせることが、英会話の定着に影響を与えるものであると思われる。

パペットの利用による対話イメージの獲得について

児童にとって、「オウム返し」は容易だが、「応答」する状況が理解しづらいという前年度の反省を踏まえて、パペットを利用した。現状は、活動にALT等が常時参加できる環境ではない。ほぼ80%の児童が「応答」の状況を理解していることから、担任だけで指導する際には、パペットの利用は効果があった。

授業後、子どもたちは次のような感想文を書いている。

- ・ なんか英語が嫌いだったけど、英語が楽しくなった。
- ・ 最初は難しかったけど、だんだん楽しくなった。スマートボードがおもしろかった。
- ・ なんか初めはわからなかったけど、今はおもしろい。
- ・ パソコンを使って、スクリーンにタッチしてやるのが（スマートボード）楽しかった。
- ・ パソコンや、パペットを使ってやったから楽しかった。
- ・ 人形（パペット）やコンピュータを使ってやる授業は、とても楽しくわかりやすいし、みんな楽しそうだった。
- ・ 映像（えいごリアン・TOSS ランド）やパペットを使って楽しく覚えめました。

### 児童へのアンケート及び調査結果

設問1 映像を使った英語活動は、楽しかったですか？

楽しかった	楽しくなかった
27人	0人

設問2 えいごリアンのゲームについて聞きます。最初の3問目くらいまでのゲームは、英語で何と言っているのかわかりましたか？

わかった	わからなかった
16人	11人

設問3 えいごリアンのゲームを続けていったときのことを聞きます。途中から、英語で何を言っているのかわかりましたか？

完璧にわかるようになった	大体わかるようになった	最後までわからなかった
17人	10人	0人

設問4 パペットをつかっときの事を聞きます。会話の受け答えで、自分がどの部分を言うのかわかりましたか。

わかった	わからなかった
21人	6人

設問5 2学期の英語活動について、感想を自由に述べなさい。

- ・ もっと難しい問題がいい。スマートボードを使っているからいい。
- ・ パソコン（スマートボード）で自分の答えを押せるのがいいし、紙に印刷した英語（フラッシュカード）に絵が描いているのがよかった。

#### 4. 今後の課題

パペットを利用して、ダイアログの「応答」状況をつかませるためには、はっきりと役割のちがいがわかるように、教師が声のメリハリをつける訓練をする必要がある。設問5の自由記述の中には、映像の利用による楽しさや理解のしやすさについての記述が多く見られた。特に、今年度はパソコン、プロジェクター、『スマートボード』（日本スマートボードテクノロジー社 カナダ製：タッチパネルのような機材）、スピーカーを教室に持ち込み、英語活動を実施した。一方的な映像の提示でなく、『スマートボード』にタッチすることで双方向の活動が可能となった。解答を選択できること、テンポよく出題される問いにすばやく反応できること、何度もチャレンジでき

ることなどが、児童を熱中させた要因と考えられる。しかし、現在の環境は、各教室に機材を常設し、インターネットに接続可能な状況には至っていない。今後の環境整備が望まれる。

アンケートの回答の自由記述の中に「もっと難しい問題がいい。」という感想があった。今回実践した

『えいごリアン』のゲームでは、『三択シルエットクイズ』がやや高度である。この感想を書いた児童のように、同レベルの英語活動を昨年に続けて経験している者が、本学級に30%存在する。しかも、担任が紹介したインターネットのサイトを、家庭でも視聴している児童も多い。これらの児童のように英語活動の経験時間が多い場合や、思春期に入り知的水準が高度になってくると、単純な活動では彼らの要求にこたえられない場合が出てくる。高学年、特に6年生になるにつれて、「お遊戯的な」英語活動に物足りなさを感じ、意欲的でなくなるという報告を目にする。児童の要求にこたえられるような、知的興奮を誘う内容の活動を仕組んでいく必要を痛切に感じる。

### (3) 実践例 その3 (武庫庄小 5年生)

#### 1. 実践の概要

小学校英語活動の目標は、英語に慣れ親しみ、楽しく学習する姿勢を身につけさせることである。まず、身近なやさしい英語を聞いて英語の文化を楽しみ、それにふれることに興味や好奇心を持たせることが重要である。そのためには、児童たちを引きつけ活動的に参加を促すため、児童が面白い遊び感覚にあふれた活動が必要になる。そこで、自然に英語が話せるような活動的な場面を数多く取り入れる等の工夫を図り、児童たちが抵抗なく生き生きと学習できるような授業研究に取り組んだ。

本学級の児童は明るく活発である。全体的に好奇心が強く、「～してみたい」という気持ちをもっている子が多い。本校では、年に何回かALTがきて英語にふれあう活動が行われている。しかし、英語活動については全く素地がなく積み重ねもない。ALTとの英語活動では、児童たちにとって「発音がわからない」「何を話したらよいのだろうか」という不安がある。学級担任もALTとのかかわりがわからないまま一時間を終えてしまう現状である。

今年は2回ALTとの英語活動があるので、より充実した英語活動ができるような環境づくりに取り組んでいこうとした。そこで児童の発達段階を考慮しながら、ゲームなど楽しい活動をとりにくみ合わせて英語にふれさせようと考えた。まず「数」から入ることにした。「数」は比較的耳にすることが多いので、自然に「数」の単語を話せるような活動の場面を多く取り入れた。学級担任のみで英語活動を行うのは初めてだが、楽しみながら英語に親しむことができ、英語を話す楽しさを味わわせたいと考えた。

#### 2. 学習指導案

対 象 5年生児童  
指導者 H R T  
単元名 英会話をはじめよう

単元目標

- ・英語に慣れ、英語活動を楽しむ。
- ・簡単な英語の表現を知る。

単元計画（全4時間）

時	ねらい	主な学習活動	主な言語表現
1	・簡単な英語の表現を知る。 ・数を聞いたり、答えたりできる。	・あいさつ ・英語で数をたずねてビンゴゲームをする。	How are you? I m fine thank you . What number is it ? It s .
2	・簡単な英語の表現を知る。 ・友達の年齢を聞いたり、答えたりできる。	・あいさつ ・年齢集めゲームをする。	How are you ? I m fine thank you . How old are you ? I m years old .
3	・簡単な英語の表現を知る。 ・色を聞いたり、答えたりできる。	・あいさつ ・色あてゲームをする。 ・サイモンセズゲームを行う。	・ How are you ? I m fine thank you . How are you ? I m fine too . Thank you . What color is this ? It s .
4	・簡単な英語の表現を知る。 ・果物の名前を聞いたり、答えたりできる。	・あいさつ ・フルーツバスケットゲームをする。	How are you ? I m fine thank you . How are you ? I m fine too . Thank you . What fruit is this ? It is a .

本時の学習（1 / 4）

（1）目 標

歌やゲームを通して簡単な挨拶や数字を言うことができるようにする。

（2）学習単語及び英語表現

one から twenty までの歌      What number is it ?      It s .

（3）準備物   フラッシュカード（数字）   音楽CD      ビンゴカード

（4）展 開

活動内容	指導上の留意点
1    イントロダクション。	・ALTと片言でよいから英語でコミュニケーションができるように、がんばろうという意識を持たせられればよい
2    はじめのあいさつ	

<p>・英語であいさつを交わす。  T : Hellow everyone. How are you?  C : I'm fine thank you. How are you?  T : I'm fine too. Thank you.</p> <p>3 H e l l o w S o n g を歌う。</p> <p>4 数字のフラッシュカードを使い 1 ~ 2 0 の数字の単語を覚える。</p> <p>5 ビンゴゲームをする。</p> <p>6 お別れのあいさつを交わす。  ・授業の終わりにお別れのあいさつを交わす。  T : Good bye everyone.  C : Good bye.</p>	<p>・教師がリピートさせる。  教師対児童で</p> <p>・大きな声を出させて、楽しく歌わせる。</p> <p>・テンポよく何度も練習させる。  ・フラッシュカード</p> <p>・用紙に 1 ~ 2 0 の数字を書かせる。  教師がカードをひき、子どもたちがそのカードの数字を言いながらビンゴゲームを進めていく。</p>
--	---

< 児童の感想 >

- ・ 5 時間目に英語で 1 ~ 2 0 までの数を教えてもらいました。数字の言い方は知っていたけど発音がアメリカにぐーっと近づいている気がしました。
- ・ 1 から 2 0 までの数の勉強をした。ぼくは 1 から 1 0 までは言えるけど 1 1 から 2 0 までは言えなかった。英語の勉強をして言えたからうれしかった。
- ・ 英語の授業がありました。英語であいさつをしました。1 から 1 0 までの英語しか言えなかったけど、1 1 から 2 0 までの数字を覚えました。ビンゴをみんなでやりました。とっても楽しかったです。いろいろなことを教えてもらって勉強になりました。
- ・ 数字を発音したり歌を歌ったりしました。1 から 2 0 までやりました。ビンゴもやりました。1 から 1 0 まではスラスラーと言えたけど、1 から 2 0 はちょっとだけわからなくなりました。でも、だんだんやっているうちにスラスラ言えるようになりました。また、英語の勉強がしたいです。
- ・ 今日、英語をして 1 から 2 0 までの数字を教えてもらいました。1 1 から 2 0 までとっても難しかったです。特にわたしは 1 2 と 1 5 が難しかったです。もっともっと、教えてもらい 1 0 0 まで言えるようになりたいです。数字をたずねる時にも「ワッツナンバーズイツ」と言えばいいことがわかりました。ビンゴでも数字を覚えながら遊べてとっても楽しかったです。また、やりたいです。
- ・ 英語の数の勉強をしました。5 時間目に英語の勉強で 1 から 2 0 までを覚えました。“ 1 2 ” ととても難しかったです。でも、「トォエルブ」も覚えました。次は、会話ができるようにしたいです。

### 3. 実践の考察

学級担任が主に進めるメリットについて

- ・ これまでは、ALTによる授業だけであったため、今回のように学級担任が主として活動をすすめていくということで少し不安があった。しかし、児童の実態を把握できているので、指名の際に配慮したり、指示等を出す時にも児童の動きを予想したりすることができ、心地よいリズムとテンポでの英語活動を児童に体験させることができた。また、児童は、普段の授業の雰囲気の中で安心してように活動することができていた。
- ・ ALTとの英語活動が受け身だった児童も英語活動の時間を楽しみにするようになってきた。2度目のALTとの活動では、大きな声で話すことができるようになった。このようにALTとの活動に児童が慣れてきている。次に児童が求めるものは、もっとALTの言っていることを理解したい、もっとALTと話がしたいということではないだろうか。英語でいっていることを理解するためには、英会話や会話文にたくさん触れることが必要である。学級担任ができる具体的な活動としては、フラッシュカードを日常、短時間に繰り返し児童に提示することやALTの来校の時だけ英語活動をするのではなく、学級担任による英語活動を定期的に行うことである。

歌やゲームの利用について

- ・ Hello の歌は子どもたちは大好きで普段の朝の会で歌うようになった。あるいは、同じゲームを繰り返し行うなかで、子どもたちは知らず知らずに英語の表現に慣れ、英語を話すことが苦にならなくなってきた。こうした状況になってきたのは、リピートや、クエスチョン&アンサーだけの単調な練習だけでなく、児童の興味や関心が持続するように、ゲームや歌などの楽しい活動を取り入れた結果ではないかと考えられる。

フラッシュカードについて

- ・ 1～20までの数を、フラッシュカードにより練習したが、いきなり「1～20」を扱うのは、無理があった。児童の感想に、『「1～10」までは、スラスラ言えたけど「1～20」はちょっとだけわからなくなりました』といったことからわかる。
- ・ フラッシュカードを扱うときの留意点としていくつか挙げることができる。一つ、フラッシュカードの裏に、英単語を書く。指導者がカードの表をいちいち覗き込まなくてもよいからである。二つ、フラッシュカードは、指導者の顔の横または、胸の前で扱う。発音するときの指導者の口元の動きを、児童に見せることができるからである。三つ、フラッシュカードをめくるときは、「後ろ」のカードを「最も前」に持ってくるようにする。裏にある文字を見ることで、指導者が、児童より先に次のカードを知ることができ、児童は、カード提示とともに、指導者の発音を聞くことができるからである。

### 4. 今後の課題

- ・ 子どもが興味・関心をもって取り組める英語活動の展開を図るために、一時間の活動の中に、定着を図りなおかつ意欲が持続するようなゲームを取り入れるなど

教師側の工夫が必要になってくる。

- ・学級担任だけの英語活動で楽しく活動ができて、ALTとの英語活動ではネイティブな発音に慣れず、戸惑いを感じる子もいる。ALTを効果的な場面で活用できるようなALTとの連携のとれた授業実践の構築を図ることが大切である。

#### 4 研究のまとめと今後の課題

『小学校英語活動実践の手引き』(3章 1(1)イ)には、「ALTは、ネイティブスピーカーとして、生きた英語の提供者である。日常生活のいろいろな場面で、自然な英語の使い方や発音を指導する。異文化の体現者として、外国の様々な習慣や考え方や発想を子どもたちに伝えることができ、外国や外国語への興味を喚起する。」とある。このようなALTから児童は、本物に近づいたり、本物の英語の音が出せたりする喜びを味わうことができ、英語活動への意欲を高めることができる。このような点について、学級担任がすすめようとする英語活動では、最も懸念される場所であった。しかし、視聴覚機器を活用したり、「えいごリアン」などを利用したりすることによって、ネイティブスピーカーに替わる発音を児童に聞かせるといったことができ、ALTが果たす役割のすべてではないが補充することができるとうかがった。

実践例その3に見られたことであるが、ALTとの英語活動では、「ネイティブスピーカーの発音がわからない」とか「何を話したらよいかわからない」などの不安を感じている児童がいる。こうした場合には、学級担任による英語活動の方が児童に対して安心感を与えようまくいくことが多いようである。また、英語活動にはじめて取り組んだ児童の場合、大変、意欲的に活動に取り組む傾向があることもわかった。さらに、今回の研究では、指導形態を学級担任が単独の場合と、学級担任と学級担任外教員の2人で指導するという英語活動を実践したわけであり、難しい点もあったが、まず、やってみようという姿勢が教師に必要であるということがわかった。将来的には、学級担任がALTと連携して英語活動を進めることで、より一層の効果を上げることが可能であり、その方向で取り組むことが必要であると考えられる。

##### (1) 成果

- ・学級担任と学級担任外教員が行った英語活動においても、児童たちの英語活動に対する関心・興味を引き出せることがわかった。
- ・英語活動を否定的に思っている児童はなく、ゲームをもっとしたい、もっとレベルを上げてほしいと思っている児童がいる。
- ・もっと英語を学びたい、自己紹介ぐらいは出来るようになりたい、いろいろな単語を覚えたい等と思っている児童が多い。
- ・インターネットコンテンツを利用した英語活動は、児童の興味をかきたて、学習に集中して取り組む姿が見られた。
- ・映像を伴ったダイアログを、テンポよく、何度も繰り返し聞かせることが、英会話の定着に影響があると思われる
- ・学級担任だけで会話の状況を指導する際には、パペットの利用は効果があることがわかった。

- ・ A L T との英語活動が受け身だった児童も英語活動の時間を楽しみにするようになってきた。2度目の A L T との活動では英語でコミュニケーションしようとする意欲が出てきて、大きな声で話すことができるようになった。
- ・ 同じゲームを繰り返し行うなかで、児童たちは、体験を通して英語の表現に慣れ、英語を話すことが苦にならなくなった。

(2) 今後の課題

3つの事例から、次のような課題が挙げられる。

- ・ 児童たちの興味を持続させ、英語活動が1時間きりの活動にならないための積み重ねをしていくということが必要である。
- ・ 今回の英語活動は学級担任と学級担任外教員の2人で進めているため教材の準備や提示の仕方、インターネットのサイトの利用、教材研究（主に発音やイントネーション）など、指導者側の多くの課題をクリアしていかなければならない。
- ・ 現在の学習環境（教室）においては、インターネットを利用したり、視聴覚機器を使った有効な学習形態によって英語活動を行うことができない。
- ・ 高学年になるにつれてお遊戯的な英語活動に物足りなさを感じ、意欲的でなくなる。したがって、児童の要求にこたえられるような、知的興奮を誘う活動内容を考えていく必要がある。
- ・ 児童の興味・関心に視点を当てて、意欲的に取り組める英語活動案を考えていく必要がある。
- ・ A L T と学級担任の T T（チームティーチング）による英語活動の展開を推進していく。

【参考文献・CD】

東京教育技術研究所 渡邊憲昭 編著

『小学校英会話指導年間計画集録 TOSS英会話指導案集 <低学年・3年・4年>』

東京教育技術研究所

『小学校英会話指導のためのダイアログ集66選 英語、はなそ!』

東京教育技術研究所

『小学校英会話指導のための「ダイアログ66選」音声CD』

『TOSSインターネットランド』前田康裕氏のサイト（フラッシュカード）

<http://www.aminet.or.jp/~yasu/illustrations/index.htm>

文部科学省

『小学校英語活動実践の手引』

教育開発研究所

『教職研修5月増刊 1 小学校英会話指導のテクニックとプラン』

## 教師が身につけたい情報活用スキルの研究

指導主事	西田 互
研究員	大森 康充（杭瀬小）
”	平井 伸子（金楽寺小）
”	渡邊 明美（浜小）
”	小倉 明子（園田北小）

### 【内容の要約】

情報機器の発達にはめざましいものがあり、子どもたちが簡単にインターネットなどを通して情報を扱う機会が増えてきた。しかし、便利になった反面、ネットを介した犯罪や被害も同様に増えてきている。

また、文部科学省では、平成17年度までに各教室にインターネット接続したコンピュータを配置し、各教科の授業にもコンピュータ利用が可能になるよう計画している。益々、情報を正しく扱うための指導が重要になってきた。

本研究では、情報教育を指導するために、教師が身につけたい情報活用スキルを研究した。今年度は、授業を通して検証することにした。

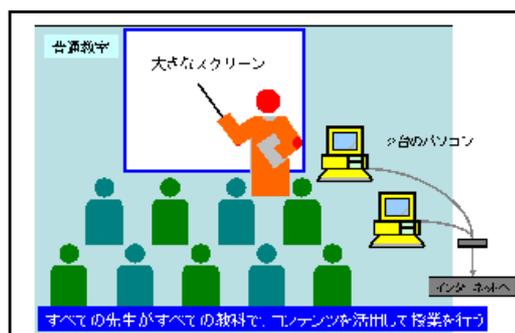
キーワード：小学校、情報教育、情報活用の実践力、総合的な学習の時間、カリキュラム、コンピュータ、インターネット、情報モラル  
教師の情報活用スキル

1	はじめに	93
2	研究について	94
3	教師の情報活用スキルについて	95
4	実践事例	95
5	おわりに	105
	資料	107

## 1 はじめに

文部科学省のホームページ（<http://www.mext.go.jp/>）によると、「高度情報通信ネットワーク社会が進展していく中で、子どもたちが、コンピュータやインターネットを活用し、情報社会に主体的に対応できる『情報活用能力』を育成することは非常に重要」と記されている。また、小学校段階においては、各教科等や総合的な学習の時間においてコンピュータやインターネットの積極的な活用を図るとともに、各教科等の授業の中で、教師がプレゼンテーションしたり、子どもたちがコンピュータやインターネットで調べたり、交流したりすることによって、情報活用能力の一層の充実を図り、「わかる授業」や「魅力ある授業」の実現に役立てていくとされている。

さらに、こうした情報化に対応した教育を実現するため、平成17年度年度までに、「すべての小中高等学校等が各学級の授業においてコンピュータを活用できる環境を整備する」計画が推進されている。



### (1) 情報教育の目標

「情報教育の実践と学校の情報化」(文部科学省 平成14年6月)によると、小学校における情報教育の目標は、「『生きる力』の重要な要素として、教育活動全体を通じて、『情報活用能力』をバランスよく、総合的に育成することを目標としている」と述べられている。この『情報活用能力』は、次の3つの要素から構成されている。

#### 情報活用の実践力：

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することをふくめて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力。

#### 情報の科学的な理解：

情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用の評価・改善するための基礎的な理論と方法の理解。

#### 情報社会に参画する態度：

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度。

小学校段階では、特に「情報活用の実践力」を育てることが中心になると考えられる。さらに、近年、様々なネット上でのトラブルも増えており「情報社会に参画する態度」の育成も急務になってきたと言える。

## (2) 教科と情報教育

情報教育のねらいの1つである「情報活用の実践力」の育成は、総合的な学習の時間に期するところが大きいですが、教科学習の時間においても情報教育を意識しながらカリキュラムを作成していくことが必要になる。

「情報教育の実践と学校の情報化」においても「情報活用能力の育成は、情報に関する教科等のみでなく、学校教育活動全体で取り組まれて実現するものである。学び方や問題解決の仕方の一つとして情報を主体的に選択・活用できる能力を育成することをねらいとする情報教育は、各教科等の目標の達成にも極めて有意義であり、各教科等の学習指導においても、情報活用能力の育成との関わりを理解の上、計画的に情報教育に取り組むことを求められている」とある。

## 2 研究について

### (1) 研究テーマ 「教師が身につけたい情報活用スキルの研究」

### (2) テーマ設定の理由

総合的な学習の時間等でコンピュータやインターネットを利用して情報を収集する活動が盛んに行われている。これらの情報を正しく扱うために、情報活用能力を育成する必要性が増している。

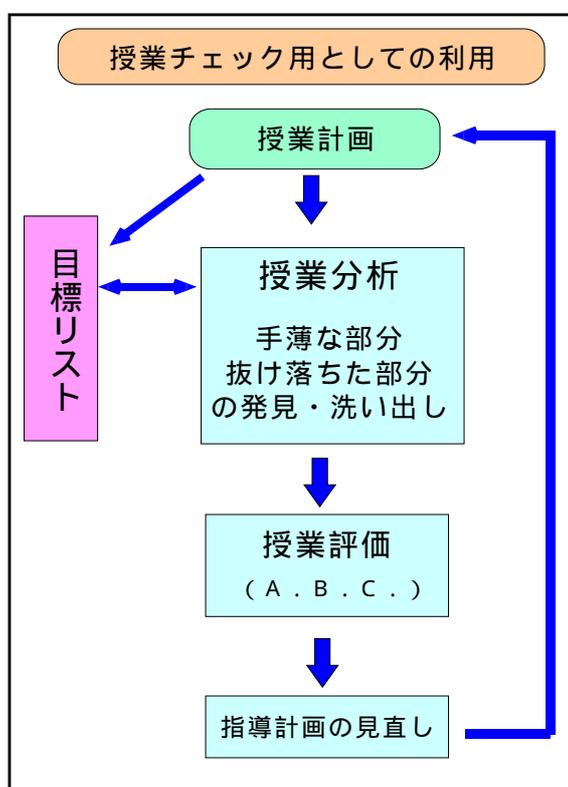
そこで、子どもたちの情報活用能力を育成していくために、教師が身につけておきたい情報活用のスキルにはどのようなものがあるのかを研究したいと考え、テーマを設定した。

### (3) 研究の方法

本研究部会では、平成13年度に「情報モラル」と「情報収集」、昨年度は「表現」について、教師の情報活用スキルのリストを作成した。

今年度は、授業実践を通して、作成したリストが教師に役立つものになっているかを検証することにした。なお、右図の授業評価については、本来ここで表記すべき内容であるが、時間的な理由から今回は省略する。

教師の情報活用スキルを考えるにあたって、永野和男教授（聖心女子大学）らが作成した情報教育目標リスト（参照 火曜の会ホームページ <http://kayoo.org/home/>）を参考にした。



### 3 情報活用スキルについて

一般的に、「情報教育 = コンピュータ」と考えられているケースが多いが、コンピュータを操作することが情報教育ではない。

「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することをふくめて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」を育てることが、情報教育の目標である。コンピュータは、情報手段の1つに過ぎない。

そこで、研究するにあたって、コンピュータ操作に拘らず情報を扱う様々な場面を想定して教師に必要なスキルを考察した。

「(1)情報モラル」は、個人情報の大切さ、相手の状況を踏まえた情報発信、人権、ネットワーク上のマナー、知的所有権の保護などの項目についてのリストになっている。

「(2)情報収集について」は、教師自身の活用としての目標と子どもへの指導としての目標に分けた。教師自身の目標は、これまでの経験が比較的少ないコンピュータ操作の項目が多くなっている。

「(3)表現について」は、「適切な情報手段の利用」、「整理・分析・判断」、「発信・伝達」、「評価」など活動場面を想定して項目を考えた。

目標リストの詳細は、資料参照。

### 4 実践事例

#### (1) 実践事例 3年生

##### 1. 実践の概要

本学級の児童たちは、これまでにゲームやお絵かきを通じてコンピュータに親しんではいるが、デジタルカメラを使ったり、画像をサーバから取り込んだりすることは初めてであった。

そこで、今回はプレゼンテーション作成ソフト「はっぴょう名人」を用いて、自分で取った画像を取り込んで簡単な説明を加えることを本時の目標とした。

##### ア 目標

自分たちが調べた“体の不自由な人を助けるもの”の写真を取り込み、プレゼンテーション作成ソフトを使ってまとめることができる。

##### イ 教師の情報活用の目標

2-1-9 情報収集に必要な情報機器を使いこなすことができる。

・デジタルカメラやスキャナ、デジタルビデオなどを使って画像を撮ることができる。

2-1-11 情報をサーバなどに保存し、情報の共有ができる。

2-2-1 教師自身が収集方法を実際に演示した上で、子どもに操作させることができる。

2-2-2 情報収集のねらいや子どもにつけさせたい力を明確にして、学習指導が

できる。

3-2-1 収集した情報の中から，必要なものを選ばせることができる。

## ウ 展開

児童の活動	教師の支援	評価
1. 本時の活動を知る。	<ul style="list-style-type: none"><li>デジタルカメラの画像をはっぴょう名人に取りこみ，説明を加えることを確認する。</li></ul>	
2. はっぴょう名人に画像を取りこむ。 	<ul style="list-style-type: none"><li>サーバから画像をとりこむ方法を説明し，わからない児童に対しては個別に対応する。</li><li>見る人がわかりやすい写真を選ばせる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>サーバから画像を取り込むことができる。</li><li>適切な写真を選ぶことができる。</li></ul>
3. 写真に説明を加える。	<ul style="list-style-type: none"><li>適切な説明ができるよう助言する。</li><li>かな入力，文字パレットの使用など，児童に応じて文字入力の方法を考えさせる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>写真に適切な説明を加えることができる。</li></ul>
4. 保存する。		<ul style="list-style-type: none"><li>作品を保存し，確認できる。</li></ul>

## 2. 実践の考察

あらかじめ撮った写真のデータをサーバに保存しておき，大型提示装置（メディアサイト）を使って，一つ一つの手順をクラス全体で進めた。児童にとっては初めての操作であったが，メディアサイトを用いて一斉に進めることができるので，わからないことがあっても，すぐに画面を確認し，友だち同士で教えあったりすることができたので混乱する児童は少なかった。文字入力については，ローマ字入力の児童もいれば，かな入力をしたり文字パレットを使用したりする児童もいるため，自分に応じた入力方法で行った。



本校は，コンピュータの利用が多いほうではないが，コンピュータを使う活動に対して児童の意欲は高い。低学年から段階を踏んで情報機器の操作に慣れ親しませ，正しい使い方を指導していくことが必要だと感じた。

カリキュラムや指導案などを作成する際には、このリストで必要な項目を確認することで、機器を使い慣れていない教師にも参考になるとと思われる。

## (2) 実践事例 5年生

### 1. 実践の概要



情報教育といえば、コンピュータの操作の指導にばかり目がいきがちであるが、児童が調べ学習でインターネットを活用したり、メールで問い合わせや依頼をするようになると、情報モラルやネチケツなどを身に付けさせる指導が必要になってくる。

また、様々な事件やトラブルに巻き込まれないために自分や身の周りの人を守るための方法についても十分に理解させなければならない。

そこで、インターネットを使うときの「5つの約束」を設定し、その意味を児童に十分に理解させ、身に付けさせなければならないと考えた。今回、5年生を対象に体験型ホームページで疑似体験させ、個人情報の保護の大切さや、不適切な情報に対しての適切な行動について学習させた。

#### ア 目標

個人情報の保護の大切さについて理解できる。

情報の中には不適切なものがあることを知り、適切な行動ができる。

#### イ 教師の情報活用の目標

1-1-1 個人情報の保護についてその重要性に気づかせる。

1-1-2 個人情報を守るための方法を理解させる。

- ・インターネット等で知り合った人に自分の氏名、住所、年齢、電話番号等の個人情報をむやみに教えないことを理解させる。

- ・登録名、パスワードの管理の大切さについて理解させる。

1-1-3 個人情報が悪用される可能性があることを理解させる。

1-2-1 自分の情報だけでなく他者の個人情報も尊重し保護する態度を育てる。

1-2-2 友達のIDやパスワードを無断で使ってはいけないことを理解させる。

1-9-1 チェーンメールや信用できない噂話も、情報に含まれている場合があることを理解させる。

- ・不愉快なメールを受け取ったときには削除させる。

- ・不適切な情報があれば、すぐに大人に知らせることの大切さを理解させる。

1-9-2 知らない人からメールや添付ファイルが送られてきた場合は、開かないで大人に相談させる。

1-9-3 インターネットを使った商取引の実体を知り、悪徳業者も存在することを理解させる。

- ・体験型ホームページを使って，インターネット上の商取引を疑似体験させて，その危険性を学ばせる。

## ウ 展開

児童の活動	教師の支援	評価
1．本時の学習活動を知る。	・インターネットには便利な面ばかりでなく，危険な面があることに目を向けさせる。	・インターネットの危険性に気づくことができる。
2．「5つの約束」について考える。	・体験型ホームページを用いながら他人ごとではなく，身近な問題としてとらえさせる。	・個人情報が悪用される可能性があることが理解できる。
3．体験活動をする。	・「5つの約束」や個人情報の保護の大切さ，適切な行動について考えさせながら体験させる。	・不適切な情報などに対して適切な行動をとることができる。
4．感想を発表する。	・インターネットを利用するにあたってどんなことに気をつけなければならないかに着目させる。	・「5つの約束」をふまえて自分の考えを発表できる。
5．本時のまとめをする。	・「5つの約束」を確認させる。	・「5つの約束」を理解することができる。

### 5 つ の 約 束

**1. インターネットを利用するときは，自分の名前や住所，電話番号，学校名，電子メールのアドレス，パスワードなどの個人情報は聞かれても答えません。家族や友達の情報も教えません。**

個人情報が悪用されることがある。

- ・迷惑メール・訪問販売・いたずら電話など

**2. インターネットで仲良くなった人でも，絶対に会ってはいけません。**

相手がどんな人か（年齢・性別・性格）わからない。

**3. インターネットで、いやだな・こわいな・困ったなと思うことがあったら、おうちの人や学校の先生などにすぐに知らせます。**

イヤがらせをされたり、危ない思いをしたりするトラブルや事件がおこることもある。

**4. 知らない人から送られてきたメールやファイルは、絶対に開きません。**

書いてあることが正しいとはかぎらない。

ウィルスがついている場合もある。

**5. インターネット上での発言には、責任と思いやりを持ちます。**

ネチケット [ ネット上のエチケットのこと ] を守る。

文字だけでこちらの気持ちを伝えることは難しく、相手の反応も伝わりにくいので、

ネット上で発言するときには、いつもより相手のことを考える。

## 2. 実践の考察

授業前に実態を把握するため、児童31名にインターネット（メール、チャット、掲示板等）に関する簡単な聞き取り調査を実施した。結果は、チャットの経験者が2～3名など、予想したほど経験した児童は多くはなかった。しかし、ネット社会は身近なものになり、児童用のサイトも多く、小学生といえども様々な



トラブルに巻き込まれる可能性は高い。また、家庭にパソコンがあるかないか、インターネットをどの程度利用しているかなど、児童の経験に差があるため、教師がインターネットの利便性と危険性を十分に理解した上で系統的な指導を行う必要があると考えた。

そこで、これまで漠然ととらえていた情報モラルについて、教師の情報活用リスト「(1)情報モラル」の各項目を参考にして事前準備を行った。すると、かなりの知識が必要であり、例えば、個人情報一つにしても、「氏名」、「住所」、「年齢」、「電話番号」、「メールアドレス」、「学校名」等、様々なことがあることがわかった。「なぜいけないのか」、「どのようなことがおこるのか」ということを指導者がよく理解していなければならないということに改めて感じた。

教師の情報活用の目標リストは「何を指導しなければならないのか」ということを大きく捕らえ、整理するのに適している。しかし、児童に適切に指導するためには、かなりの研修と教材研究が必要である。このリストが全てではなく、年々変化する情報社会に対応した情報教育を進めていかなければならないと感じた。今回は情報モラルという観点での実践であったが、実際に調べ学習を行う場合を想定すると、情報収集や表現についても関連してくるものが出てくる。このリストも便宜上、大きく3つに分類されているが、情報モラル、情報収集、表現を別々のものとして捕らえるのではなく、これらをバランスよく組み合わせる効果的な指導を行い、子どもたちがネット社会を生き抜く力を育てていきたい。

また、体験型ホームページの利用については、どの項目に重点をおいて指導を行う

かを明確にしておかなければ、興味本位でインターネットを利用するようなこともおこりかねないので、正しい知識を身に付けさせ、日常生活に生かせなければならぬと感じた。

### (3) 実践事例 6年生

#### 1. 実践の概要

子どもたちはコンピュータが大好きである。中・高学年にもなると、調べ学習の場面において、インターネットを大いに活用し、情報活用のスキルを高めていっていることと思われる。ただ、情報を受信し、それを吟味していく力を身に付けるのは重要であるが、同時に、責任をもって情報をよりわかりやすく発信する力も身に付けていかなければならない。そうすることが、伝え合う力や思いやりの心を養うことになり、結果的にコミュニケーション能力を高めていくことにつながるからである。



6年生の総合的な学習の時間において、「『いのち』をテーマに」という単元を設定し、「いのち」について調べた様々なことをプレゼンテーション形式にまとめ、発表させた。また、プレゼンの発表を聞いて思ったこと、感じたことなどを討論会で話し合うことにより、相手の意見のよさや自分の意見との違いについて考えさせた。

#### ア 目標

「いのち」をテーマに調べたことを、相手に良くわかるように発表することができる。

討論を行うことで、相手の意見のよさや違いを認め、自分の考えに生かしていこうとする態度を養う。

#### イ 教師の情報活用の目標

3-3-2 伝えたいことを明確にして、相手にわかりやすく伝えられるよう指導できる。

3-3-6 入手した情報の事実・伝聞・情報提供者の考え・自分の考えを明確に区別して発信するよう指導できる。

3-3-7 情報の入手先を必ず明示するよう指導できる。

3-3-8 集めた情報を伝達するだけでなく、集めた情報から考えたこと、自分の思いを伝えるように指導できる。

3-4-3 自分の考えと違う意見があることに気づかせることができる。

3-4-4 他の人の発信した情報のよいところに気づかせることができる。

#### ウ 準備物

・ノート PC ・液晶プロジェクタ ・スクリーン

工 展開

児 童 の 活 動	教 師 の 支 援	評 価
<p>1．本時の活動を確認する</p>	<p>・プレゼン及び討論会の流れや約束について説明する。</p>	
<p>「いのち」をテーマにプレゼン＆討論会！</p>		
<p>2．各グループのプレゼンを聞き、その内容や主張について討論する。 （3グループが円卓に着席し、プレゼンと討論を行う。残りの児童はその様子を観察する）</p> <p>プレゼンをする。</p> <p>討論に入る前に、プレゼンに対する自分の意見をはっきりさせ、ワークシートに記入する（全ての児童）。</p> <p>プレゼンに対する自分の意見を発表する。 （円卓の児童）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・理由も述べる。</li> <li>・印象に残った発言、納得させられた発言などをワークシートに記入する。（全ての児童）</li> </ul> <p>討論する。</p> <p>残り2グループのプレゼンで、～を繰り返す。</p> <p>3．本時の学習を振り返り、ワークシートに感想を書く。</p>	<p>・操作に不安なところがないか、あらかじめ聞いておく</p> <p>・友達と相談せずに、自分自身の考えを持つように伝える。</p> <p>・考えのまとまらない児童には、考えがはっきりするよう助言する。</p> <p>・各々の考えをほめ、発言への意欲につなげる。</p> <p>・自分と異なる意見でも、よいと思うものがあれば記入するように伝える。</p> <p>・司会は教師が行う。討論中、論点がずれそうになれば、適宜、助言する。</p> <p>・授業全体を通して感じたことや、考えが変化した点について書かせる。</p>	<p>・聞き手に良くわかるように発表することができる</p> <p>・プレゼンを聞いて、自分なりの意見を持つことができる。</p> <p>・自分の意見や主張がはっきりと伝えられている。</p> <p>・説得力のある主張の仕方や、他の人の発言のよいところに気づくことができる。</p> <p>・友達の意見を自分の考えに生かそうとすることができる。</p>

## 2. 実践の考察



子どもたちは初めてのプレゼンテーションということもあり、大変、頑張って取り組んだ。

しかし、できあがったプレゼンシートを見てみると、既存のホームページから資料（文章・写真等）をそのまま引用したものが多く、発表もプレゼンシートの文章をそのまま読むという場面が多く見られた。また、資料の出典を明記していなかったため、

伝えている内容が、発表者の意見なのか、単なる資料としての事実なのか、はっきりしていなかった。

教師の情報活用リスト（3-3-9 子どもたちの参考になるプレゼンテーションを行うことができる。）にあるように、まず教師自身が、「良いプレゼンテーションとはどんなものか？」ということ認識し、事前に見本となるプレゼンテーションを子どもたちに示す必要がある。そして、その良し悪しで子どもたちの出来も大きく変わってくると思われる。

また、引用に関しては、許諾を取ることや出典を明記することも指導していかなければならないが、何より、引用するだけでなく、「自分なりの表現」を意識させていくことが重要であると考え。「教師の情報活用の目標」で挙げた（3-3-6 入手した情報の事実・伝聞・情報提供者の考え・自分の考えを明確に区別して発信するよう指導できる。）や（3-3-7 情報の入手先を必ず明示するよう指導できる。）、（3-3-8

集めた情報を伝達するだけでなく、集めた情報から考えたこと、自分の思いを伝えるように指導できる。）の指導が、今回は徹底できていなかったと言える。集めた情報をただ伝達するだけでなく、自分の考えを自分の言葉でわかりやすく伝えるようにするにはどのように指導すればよいのか、再考しなければならない。また、そのままの引用という点では、著作権の問題にも係わってくる。情報モラルに関する指導も徹底していかなければならない。

今回の実践では、「教師の情報活用の目標リスト」の「表現」に係わる指導目標に着目して計画を立てた。子どもたちの表現する力や情報発信の力を伸ばすためにはどうすれば良いのかを、この実践事例に挙げられた目標だけでなく、他の項目（3-2-2

効果的な資料を選択させることができる。）、（3-2-6 要点を簡潔にまとめるように指導できる。）などにも着目し、さらに実践で検証していきたい。

### （4）実践事例 6年生

#### 1. 実践の概要

多くの小学校では、低・中学年のうちに、コンピュータを使い情報を収集したり、ワープロソフトを使って文字を入力したりするというスキルを身につけている。しかし、情報収集をするときや、文章を入力して目的に応じた表現をするにも、情報モラルや人権といったことを意識させて指導していかなければならない。

今回の授業は、6年生を対象としてメール機能を使い、卒業に向けての寄せ書きを作ろうと考えた。コンピュータの操作を習得させるだけでなく、向こう側にも人がい

ることや、メールを送る際のエチケット、また、ソフトを使用する際に必要なIDやパスワードの重要性を学習させた。

ア 目標

メールソフトの使い方がわかる。

メールを送る際に、相手のことを考え、文章を書ける。

イ 教師の情報活用の目標

1-2-1 自分の情報だけでなく他者の個人情報も尊重し保護する態度を育てる。

1-2-2 友達のIDやパスワードを無断で使ってはいけないことを理解させる。

1-3-1 メールでは相手に対する思いやりの気持ちをもって書くことを理解させる。

1-3-3 相手を考えた言葉遣いで情報交換させる。

・ネットワーク上では、文字による交流がほとんどであり、文字による交流では誤解がおきやすいことを理解させる。

1-3-4 相手の気持ちを考えて自分の意見を表現させる。

1-4-1 人権に配慮して書いて良いことと悪いことを理解させる。

1-4-2 配慮すべき人権の内容を理解できる。



ウ 展開

児童の活動	教師の支援	評価
1. IDとパスワードについての約束を思い出す。	・以前に学習したIDとパスワードについてふれる。	・友達のIDやパスワードを勝手に使ってはいけないことが理解できたか。
2. メールソフトの使い方を知る。	・初めて使用するソフトであるので、ID、パスワードの入力方法を説明する。	・メールソフトの使い方が理解できたか。
3. 受信メールを見て書いてよいこと、良くないことを見つける。	・全員に同じメールを送信し、題名、文章表現について間違いを見つけさせる。	・良くないところを見つけることができたか。
4. 同じクラスのペアの友達にメールを送る。	・友達のアドレスを間違えずに入力しているか確かめさせる。	・適切な言葉遣いでメールが書けているか。
「昨日見たテレビ番組について」	・アドレスが間違えていないことを確認してメールを承認する。	・相手のことを考えた内容をメールに書いているか

5. もらったメールについて感じたことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコンを使っているが、相手がいることを意識させる。</li> <li>・文章の言葉遣いや、もらったメールから受けた印象などを発表させる。</li> </ul>	
6. 本時のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メールの書き方や、表現方法について確認をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メールの書き方や表現の仕方を理解したか。</li> </ul>

【資料：授業の際児童に送信して間違いを見つけさせたメール】

題名 konnitiwakyouno5zikannmehame-runobennkyoudesuyo  
 こんにちは。  
 わたしはきんらくじしょうがっこうで6ねん2くみのたんにんをしている です。  
 住んでいるところは、尼崎市金楽寺町2丁目 - です。  
 ひまがあったら、遊びに来てね。  
 みんなはどこに住んでいますか。  
 教えなさい。  
 阪神尼崎の近くにある100円均一のお店で、本当なら500円ぐらいするものを売っていました。早く買いに行かないとなくなっちゃうよ！！これは、本当の話だよ。  
 みんなにも教えてあげてね。  
 話は変わるけど、昨日、阪神尼崎の駅前に、めっちゃむかつくやつがおってんやんかあ。それでそいつなあ。こっちばかり見て、なんか、とにかくはらたつんやんかあ。  
 それから、となりのクラスの っていやなやつやおもわへん？  
 ほんまむかつくよな。

2. 実践の考察

1学期から正しく情報を活用する能力を身につけるために、情報モラルについての授業を行ってきた。その際、インターネット上の教材「はむはむのおんらいん教室」(<http://www.teacher.ne.jp/school/web/menu.html>)を使い、メールを送る際の約束事や、エチケットを指導した。また、2学期には、IDやパスワードといったセキュリティ

関係の用語についても指導し、IDやパスワードの重要性を理解させた。今回使用した児童用メールは、携帯電話のメールと違って、ユーザー名とパスワードを入力して接続する必要がある。だから、パスワードやIDがより重要になってくる。また、自分のパスワードだけでなく、他者のものも尊重しなければならないことを十分に指導する必要があると考え、本授業前に何度か指導した。さらに、「メールを送る」ことは、「手紙を書く」ことと同じであり、相手がいることを意識して文章を書かなければならないということを十分に指導する必要があると考えた。



授業終了後、児童にメールを使った感想をたずねたところ、ほとんどの児童が楽しかったと答えた。初めてメールを体験した児童は少なく、ほとんどの児童が携帯電話でメールを送ったことがある、と答えている。メールを送る楽しさ、もらったときのうれしさを知る児童が多いことは、現在の情報環境の発達を実感せざるを得ない。携帯電話、パソコン、どちらのメールも相手のことを意識して文章を書くことに変わりはない。しかし、気軽に使用できて、絵文字なども使って話し言葉で書くことが多い携帯電話のメールの文章とは違い、正しい言葉遣いで書かないと誤解が生じやすいパソコンのメールでの文章の難しさを実感した。間違いを見つけさせる場面でも、話し言葉に着目した児童はいなかった。これは、児童にとってメールが手紙よりも電話に近い媒体としてとらえられているためではないかと思われる。しかし、今回のように、



卒業の寄せ書きのような改まった文章をメールで書くときには、やはり正しい言葉遣いをするのが大事である。目標リストにあるように、相手のことを考え、相手にわかりやすい文章を書くということが、文字のみの交流が多いネットワーク上でのトラブルを減らすことにもなり、指導する際に、相手のことをもっと意識させなければならぬと感じた。

また、多くの児童が経験している携帯電話では、IDやパスワードで個人情報を保護しているという感覚がほとんどない。そのため、子どもたちは、ログインする際のパスワードをあまり重視せず、ユーザー名やパスワードを記録した用紙を誰もが見るのできる場所においたりするのではないかと思われた。パスワードが漏洩すればどのようなことが起きるのかを具体的な例を示し、個人情報を守る上でのパスワードの重要性をさらに理解させるように指導していかなくてはならないと感じた。

## 5 おわりに

「教師の情報教育目標リスト」は、平成13年度の部会で取り上げ、それを引き継ぐ形で2年間研究を続けてきた。今年度は、この目標リストが、情報教育を進める上で役立つものであるのかを授業を通して検証していった。

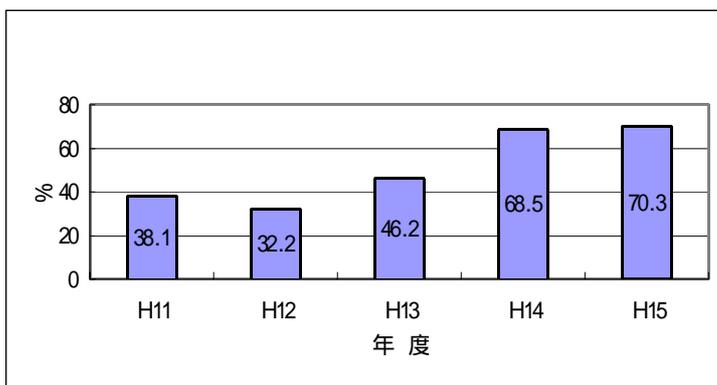
次表は、今回の実践事例で取り上げた目標の一覧である。実践1は子どもたちが集めた写真情報を加工する活動、実践2は情報モラルの指導、実践3はプレゼンテーション、実

実践4はメールの指導，と活動によって教師に必要な目標スキルが一覧できる。これらのスキルは，担任している学年に関わりなく教師に必要なものであり，「2-1 教師自身の活用としての目標」の項目などは，教師のスキルレベルに応じてチェック項目数は増減するであろう。特に，コンピュータ操作に関わる項目は，文部科学省の調査で「コンピュータを使って授業できる教員」の割合が年々増えてきており（図1参照），今回の事例でもほとんどチェックが入っていない。

この目標リストは，授業を計画する際に参照することで，指導すべき内容が明確になる。また，授業を評価するときにも，このリストを利用して客観的に振り返ることができると思われる。

しかし，子どもたちを取り巻くネット環境や社会情勢は，日々変化している。その変化に応じて，目標リストも更新される必要がある。例えば，6年生の実践事例にあるように，小学校段階で携帯電話を使った経験を持つ子が多くなってきている。また，携帯電話を使った授業の実践研究も始まっていると聞く。小学校でも，携帯電話の扱い方や注意点などを指導する必要が出てくるであろう。

	=実践1	=実践2	=実践3	=実践4
1-1-1		2-1-1		3-2-1
1-1-2		2-1-2		3-2-2
1-1-3		2-1-3		3-2-3
1-1-4		2-1-4		3-2-4
1-2-1		2-1-5		3-2-5
1-2-2		2-1-6		3-2-6
1-3-1		2-1-7		3-2-7
1-3-2		2-1-8		3-2-8
1-3-3		2-1-9		3-3-1
1-3-4		2-1-10		3-3-2
1-3-5		2-1-11		3-3-3
1-4-1		2-1-12		3-3-4
1-4-2		2-2-1		3-3-5
1-4-3		2-2-2		3-3-6
1-4-4		2-2-3		3-3-7
1-5-1		2-2-4		3-3-8
1-5-2		2-2-5		3-3-9
1-6-1		2-2-6		3-3-10
1-6-2		2-2-7		3-4-1
1-6-3		2-2-5		3-4-2
1-7-1		2-2-6		3-4-3
1-7-2		2-2-7		3-4-4
1-8-1		3-1-1		3-4-5
1-9-1		3-1-2		3-4-6
1-9-2		3-1-3		3-4-7
1-9-3		3-1-4		



【図1】PCを使って授業できる小学校教員の割合 (尼崎市)

今後，内容の見直しを繰り返し，より使いやすい目標リストが完成できればと思う。

## 資料 教師の情報活用スキルの目標リスト

\*\*\*\*\*

### (1) 情報モラル

#### 1-1 個人情報の大切さについて理解させる。

- 1-1-1 個人情報の保護についてその重要性に気づかせる。
- 1-1-2 個人情報を守るための方法を理解させる。
  - ・インターネット等で知り合った人に自分の氏名、住所、年齢、電話番号等の個人情報をむやみに教えないことを理解させる。
  - ・登録名、パスワードの管理の大切さについて理解させる。
- 1-1-3 個人情報が悪用される可能性があることを理解させる。
- 1-1-4 個人情報の保護に配慮して情報発信させる。

#### 1-2 他人の情報も大切にすることの必要性を理解させる。

- 1-2-1 自分の情報だけでなく他者の個人情報も尊重し保護する態度を育てる。
- 1-2-2 友達のIDやパスワードを無断で使ってはいけないことを理解させる。

#### 1-3 相手の状況を踏まえて、情報を発信させる。

- 1-3-1 メールでは相手に対する思いやりの気持ちをもって書くことを理解させる。
- 1-3-2 ホームページでは多くの人が見ることを意識させながら情報を発信させる。
- 1-3-3 相手を考えた言葉遣いで情報交換させる。
  - ・ネットワーク上では、文字による交流がほとんどであり、文字による交流では誤解がおきやすいことを理解させる。
- 1-3-4 相手の気持ちを考えて自分の意見を表現させる。
- 1-3-5 自分の意見が相手に与える影響について考えながら表現させる。

#### 1-4 人権に配慮して情報発信させる。

- 1-4-1 人権に配慮して書いて良いことと悪いことを理解させる。
- 1-4-2 配慮すべき人権についての内容を理解できる。
- 1-4-3 自他の人権について尊重させる態度を育てる。
- 1-4-4 世界的な人権尊重についての流れを理解する。

#### 1-5 情報提供者にお礼の気持ちを持たせる。

- 1-5-1 情報を集めるときの依頼の方法やマナーを身につけさせる。
- 1-5-2 情報を集めるときにお世話になった方に対する感謝の気持ちを持たせる。

#### 1-6 ネットワークを利用する場合のルールやマナーを身につけさせる。

- 1-6-1 他の人のページに勝手に書き込んではいけないことを理解させる。
- 1-6-2 知りたいことや質問がある場合は、まずニックネーム等で名乗ってから、簡潔

に質問することを理解させる。

1-6-3 容量の大きなデータを送ると、受け手に迷惑がかかることを理解させる。

### 1-7 自分の発信した情報に責任を持たせる。

1-7-1 ホームページなどは多くの人が見るので、内容に責任を持たなくてはならないことを理解させる。

1-7-2 誹謗中傷を書くことによって、相手にどのような影響を与えるかについて考えさせることができる。

### 1-8 知的所有権を尊重する態度を育てる。

1-8-1 知的所有権について基本的な知識を理解させる。

- ・インターネット上の文章や画像などのデータには、すべて著作権があり、無断で使ってはいけないことを理解させる。

- ・必要に応じ、著作権者の承認を得て、適切にデータを利用させることができる。

### 1-9 情報の中には不適切なものがあることを知り、適切な行動ができるようにさせる。

1-9-1 チェーンメールや信用できない噂話も、情報に含まれている場合があることを理解させる。

- ・不愉快なメールを受け取ったときには削除させる。

- ・不適切な情報があれば、すぐに大人に知らせることの大切さを理解させる。

1-9-2 知らない人からメールや添付ファイルが送られてきた場合は、開かないで大人に相談させる。

1-9-3 インターネットを使った商取引の実態を知り、悪徳業者も存在することを理解させる。

- ・体験型ホームページを使って、インターネット上の商取引を疑似体験させて、その危険性を学ばせる。

## (2) 情報収集について

### 2-1 教師自身の活用としての目標（教師自身ができる）

2-1-1 インターネット上での情報の検索方法がわかる。

- ・キーワード入力を用いて、情報の検索ができる。

- ・カテゴリーから絞り込む方法で、情報の検索ができる。

- ・ホームページアドレス（URL）を入力して情報を入手できる。

2-1-2 適切なサイトやリンク集、検索エンジンなどを選択し、効率的・効果的に調べることができる。

2-1-3 教師が事前に学習内容に適したホームページをいくつかに絞り込んで、それらのホームページを授業で子どもたちに紹介し、効率よく活用できる。

2-1-4 インターネットで複数の情報を収集することで、情報の正確性を高めること

ができる。

- 2-1-5 ホームページやリンク集を次々にたどりながら，発展的・連続的に調べることができる。
- 2-1-6 メールや掲示板を使って交流や情報収集ができる。
- 2-1-7 インターネット上での情報と他のメディアとを組み合わせることにより，情報の精度を高めることができる。
- 2-1-8 インターネットにおいて，文字だけでなく画像も取り込んだ収集ができる。
  - ・インターネット上から画像や文章などをコピー＆ペーストすることができる。
- 2-1-9 情報収集に必要な情報機器を使いこなすことができる。
  - ・デジタルカメラやスキャナ，デジタルビデオなどを使って画像を撮ることができる。
  - ・必要なアプリケーションソフトを使うことができる。
- 2-1-10 学習の単元構想に基づいて情報収集活動を行うことができる。
- 2-1-11 情報をサーバーなどに保存し，情報の共有ができる。
  - ・ファイルの保存やファイルの形式を変換することができる。
  - ・撮った画像データをトリミングなどの処理することができる。
- 2-1-12 入手した情報の信憑性について指導できる。

## 2-2 子どもへの指導としての目標

- 2-2-1 教師自身が収集方法を実際に演示したうえで，子どもに操作させることができる。
- 2-2-2 情報収集のねらいや子どもにつけさせたい力を明確にして，学習指導ができる。
- 2-2-3 情報収集の内容や分担を子どもに指示できる。
- 2-2-4 情報収集についての自己目標や自己評価，ふりかえりをさせることができる。また，それらを次時へのつながりとして生かすことができる。
- 2-2-5 子どもが情報収集に行き詰まった時に適切な支援や助言ができる。
- 2-2-6 調べた情報を相互交換して他者にも提供するなど，有機的に収集活用をさせることができる。
- 2-2-7 インターネット上の文章をそのままコピーして使うのではなく，参考にして自分の言葉に変えて使うように指導できる。

## (3) 表現について

### 3-1 適切な情報手段の利用

- 3-1-1 様々な表現方法の特徴を説明し，指導することができる。
- 3-1-2 必要な情報機器を使うことができる。
  - ・コンピュータと提示装置（プロジェクタ）を接続することができる。
- 3-1-3 子どもの表現内容に応じた手段を選択させることができる。
- 3-1-4 集めた情報を表現していく見通しを持ったり，計画を立てることができる。

### 3-2 整理・分析・判断

- 3-2-1 収集した情報の中から，必要なものを選ばせることができる。
- 3-2-2 効果的な資料を選択させることができる。
- 3-2-3 集めた情報を活用しやすいように整理させることができる。
- 3-2-4 集めた情報の共通点や相違点に気づかせることができる。
- 3-2-5 課題と関連付けて，収集した情報をまとめさせることができる。
- 3-2-6 要点を簡潔にまとめるように指導できる。
- 3-2-7 図や資料，見出しなどを効果的に利用するように指導できる。
- 3-2-8 相手にわかりやすく，見やすい構成やレイアウトを考えさせることができる。

### 3-3 発信・伝達

- 3-3-1 効果的な発信・伝達の方法が指導できる。
- 3-3-2 伝えたいことを明確にして，相手にわかりやすく伝えられるよう指導できる。
- 3-3-3 事実に基づいた情報を発信するように指導できる。
- 3-3-4 順序を考えて，相手にわかりやすく整理して発信させることができる。
- 3-3-5 立ち位置や声の大きさなどを場所や状況に応じて指導できる。
- 3-3-6 入手した情報の事実・伝聞・情報提供者の考え・自分の考えを明確に区別して発信するよう指導できる。
- 3-3-7 情報の入手先を必ず明示するよう指導できる。
- 3-3-8 集めた情報を伝達するだけでなく，集めた情報から考えたこと，自分の思いを伝えるように指導できる。
- 3-3-9 子どもたちの参考になるプレゼンテーションを行うことができる。
- 3-3-10 簡単なホームページが作成できる。

### 3-4 評価

- 3-4-1 評価の観点を示し，適切な自己評価ができるように指導できる。
- 3-4-2 正しく伝えられたかを振り返り，修正できるよう指導できる。
- 3-4-3 自分の考えと違う意見があることに気づかせることができる。
- 3-4-4 他の人の発信した情報のよいところに気づかせることができる。
- 3-4-5 他の人の発信した情報や自分の発信した情報を振り返り，よりよい表現について考えるように指導することができる。
- 3-4-6 個々の児童の活動について，適切な評価ができる。
- 3-4-7 表現に関する授業について適切な自己評価ができる。

## 学校情報処理システムの考察

### － 中学校での学習評価を取り巻く環境に対する質的調査 －

指導主事 伊藤 吾郎  
研究員 足立 靖 (育英中)  
" 長谷川 久志 (大成中)

#### 【内容の要約】

「評価をComputerで出せるようにしようと思う・・・」と問いかけたとき、ほとんどの教師が尻込みをする。“評価”について「よくわからない」と回答し、「Computerを使いこなせない」という。

ところが実際に、話し込んでみると“評価”に対する豊かな識見に感心する。同時に、情報技術に対する大きな誤解を持っていることに気づかされる。そして、全ての教師が、大きな向上心を持っていることに、最も驚かされる。

これらを現象の要因が、教師の多忙性にあるという認識が得られた。そして、多忙性を解決するためにも、『Empowermentの形成』が望ましいとの知見を得た。

このEmpowermentとは何であるのか、“評価”にも活かされるべき、このKey\_wordsについて、学校現場に入り込み学校現場の日常を観察することで、その説明を試みる。

そして、“評価”についての理解の現状や“評価改善のための提案”を、学校現場の参与観察から得た知見として包括的に叙述していく。

キーワード： 力量形成・教師の多忙性・啓発的評価・Empowerment・Statement

1	はじめに	111
2	研究の経緯	111
3	研究について	113
4	研究(質的調査)報告	114
5	まとめ	119
6	おわりに	121
	【参考文献及び脚注】	122

## 1 はじめに

これからの教育現場は、学習指導を進めるにあたり、まず「評価観を転換すること」からはじめる必要がある。値踏みとしての評価(Evaluation)から、支援としての評価(Assessment)や被評価者も評価行為に参加する評価(Stakeholder)への転換である。また、評価の対象となる学習活動がどのようなものであるか、その学習の成果がどう評価されるのかを、学習者に事前に示した上(accountability)で、指導者の評価する能力に対する信頼性が求められる。

また、学びを評価するということは、一朝一夕にできることではない。学習した到達点を評価するのか、学習課程の妥当性を評価するのか、学習に取り組んだ過程での姿勢や意欲を評価するのか、などの多様な評価の観点が存在している。

これらの言説は、平成16年度学習指導要領改訂に合わせて、学校現場で既に検討され共通の認識となっていると仮定される。しかし、現実はどうであるのか。これまでの「評価・評定」と、これからの「評価・評定」の差異について、理解と認識の実際を探りたい。

「評価を Computer で出せるようにしようと思う・・・」を枕に、学校現場に入り込み学校現場の日常を観察することとした。

こういった問いかけにどのような答えが返ってくるか、参与観察して得た知見を包括的に叙述していく。

## 2 研究の経緯

本研究部会の前身は、本市「学校情報通信 NetworkSystem」の中で機能する「中学校学習用 ComputerSystem」の活用を、「中学校の情報教育進展についての立場」から捉えようとしたものであった。「同一校の“学習用 ComputerSystem”利用状況を3年間観察するという質的研究手法と着眼点」について「特有の価値」を見いだした。

Internetにつながった Computer を中学校が持つことが、どのような意味を重ね持つのか、その使い方・使われ方を丹念に観察し、記録を積み重ねることで、以下3点を分析した。

中学校では教育課程(活動)、特に教科学習において Computer の積極利用について懐疑的である。

Computer を利用するために必要な、教員・生徒自身の基本操作技術が乏しい。

学校を支援していく体制が整っていない。

次の段階では、課題解決を図るべく以下4点を現場からの要求意見として分析した。

LocalContents 全国的に求められている事柄ではなく、尼崎の中学校が独自に必要なとしている事柄を充足させることが優先である。

ActionResearch 教員自身の日々の実践に適切な課題を与え、また適正な評価を授ける活動が必要である。

INTERACTIVE 社会と学校、教師と生徒に双方向性を持つ意思の疎通（「疎通」とは、もともと、双方向であるが、ここでは、同時性や即時性を付加したものとしている）手段を持つことが必要である。

Just in Time 必要なときに必要なものを入手・提供できる仕組みを持つことが必須である。

そして、これらを成し得るものとして、以下を第一期の研究結果として提案した。

「学校情報通信 NetworkSystem」の中に、教師による生徒の学習評価活動を主体として、Computer を利用して校務全般を支援する「校務支援 TOOL(仮称)」を導入することができれば、大半の課題を解決することができる。

ここで、研究方針と手法【後述：3-3 研究手法 p114】を大きく転換させることとし、研究を 期と 期に区分することとした。

第 期では、この「校務支援 TOOL(仮称)」の開発を手段として、その過程での学校現場の日常を観察する、学校臨床的な質的調査を試みた。

昨年度(平成15年度)中間報告は、研究員在籍校に向けて Rapport の形成を図った結果について報告を行った。

報告では、

(1) 「評価」についてどう思うか、との一般的な問いかけに関して

「評価」といえば、「児童生徒の学習結果としての評価」に偏り、「学校の教育活動結果の評価」がおざなりになっている。生徒への評価改善が必要とされるのには、現行の評価に問題なり不足があると言うことである。同時に学校や教師に対する“評価”も的確で正当である必要がある。「教育活動」が適正な評価を受けていないとすれば、生徒への評価が如何に研究され適正であっても、信頼性は乏しいといわざるを得ない。

(2) 「評価の研究をすべき」という意見への不信に答えて

(教育現場に求められる研究の像とは)

学校現場において、「様々な研究活動」が無意識に阻害されるのは、「臨床」の概念がないからである。実は昨今、いわゆる研究の成果に対して、「その知見が学校での実践に反映するのか」、「現場への feed back が可能なのか」を、課題とする研究も見えてきた。この研究が、「臨床社会学」「臨床教育学」「臨床人間学」etc と呼ばれるものである。研究活動には、これら「臨床」の概念が必要である。

このなかで、KeyWord となったのが「臨床の知」である。哲学者 中村雄二郎氏により、『臨床の知とは何か』(岩波新書 1992)で、近代科学は 普遍性(一般的であるか)、「論理性(納得のいく説明ができるか、法則が存在するか)と 客観性(当事者以外からの観察)という、他人を説得するのにきわめて好都合な三つの性質を手に入れることにより人類に大きく貢献してきた。その反面、人々の心を捉えきれなくなってきており、現実とのずれが生じてきている。そこでそれに代わるべきものとして「臨床の知」が提唱されると主張している。教育現場に求められる研究は、この「臨床の知」を叙述できなければならない。

また、「臨床教育学」を、「教育学と臨床心理学との相補的連携による新たな理論と実践の構築を目指す組織」と京都大学では定義している。諸大学や多くの機関で制度化されてきているが、何れの事例にも共通するのは、関連する諸分科の連携を目指す点である。京都大学教授の田中毎実氏によれば、「実践者は目前の問題に気をとられ狭いたこつぽに陥りがちであり、理論家は学界用語という隠語の世界に自足して閉じこもりがちである。臨床教育学は、両者が実質的に連携できる理論的な場所を提供する。」という。このような場所を、まさに現場は欲しているといえる。

(3) 目標に準拠した評価と関心・意欲・態度についての現場認識について

目標に準拠した評価では，その名称の通り，学習目標の基準が明確であることが必要である。観点別学習状況でも，知識・理解や技能については比較的可能であっても，「関心・意欲・態度」などは基準を定めるのが困難な場合が多い。前記のように不満の対象となっている諸研究も，その基準を教師がどこに求めるかに対する記述は曖昧である，と考えられている。

「見える学力」を支える基盤は，生徒自身の主体的な関心・意欲・態度・思考・判断といった「見えない学力」(岸本)である。「見えない」と評される様に，実態を観測(測定)しにくい部分である。したがって，生徒・保護者・教師，その全てにおいて，共通理解・共通認識が成されいると断言することは困難である。

(4) 見えない学力の定量化は図れるか(あなたはしているか。できているか。)

見える学力にせよ見えない学力にせよ，これらは，教育目標(生きる力を育む)の方向へ向かって育ってくれることの進捗を願って，評価は成されなければいけない。およそ，評価に関する概念の全ては，「発達のための学校」として評価が機能することを求めている。しかしながら，現実の中学校は「選抜のための学校」であり，入試に提出する調査書(内申書ではない)には従来通りの十段階の相対評価を高等学校側から要求されるという事実は厳然と存在するのである。

以上を報告とし，課題として，単なる印象論から脱却し有益な知見を得ることができるよう勉めなければならないこと。調査の構造形態(format)を準備し，これまでに行われてきた研究活動を活かした ActionResearch にしていかなければならないことなどをあげた。

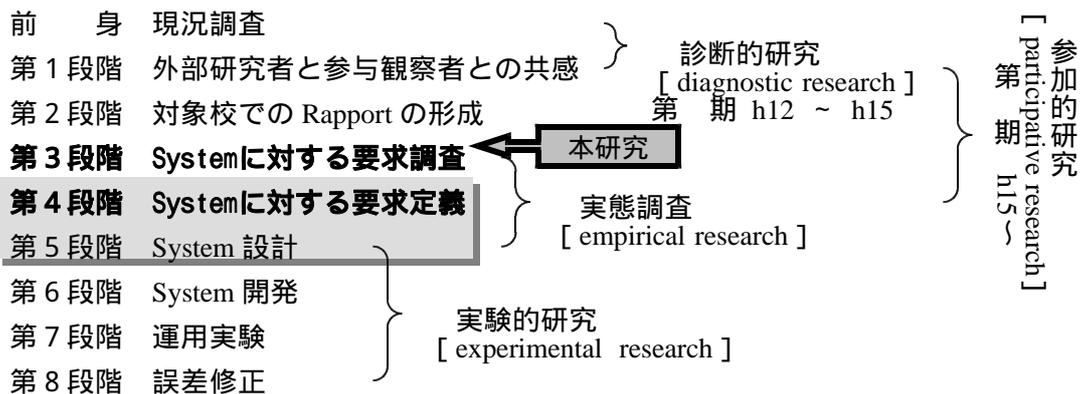
### 3 研究について

(1) 研究テーマ

「学校情報処理システムの考察」

- 中学校での学習評価を取り巻く環境に対する質的調査 -

(2) 研究計画



本年度は，第3・4段階での，参加的研究から実態調査へ移行する段階での調査報告とする。

~ の分類は，Chein,I.による ActionResearch の4分類。

(3) 研究手法

本研究は，尼崎市立教育総合センターにおける他の研究と比較して，様相を異にして

いる。一般的には、「存在の立証」を目的とするなど、テーマに沿った活動により得られる事柄の分析などが「研究」となっているのに対し、「何かが出てくるまで活動を続け、その過程を分析報告する研究」である。

小説で登場人物について描く方法には2種類ある。1つは性格、外見、職業、癖など、その人物の持っている特徴や特性を直接的に叙述する方法である。もう1つは住んでいる部屋、友人、家族、持ち物など、その人物を取り巻く様々な事柄をきめ細かに叙述していくことで、その人物を浮かび上がらせようとする方法である。後者の視点から、対象とする人(たち)を取り巻く状況をできる限り子細に叙述し、それまで個人が「持っている」特性や能力のあらわれとされてきた様々な現象が、実はその人を取り巻く状況の複雑な網の目の中で達成されている社会的な現象であることを明らかにしようとしてきたのが「状況的認知 approach」である。このように対象をめぐる社会的関係構造を長期にわたる観察(参与観察)をもとに詳細に叙述していく手法を文化人類学の領域では「Ethnography」と呼び、長年、中心的な研究手法として位置づけられてきた。Ethnography の手法を用いた研究の最大の特徴は「具体性」への志向である。本部会以外の一般的な研究は、例えば「中学校の情報教育進展に対する学校現場の理解はどのように構築されるのか」といった一般化された問題設定に基づいて実施される。これに対して Ethnography による研究では、ある中学校のある教室で日々を送っている生徒や教師の関係づくりや活動の具体を細やかに描きだすことを目指す。知見の「一般性」ではなく、対象の複雑さを損なうことなく一貫した視点で(具体的に)記述することが求められるのである、したがって対象をできる限り具体的に記述するといっても、観察したことを自由気ままに文章化すればよいわけではなく、そこには記述に一貫性を与える「理論的視座」が必要となる。

そのため、尼崎の中学校の生活の中で、現場の視線で語られる教師の言葉を資料とし、できるだけ中学校の日常語から描きだすことを規定し、発話の接頭は「校務支援 TOOL(仮称)】【以後“学校情報処理システム”と呼ぶ】を設計・開発するという名目において、問答・話題・議論そのものを描きだすこととした。

## 4 研究(質的調査)報告

### (1) 学校での“情報”類語の地位

教育と Computer などの情報技術を共に考えるとき、Multimedia や Computerなどを駆使する学校や教室そして授業を想像する人が多い。そして、まず機械に教育活動を代行させるという誤ったとらえ方を代表に、「教える活動」の効率化に視点をあてたものであるという、これも誤った批判を聞くことが多い。また、Computer 利用教育を推進している人たちの中にも、技術や機械を元に何らかの効率化を追求する、そんな方向へ走りはじめているものも少なくない。

如何に Computer や情報技術が発展しても、「教育」は教師が行わなければならない。そんな意見が、中学校の現場では大半を占めている。

情報教育や Computer なるものを筆頭に、昨今の、評価をはじめとする学習指導要領の改革等から我々が目にする耳にするあらゆる KeyWord からの言説は、児童生徒だけを主体として、教師の存在や教師と子どものかかわりについての記述は見あたらない。

## (2) 教育環境に情報技術を活かせるか

児童生徒にとって最良の教育または教育環境は、情報技術(含む情報機器)や Curriculum , はたまた、その価値を判じ定める(評価)適正な根拠が整備されていることではない。

それは、力量・技量を身につけた教師である。

教師は毎日生徒たちに直接対応して教えていくことを通じて、自分自身の力量・技量を、意識してあるいは無意識のうちに拡大し、向上させているのである。この場を見失った状態では、何もかもうまくはいかない。

では、教師はまず何を身につければよいのであろうか。

本部会は、研究の記述に一貫性を与える「理論的視座」として、「教育情報」「学校情報」の処理を先端情報技術でまかなうという命題を持つこととしている。

本部会前身のテーマを引きずる形ではあるが、教師が Computer や Multimedia を駆使した情報技術の利用を積み重ねることによって、教師自身の指導の力量が向上していくことを期待している。それは、Computer の技術に関する詳しい知識や操作法の KNOW-HOW ではない。最も大切なのは、学習指導にかかわる「教育情報」「学校情報」のあり方についての理解とそれを取り扱う力量であり、教育情報を処理するものとしてみた Computer の機能に関する理解である。

すなわち、学習行動の観察力、学習 DATA の分析力、分析資料を参考にして学習 PERFORMANCE を評価する力、教材の分析・評価・選択力、指導教材の編成力、授業の展開における PRESENTATION 技術、それに生徒の反応に対して与える Feedback 情報の与え方など、教育情報の分析・評価・生産・編集・提示にか代わる具体的な方法を使いこなせる力量であり、何を Computer で処理すればよいか、という判断力である。

教育とは人間の成長の本質にかかわるもので、新しい手段や技術が開発されたからといって直ちに教育そのものが変わるものではない。しかし、新しい情報技術や Media 技術に基づいた「教育情報」を取り扱う技術は、必須の ITEM となろう。

## (3) 力量形成のあり方は(教員はどんな力をまず身につければよいか)

「資質向上」は、教員養成の段階を含むものであり、「現職教員はまず何を身につければよいのであろうか」という課題には、「力量形成」という言葉が使用されたい。そして、必要とされるのが、Empowerment である。Empowerment とは、「組織の成員が彼ら自身の意思で、組織創造の Process の中にいると感じること」と定義される(Block,P.)。一般に、Empowerment を持つ成員(教師)は、影響力の源泉はまず第1に自分自身にあると信じ、自分自身の考えや感情を価値のあるものとして受け入れる、正しいと思っていることを行動する勇気を持っている、他者へ自分の考えや感情を進んで表明する、RISK を賭けることを厭わない、他者への援助に関心を持つ、他者から学ぶことを厭わない、他者と開かれた人間関係を持つ、という特徴を持つ。教師がこのような Empowerment を持つことは、学校改善の Process に参加・協働することである。(淵上)

非常に高い確率で、Empowerment の形成に賛同が得られるものの、教師の多忙性と、変革に対する心理的抵抗感が障害となっている。前者は物理的問題であり、学校運営と密接に関係する。後者は教師自身の要因であるが、教師同士が互いに尊敬・信頼できる関係を構築することによって解決されると考えられる。すなわち、人間関係や校務分掌という学校での役割を問い直すことによって教師の Empowerment の形成が促進されると信じら

れている。

(4) Empowerment, 形成のために(どうすればよいか)

教師の Empowerment の影響としては, 教師の要望等を支える物的資源の獲得, 様々な専門的能力を持つ教師を適材適所に grouping する, 教師の活動に対する評価の Monitoring, 学校内外との Networking, 学校における活動に関する情報収集と分配, Informal な会合の開催と根回し, 学校組織の Vision の提示, の7つに分類されている。(淵上「学校が変わる心理学」)

本研究の経緯で報告されているように, 図らずもこれらは既に, 本市中学校現場からの, NEEDS としてあがっている事柄である。Empowerment の影響化にある, ある種の理想的な状態を欲しているのが, 教師自身の言葉による質的調査の結果であるなら, 阻害要因の内, 変革に対する心理的抵抗感, 実は存在しないものであり, 物理的要因に起因する心理的抵抗感の存在を仮設できる。「いそがしいのに, やってられへんわ!!」という台詞に論理的な解釈が可能になる。すなわち, 教師の多忙性に対する対処を実行することが, Empowerment 形成の核になると考えられる。

(5) 多忙性対処法として, Computerは機能するか(本部会提案への批判)

大阪教育文化センター教師の多忙性調査研究会は BurnOut 症候群(以下 BurnOut)の視点から教師の多忙性を調査している。結果としてはよい状態にあるものが4割未満で過半数の教師に BurnOut の危険信号がついている状況であった(大阪教育文化センター教師の多忙性調査研究会 1996 p19)。BurnOut とは, 充実感に満ちて仕事に没頭していた人が, 燃え尽きたように突然に陥る無気力状態のことで, 抑うつ・全身倦怠・頭痛・不眠などを伴う。発症前 BurnOut での危険信号状態が, 無意識に Empowerment を阻害している可能性は高い。

この多忙に対処する approach として, “学校情報処理システム”による教師への支援が重要であると提案してきた。そのための「本研究」や, 前述の「教育情報を処理するものとしてみた Computer の機能に関する理解」の取得などが, 現段階で心理的抵抗に遭っているわけである。

そこで, 学校現場への説明で強調している事柄が, 多忙性対処法である, 物理的課題を解決する(事務仕事の軽減), 人間関係や校務分掌という学校での役割を再構築する(学年や学校で囲われた枠を超えて, 教科や分掌, 課外クラブなどの新しい枠での Communication を可能とする), である。

(6) 工学的approachへの理解(結局, 教育工学か?との欺瞞視)

教育工学は, SYSTEM 研究と捉えることができる, 教育という SYSTEM の成果を吟味し, 実践する分野である。(Mitchell P.D. Encyclopaedia of Educational Media Communication and Technology, 1978)これは教育工学の数多くある定義の1つであるが, 教育工学の研究領域を体系的に捉えた Lumsdaine, A.A は, 教育工学は2つの主要な流れが統合されたとする。1つは, 工業技術の発達によってもたらされた教具や機器などの Hardware を利用して教育効果を高めることである。例えば, 多様な Media の利用や図書館。視聴覚 LIBRARY の運営・利用である。これらは当尼崎市立教育総合センターとして, 実践されてきた。もう1つの流れは, 学習理論あるいは行動科学の成果を意識的に適用して, 教授-学習過程を科学的に制御しようとするものである。これには教育目標研究(教育目標の分類学や課

題分析等)と学習理論に基づく研究(Programme 学習など)とがある。それ故、教育工学は教育実践を効果的にするために Hardware(いわゆる教育機器)と Software(学習理論など、他の学問の見解)を応用することと考えられてきた。当センターに置いて、教育工学の担当名称が情報教育となり、後者の実践を進めている。

しかしながら、最初に示した定義にみられるように、問題解決志向、SYSTEM 論志向という考え方を特徴とする。教育過程を Technology として捉えることが、教育工学であるという視座に立ち返った場合、研究は SystemsApproach をとり、次の5つが研究方法論上、必須条件となる。達成すべき目標、または課題を明確に規定すること、目標達成のための多様な SYSTEM、または単一 SYSTEM 内で複数の代案を吟味すること。目標達成にかかわる諸要因間の相互関係を論理的・実証的に明らかにすること。各代案の当否を判断するための評価基準を明確に設定すること。各代案に関して不確定要素、危険要素、時間的要素などの扱いを明らかにすること、が要求される。したがって、領域は、おおよそ、教授 学習過程の設計、評価に関する研究、コンピュータ利用による教育研究 教育情報処理の体系化と学習情報処理システム、教師教育・特殊教育への適用、に整理できる。(浅田)

このように整理されて初めて、教育工学や Computer などの機械・技術論に偏っていると言う錯覚や、情報教育と“学校情報処理システム”の設計と「評価・評定」の結びつきの奇異さを解説してみせることができた。

ここまでで、「評価」という言葉の持ち得る多義性の課題が窮めて重要であることが、あらためて認識された。具体的には、「評価」が話題になり語られる現場に於いて、それぞれの話者における「評価の定義」が違うということである。

以下、「評価」関連。

#### (7) 評価の定義を目的から捉える(現場教員それぞれの“評価”認識)

現場教員にある共通の評価への認識は、教育とは学習・発達(学ぶ・育つ)を促す営みであり、教育的価値の実現を目指す目的志向の活動である。評価は、教育の目的を実現するために行われる。すなわち、評価の本質的な目的はよりよい教育・よりよい学習・発達を実現することにあると本部会では考えている、評価は、教育や学習、発達にかかわる具体的な事柄について価値判断すること。そして価値判断した結果に基づいて問題を具体的に解決することを通して、よりよい教育、よりよい学習・発達を実現しようとする営みである、といえる。

前節で述べた、多義性に関して、補足するなら、総論としての理解は確かに前記で共通するものの中心課題【核の認識】がまちまちなのである。まず、「教育活動」「学習活動」「発達段階」の何れであるのか、次に、結果に基づいて問題解決志向を含むか含まざるか、である。

調査報告に叙述するには、観察と根拠となる論説が不足しており、印象論の域を出ないが、「教育活動」への適切な評価を並行して実行しない限り、「学習活動」への適切な評価はあり得ないと考えられる。また、結果に基づいての問題解決云々とは、全ての段階で行われる評価が、治療をも示唆する診断的評価として機能するか否かという問題であり、

OpenEnd 思考の評価の定義に対して、中学校では「選抜のための学校」としての CloseEnd 思考の評価が、一般的であり、評価のあり方の現場認識として正当性が高いのである。

したがって、「何のための評価か」ということを具体的に考えることがとても重要になってくる。何の疑いもなく、ただ漠然と評価の体系を構築し、学習 DATA を集めて、それらを処理しているだけでは、「評価のための評価」「評価のための教育・学習」という危険性がある。

学校教育における教育評価の目的は次の7つに区別される。教育行政の資料としての評価(どういう施策を行ったらよいかを決定するため)、学校の管理・運営の資料としての評価(学校の管理・運営をどうしたらよいかということを考えるため)、教師の学習指導の資料としての評価(教師が学級や個人の学習指導を、どのようにしたらよいかについて考えるため)、子どもに情報を与えるための評価(子ども自身が評価情報を活用できるようにするため)、親の参考にするための評価(親が子どもの学習・発達の実態を理解しその情報を活用するため)、子どもの処遇決定のための評価(資格認定や振り分けなど、子どもの比較的長期にわたる教育的処遇を決定するため)、Curriculum 改善のための評価(Curriculum を開発したり、その善し悪しを判断するため)の7つである。(東)

このような立場を認識し、常に評価の目的を意識することを通して、望ましい評価のあり方を具体的に構想する必要があるだろう。ただし、評価の構想が重要なのではなく、教育の問題を解決するための意思決定に役立てるという視点に立って評価を行うという、学校臨床的な立場、反省的实践家としての心構えの重要性を本部会としては報告しておく。

(8) 評価が機能するために(“評価”は本当に役立っているか、また、誰のために)

教育活動は、3つの相(Phase)の CYCLE の Model によって表すことができる。現状分析、実態把握のための分析・評価の Phase、分析・評価に基づいて授業内容を構成し、指導教材の編成と教材作成を行う授業設計・教材作成の Phase、そして 授業展開の Phase である。

ここでいう「評価」は、生徒の学習活動に対する評価ではなく、教育活動の評価である。これも印象論の域を出ないのだが、学習活動には、3つの相(Phase)の CYCLE の Model が提示されていないように考えられている。対比させるなら、自己(学習者・生徒)の学習活動分析と再構築、新生活(学習活動)の実施の Phase がみられない。

「指導と評価の一体化」と言う KeyWord は耳にすることが多い。評価によって、後の指導を改善し、さらに、新しい指導の成果を再度評価するという発展的循環過程は、学習者の活動までに展開されるていない。「指導と評価の一体化」には「活用重視」と「過程重視」という2つの考え方が含まれている。活用重視とは、評価対象を価値判断するだけにとどまらず、評価情報を問題の解決に向けて活用していくことが重要だという認識を指し、過程重視とは、教育や学習の結果や成果ではなく、むしろそれらの過程に焦点をあてるのが重要だという認識を指す。教師の意識が子どもを値踏みすることばかりに向けられ、教育実践をめぐる問題の解決に向かわなかったり、教師が学習過程に注目せず、学習成果ばかりを評価対象とするような評価のあり方は、教育評価の本来的な機能を失わせるとの考えが強調されているのだが、「活用」は学習者自身の今後の学習活動への活用ではなく、「過程」は結果を導いた過程であり、発達(発展)を意図した予定を含まない。

評価が教師の教育活動自己評価のみとなり、学習者の学習結果(成果)価値判断にだけな

るような、単に成績をつけるためだけにテストを実施して教育活動を終了してしまうような場合、教師も学習者も成長の契機も見失われてしまうであろう。学習者の側から考えると、評価の機能は、評価情報が自らの学習・発達に活かされること、すなわち「学習と評価の一体化」を通して、よりよい学習が成立したり、発達が促されたりする点に見いだされる。このような、学習者の自己改善を促す評価が重要課題である。

## 5 まとめ

研究(質的調査)報告をもとに、今後の“評価”に現場の声を反映させた提案を附記して、まとめとしたい。

### (1) 啓発的評価

Bloom,B.S は、評価の機能について、教育活動の過程に応じて診断的評価、形成的評価、総括的評価の3つに分類した。

診断的評価とは、ある教育活動の開始前に評価を実施し、学習の前提となる readiness(指導を受けるために必要な学習者側の準備状態)が事前に形成されているかどうかを把握・判断し、教育的な決定に活用するものである。

診断的評価が、教育活動の開始前に実施されるのに対し、形成的評価とは、教育 Programme の開始後、教育目標に応じた成果が得られているかについて、指導過程の途上で適宜把握、判断し、その結果をそれ以降の教育、学習活動の計画に活用していくような評価を指す。

総括的評価とは、一定の教育活動が終了した際に評価を実施し、教育実践や学習活動を全体として反省的に把握するためのものである。指導や学習を結果として評価するものであり、総括的な認識をする際に役立つ。

一般に評価というと、この総括的評価のイメージが強い、総括的評価では活動の結果に関する DATA を価値判断することに主眼が置かれるのに対し、形成的評価では、活動の過程に関する DATA を意思決定に活かしていくことが目指される。教師は総括的評価によって、カリキュラムや指導方法など自分の実践を反省し、今後のよりよい実践を構想する手がかりを得る。しかし、指導の最終段階での評価であり、「指導と評価の一体化」に直接的に寄与するものではないため、ややもすると「やりっぱなしの評価」になる可能性もある。同様に学習者にとっても、自らの学習成果などを総括的に理解することにはなっても、その認識が必ずしも次の学習に活かされるとは限らない。

それに対して、形成的評価では、評価情報を教育や学習活動の改善に活かすことが直接的に目指される。教師にとっては、指導の過程で評価を行い、その情報を指導の改善に活かしていくことになり、「指導と評価の一体化」を具体化する有力な方法になる。学習者にとっては、学習の途上で評価を行うことによって、自分の学習の様子を monitor でき、学習計画を修正したり改善したりすることに役立つ。

どの水準を教育活動の1つの単位とするかによって形成的評価の意味は変わってくる。ある単元を単位とすれば、単元の途中で適宜、形成的テストなどを行い。その結果に応じて補充指導を行ったり学習指導法を修正することになる。それに加えて、より micro(特定の授業など)、あるいは macro(年間指導計画など)な単位で形成的評価を構想する視点

も重要である。

ここに、みられる重要素は、視点である。そこで、方向性を持たせたい。形成的評価の視点を macro 構成しつつ、その線分上の、とある位置に於いて、総括的評価を行い、「+ (プラス) = 未来」へ向けた方向性で行われる評価を啓発的評価と呼び、「次の段階で、如何にあるべきか」を問いかけるものとして位置づけたい。したがって、「啓発」とは、enlightenment(啓蒙的な教え)ではなく、development(発達、発育、発展したもの。習慣・能力などを徐々に身につけること。)でありたい。

## (2) Statementの確立

啓発的評価を支える技法として、学習の Statement を、教師とともに学習者も適切に行う。Statement とは「声明、主題の提示」などの意で、学習活動の目的・意義・使命の自覚と説明を行うことをいう。現実的には、ほとんどの場合、指導要領や教科書(またはその解説書)、指導案などに抽象的に表記されていたり、授業の導入部で前説として、宣言されるだけであったものを、単元や学習材または、授業1時限ごとなど、単位に相応して、教師とともに学習者も適切に行うことを推奨する。

学習者による表明(Appeal や Speech)を Statement として確立することは、Epoch な試みであると考ええる。

内容としては、この学習の目的は何か、この学習はどういう意味や価値があるか、(学習者(私と仲間)にとって・教師にとって・クラスや学年にとって[全体の位置])、この学習は何をどのようにするものか、(追求する目的や課題は何か・どのように行うか[学習形態など]・創られる作品は何か・組織する学習活動はどのようなものか)、どのような成果や結果が得られるか、が考えられる。ここから、学習の Statement の意義は、学習に必要な GoalImage が持てることであるという。明確なイメージは夢を実現させる原動力になり得る。Statement(使命の表明)は GoalImage を強化し、具体化を推進する。さらに、「MissionStatement」を明確にすることにより、学習への意欲を高め、成果を予想する思考を促す。また、GoalImage により、主体的に「学び」を DESIGN し、学習 Style を決め、より効果的で適切な学習活動生み出すことができる。(主体的な学びへの変更)そして、Statement は教師の肯定的な評価によってより明確で具体的なものになる。教師の肯定的な前向きな評価は、学習の MissionStatement を明確にし、学習者の学習意欲を高め、取り組みの姿勢を強化して、学習の達成度を上げる。

## (3) 評価によるEmpowerment

啓発的評価に持たせたい形態として、評価による Empowerment を確立する。また、Empowerment としての評価を確立する。

肯定的で具体的な評価による啓発で自力促進を高めることを主眼に行う。学習者の MissionStatement や学習活動についての肯定的評価を、常に前提とすることが基本。ただし、褒めるだけでは Empowerment にならないので、不十分さに、指導・助言を行うことが重要。また、Statement 時に、聞き取りや質問により、具体化させる(いつ、どこで、何を、どうやるのか)ことが有効である。

本稿での Empowerment の取り扱いにより、誤解を生まぬよう、書き添えておく。

Empowerment の最も重要な意味は「権限の委譲」である。何をどのように行うかの裁量と選択を委ねることで初めて、自力促進が可能となる。教師にせよ、学習者にせよ、何

をどのように行うかを自己決定できなければ、与えられた範囲での獲得でしかなく、発展を閉ざしてしまうことになる。

当然、教師の役割や身につけるべき技能にも変革が必要となってくる。Empowerment 評価は、教師の役割として、「Facilitator(促進者)としての教師」を要求する。ソクラテス的方法 (Sokratische Methode) による、学習の促進を期待できる教育技法の確立など、研究課題も増えてくることになる。

#### (4) 尺度の表記

中学校現場では、学習者への指標として、評価・評定の通知票を用いた連絡に、「間隔尺度」以上の水準が求められているにもかかわらず、相対評価の幻影を引きずって「順序尺度」が用いられる状況になっている。いわゆる 1～5 の数字であったり、A B C のアルファベットである。この表記は、評価基準・規準により、「十分満足できる・満足できる・努力を要する」となっており、額面通り、目標に準拠した成果基盤型の評価と受け止められかねない。Assessment 評価(全学習過程を通じた評価)としての意義を見だし、学習課程(Process)の評価(自己・教師・仲間・保護者等からの全方位の評価)として、『学習に取り組んできた姿勢(態度)』から、『今後の学習活動を啓発する』表記として以下を提案する。この四段階での、論理的な分析に基づく啓発を目的とする。

++ 「特に推奨」

(他者の範となり得る。このまま持続してほしい。指導・助言の必要性がない。)

+ 「推奨」

(自他共に満足させ得る、Empowerment に期待する。請われれば助言がある。)

「条件付き推奨」

(改善の余地または箇所が明確である。助言を必要としている。)

- 「推奨しない」

(再考を要するものが多く、指導を必要としている。)

【ドイツ自動車連盟 (ADAC : Allgemeiner Deutscher Automobil Club) の Report に同様の表現を見ることができる。】

## 6 おわりに

膨大な、現場の視線で語られる教師の言葉をまとめ叙述してきた。その中にある想いまでを叙述することは不可能であると考えつつ、印象論の域を出ないと前置きをしながら、いくつか書き添えてある。

同じく、誤解や批判を恐れずに附記する。

選抜のための評定は存在していても、啓発のための評価への転換は図れるはずである。

入試のための評定 (grading) から学習促進のための評価へ Paradigm の転換を図る必要性は急務である。

評価は、事前の調査と事後の診断から、変容の度合いを客観的に分析し学習課程全体を評価し(「評価」が2度)、見直しと改善の背景を探り、Empowerment の確立を目指すものでなければならない。指導・助言ありきから脱却し、考えて成長する自己を支える、権限委譲の Empowerment の評価を推奨したい。

そして、最も重要なのは、これら全てが、教師 - 学習者にみる学習評価だけではなく、

教師や学校に付与される教育評価として、機能しなければならないことである。

最後に、限定された期間での Ethnography は、大きな欠陥がある。浮かび上がらせるべき像を持たぬまま、Reportage（新聞・放送などでの現地報告、または報告文。探訪。）となっているとの批判を免れない。この点を真摯に反省し、次の後 10 年はセンターで研究に活かしていければと考える。

【参考とした文献】

教えること のエスノグラフィー	古賀正義	金子書房
見える学力，見えない学力	岸本裕史	大月書店
「子供の評価」	石田恒好	教育開発研究所
教育評価論 学びの場で経験される評価	鹿毛雅治	ミネルヴァ書房
学ぶこと・教えること 学校教育の心理学	鹿毛雅治 ほか	金子書房
内発的動機づけと教育評価	鹿毛雅治	風間書房
新学力観のための評価と指導	藤岡完治・北俊夫編	ぎょうせい
教育評価を考える 抜本的改革への提言	長濤・浜田寿美男編	ミネルヴァ書房
認知心理学 5 学習と発達	波多野誼余夫	東京大学出版会
フィールドワーク	佐藤郁哉	新曜社
教室のチューリングテスト	有本典文	青土社
人間形成のエスノメソドロロジー	須藤健一	東洋館出版社
授業改革事典 第 1～3 巻	東洋・中島章夫他編	第一法規出版
子供の能力と教育評価	東 洋	東京大学出版会
教育学叢書 10.教育と学習	東 洋	第一法規出版
教育学叢書 11.教育指導	続 有恒	第一法規出版
教育評価	続 有恒	第一法規出版
教育課程の分析と診断	木原健太郎	明治図書
変動社会の教師教育	今津孝次郎	名古屋大学出版会
教育評価の未来を拓く	田中耕治	ミネルヴァ書房
授業を変える学校が変わる	佐藤学	小学館
授業研究入門	稲垣忠彦・佐藤学	岩波書店
専門家の知恵：反省的实践家は行為しながら考える	佐藤学・秋田喜代美訳	ゆるみ出版
成長する教師	浅田匡・秋田喜代美	金子書房
心理学研究法 13 実践研究	続 有恒ほか	東京大学出版会
学校が変わる心理学	淵上克義	ナカニシヤ出版
臨床教育学	小林剛	萌文社
臨床教育学	和田修二・皇紀夫	アカデミア出版会
臨床教育学序説	小林・皇・田中孝彦	柏書房
臨床的人間形成論へ	田中每実	勁草出版
日本の教師と教師文化	稲垣忠彦・久富善之	東京大学出版会
Handbook on Formative and Summative Evaluation of Student Learning	Bloom,B.S・Hastings,J.T・Madaus,G.F	
学習評価改善実践資料	学校経営実践研究会	三省堂

## 中間報告

教育総合センターでは、各研究部会で取り組む教育研究をより充実したものとするため、研究期間を2年とし、取り組むことにしています。

本年度は、『小学校総合的学習』、『算数・数学科教育』、『デジタルコンテンツ活用』については、中間報告としてまとめています。

これらの部会は、来年度に最終報告として研究の成果を発表する予定です。

## 「生きる力」を育てる総合的な学習の創造

- 子どもの変化をよみとる評価資料の作成と活用 -

指導主事 谷 口 陽 三

研究員 井 澤 由 賀 子 (西 小)

” 福 本 吉 雄 (立花南小)

” 中 島 賀 子 (尼崎北小)

” 柳 一 光 (園 田 小)

### 【内容の要約】

新学習指導要領の完全実施から3年が経過した。本年度は「『生きる力』を育てる総合的な学習の創造」をテーマに、「子どもの変化をよみとる評価資料の作成と活用」について研究した。「子どもの変化をよみとる」ことは日々の授業における指導と評価の一体化を図ることである。ワークシートなどの評価資料を検討することが、具体的な教師の指導改善と児童の学習改善につながるものであると考えた。そこで、授業実践を中心に評価資料の作成と活用の方法について研究に取り組んだ。

キーワード：満足度，協力度，コミュニケーション力，学習計画図，学習履歴図，スキル，ワークシート，評価資料

1	はじめに	123
2	実践事例	123
	(1) 園田小学校 5年	123
	(2) 尼崎北小学校 6年	125
	(3) 立花南小学校 6年	127
	(4) 西小学校 6年	129
3	おわりに	131

## 1 はじめに

総合的な学習は学校に子どもたちに新しい風を送った。「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し」など自分の外にある「答え」と基準だけでなく、自分の内にある「答え」と基準を見つけようとする学習が展開されてきた。総合的な学習を通して、今まであまり知らなかった身近な地域と子どもたちは肌でふれあってきた。そうした実生活と学習が結びついた総合的な学習ならではの手応えを今後表現することが求められる。そこで、本年度の研究テーマは「生きる力を育てる総合的な学習の創造」- 子どもの変化をよみとる評価資料の作成と活用 - とし、子どもの変化を具体的によみとる工夫を通して、子どもの学びを充実させたいと考えた。実践事例の要点は以下のとおりである。

【実践事例(1)】 障害のある人とともに生きる探究活動における、学習に対する「満足度」と「協力度」がわかる「振り返りカード」を工夫した。(園田小学校第5学年)

【実践事例(2)】 日本と外国のそれぞれのよさを意識する活動を通して、コミュニケーション力を育てるためのワークシートを工夫した。(尼崎北小学校第6学年)

【実践事例(3)】 3年から学んできた「総合」を振り返りそれぞれのテーマを探究する活動を通して、内容や課題に迫るために「学習計画図」と「学習履歴図」を工夫した。(立花南小学校第6学年)

【実践事例(4)】 商品の生産から販売までの活動を通して、生産・販売の楽しさや難しさを知り、協力・共同していく力を育てるために2回の生産・販売活動の中で子どもの思いをよみとる工夫をした。(西小学校第6学年)

## 2 実践事例

### (1) 「ふり返りカード」における満足度・協力度 (園田小学校 第5学年)

子どもの変化をよみとる評価資料として「いきいきタイムふり返りカード」(図1)

を作成した。『今日の満足度』と『今日の協力度』等について、自己評価として毎時間ごとに振り返りをさせた。子どもの変化をよみとることによって指導の手だてとして有効であると考えた。

#### 1. 単元名

「ハンディ - とともに  
生きよう - 」

#### 2. 単元について

子どもたちの今までの経験や今の実態から学年で話し合ったポイント

(図1)【いきいきタイムふり返りカード】

障害のある人への理解を深める。

障害のある人の気持ちを理解して、自分から積極的に働きかける力を身につける。

単元を通して、相手のことを理解しようとする思いやりの心、支え合いの心を育てる。

インタビューなどの人とのふれあいや体験活動を重視する。

### 3. 支援と評価の実際

「いきいきタイムふり返しカード」で、学習の『満足度』と『協力度』に焦点化し、5段階で評価できるようにした。その際、折れ線グラフにして単元全体を振り返ることができるようにした。また、感想や思ったことを『ひとことコーナー』に書いたり、次時への期待度を簡単な表情で表したりして指導に役立てようとした。表情については、一目で児童の様子がわかるので、泣き顔の児童には、声をかけて助言を与えることができた。

『満足度』『協力度』については、単元の中での学習過程をそれぞれ「課題設定」「学習計画」「情報収集」「情報発信」に分けて、その平均値を採ってみた（表1）。

課題設定の段階が満足度の一番高いところであった。これは、単元についてのポイント「人とのふれあいや体験活動を重視する」を意識して、ゲストティーチャー二人の話と車椅子体験を取り入れた教師のねらいと一致している。反対に学習計画の段階は、児童にとって難しかったことが想像できる。教師サイドも漠然と考えていた所があり、今回はこの段階での学習の流れを工夫する必要がある。

満足度（5点満点：小数第3位を四捨五入）

	課題設定	学習計画	情報収集	情報発信
男子平均	4.09	3.83	3.98	3.78
女子平均	4.27	3.85	4.10	4.35
全体平均	4.18	3.84	4.04	4.06

協力度（5点満点：小数第3位を四捨五入）

	課題設定	学習計画	情報収集	情報発信
男子平均	3.04	3.45	3.73	3.82
女子平均	3.08	3.21	3.83	4.12
全体平均	3.06	3.33	3.78	3.99

（表1）満足度・協力度

では、児童の『満足度』は何から生まれるのか、児童の一言コメントから項目数を拾ってみた（（ ）内の数は度数）

【課題設定】 「車椅子体験は大変だった」(14) 「松本さんの話が聞けてよかった」(12) 「車椅子のことがよくわかった」(12) 「次は車椅子体験です。楽しみ」(7) 「協力できた」(7)

【学習計画】 「早く調べたいです」(9) 「チームでいろいろ話し合った」(5) 「協力できた」(4) 「詳しく知りたい」(4) 「いろいろなことを調べたい」(4)

【情報収集】 「いろいろわかった」(13) 「(いろいろな施設)で調べられた」(11) 「インタビューできた」(10) 「体験学習をした」(10) 「電話をかけて調べられた」(8) 「(インタビューなどの)準備ができた」(4) 「たくさんの資料や情報が集まった」(3) 「協力できた」(3)

【情報発信】 「(発表の方法が) に決まった」(9) 「(発表の作品が) できた」(7) 「しっかり話し合えた」(4) 「前より進んだ」(4) 「楽しくできた」(4)

『協力度』については、課題設定から情報発信まで上向きに高くなっている。単元を通して徐々に協力できたことがわかる。特に情報発信での協力度が高い。

#### 4. 成果と課題

「いきいきタイムふり返しカード」で、児童一人ひとりの単元全体を通じた学習の様子や変化をよみとることができた。次時への期待度を表情で表したが、児童の自己評価を指導に生かす一つの方法としては、効果があった。振り返りカードから教師の単元構成への思いが児童に伝わり、

満足度につながるものがわかった。つまり、教師自身がその単元を通して児童にどんな力をつけたいのか、どんな成長を望んでいるのかを計画段階できちんと整理しておかなければならない。

満足度については、一言コメントや児童との話し合いを通して、各学習過程での自己評価の基準となるものを作っていくべきかもしれない。一人ひとりの学習の様子や変化を実際の指導にどう生かしていくかが大切だが、今回はそこまでは「いきいきタイムふり返しカード」を活用できなかったため、今後はこの点について考えていく必要がある。

	学習内容	評価基準
ふれる	・パラリンピックのビデオを観る ・車椅子スポーツをしている人の話を聞く ・車椅子の扱い方を知る。 ・車椅子体験をする	・ワークシートに自分の気持ちが書けている ・安全に気をつけて体験している
見通す	・どんな障害を持つ人の何について調べたいかを考えて課題を決める ・課題別にグループを作り学習計画を立てる	・調べたい課題を自分の力で見つけられる ・学習計画表に活動内容や手順・方法が書けている
さぐる	・計画に沿って課題を調べる ・交流会をする ・他のグループの経過報告を参考にして、活動を深める	・本とコンピューター以外の方法で情報を集めている。など他3項目。 ・質問や意見を出している ・ワークシートに取り入れたいことを書いている
まとめる	・調べたことをまとめる ・ゲストティーチャーやお世話になった人を招いて発表会をする	・自分の作品に考えが表されている ・わかりやすく工夫してまとめている ・友だちのよいところ（表現と考え）が書けている
生かす	・学んだことを生かして自分にできることを考え、実践する	・アンケートや感想文に自分にできることを書いている ・相手の立場を理解しながら行動している

(資料) 単元構成 (全50時間)

#### (2) ワークシートにみるコミュニケーションスキル (尼崎北小学校 第6学年)

3回のディベート的討論会をした。ワークシート(図2)には『判定』のための基準や聞くためのメモ、意見、感想を書くようにした。ワークシートから学びの様子をよみとることができるよう工夫した。

1. 単元名 「見つけよう!わたしたちの日本」
2. 単元について

本校は、総合的な学習の時間につけたい力として、生きる力をはぐくむため、児童の実態をもとに5つの力(追究力・判断力・コミュニケーション力・責任感・思いやる心)を設定した。本年度はこれらに加え、学んだことを生かす力が必要不可欠ではないかということで、「活かす力」をつけたい力の一つとし、6つの力とした。また、それぞれの力を見る観点を設定した。コミュニケーション力については、理解(聞き取る、読みとる)表現(話す・書く、描く・朗読、動作・音、表情)構成(文や話の内容をまとめる)の3つの観点から見ることにした。6年生のテーマは国際理解である。様々な活動

を通して、外国の文化や生活に興味を持ち視野を広げるとともに、自分の住んでいる国に誇りを持ち互いの違いを尊重し認め合う心を大切に資質や能力を育てたい。そこで、国際理解を他者文化理解ととらえ、日本のよさ、他国のよさを認め、自分や自分の周りのものを認め合うことができればと考えた。

(単元目標)

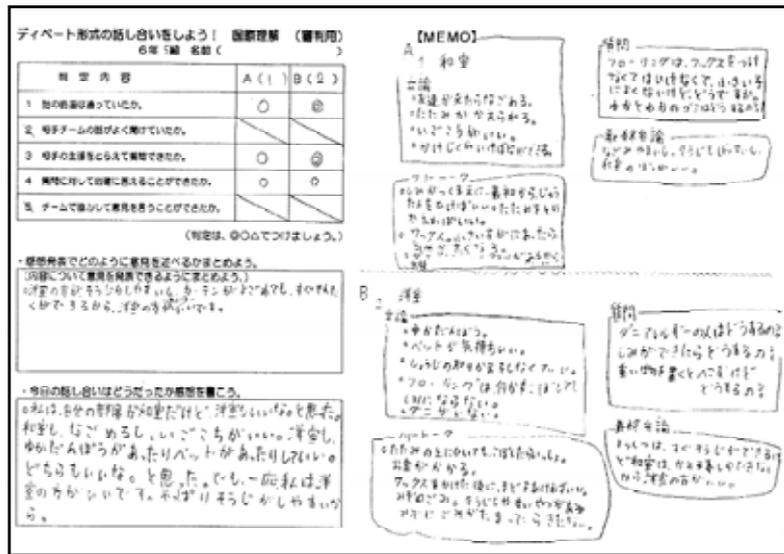
- ・課題にあった資料を集めて取捨選択し、自分の考えを持ち、まとめ、伝えることができる。
- ・自他の違いを認め、互いに尊重しようとするができる。
- ・学習で身につけたことを今後の活動に生かそうとすることができる。

### 3. 支援と評価の実際

本単元では、コミュニケーション力をつけたい力の中心に取り組んできた。「調べる・求める」のプロセスで自分の実践を発信しているゲストティーチャーの話を聞き、なぜ自分たちは日本のことを伝えるのかを考えさせた。また、国際交流会で外国の人に伝えたり異学年交流で1年生にわかるように考えたりと常に相手意識を持たせることを考えさせた。コミュニケーション力をつけるための一つの手段

として3回のディベート的討論会を設定した。第1回「和食対洋食」第2回「和室対洋室」第3回「和服対洋服」である。ワークシートから児童の気づいたコミュニケーション力のスキルを拾い出してみると表2のとおりである。

「的確に答える」「話の筋道をとらす」「資料を提示する」「証拠がいる」「メモをとる」「事前に考えておく」ことなどが大切なこととして気づいている。第3回の「資料」の気づきは第1回の気づきを活かしたものである。「大切」と気づいた児童は、第1回終了後発表に向けて自分たちの「資料」を作り、その努力が全体に認められたのである。



(図2)【ディベート形式の話し合いをしよう】

	児童の気づいたコミュニケーション力(出現項目数計)
第1回 (12/8) 和食 洋食	質問に対して的確に答えていた(12) 一人ひとりが意見をきちんといていた(11) 脱線しない(2) 証拠がないと説得力がない(1) 資料をだしたらよかった(1) もっということを考えておけばよかった(1)
第2回 (12/9) 和室 洋室	質問に対して的確に答えていた(10) 話の筋道がとおっていた(10) 弱点をつくような質問をしていた(4) 自分たちでまとめた意見を言っていた(1) 相手の質問を書いていたらよかった(1) 話をかえることもいい(1)
第3回 (12/15) 和服 洋服	資料があったからよかった(18) 質問に対して的確に答えていた(4) 話の筋道が通っていた(1)

(表2) 児童の気づいたコミュニケーションスキル

#### 4. 成果と課題

この実践を通して、異文化理解、他者文化理解をすることの大切さに気づき、今後の実践への足がかりができたのではないと思われる。インタビューの方法や発表の仕方などの学習方法は、1年生から何度も経験する中で、身についてきているように感じられる。また、ディベート的討論会

をしたことで、独りよがりの発表から相手を意識した発表に変わっていく児童も増えてきた。これらのことから、コミュニケーション力については、ついてきているように感じられる。「活かす力」については、1年生との交流で積極的に関わることができたし近所の人と出会ったときも恥ずかしがらずにあいさつができるようになったと感じている児童もいた。しかしまだ、受動的にしか受け入れられない児童もいるので、自分から働きかけるにはどのような支援があるのかを考えていく必要があると考える。また、つけたい力が身についたかどうかをみるために、ワークシート等のよみとる力を指導者側もつけなければならないと考える。

見つける・見通す (34)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 修学旅行でリトルワールドへ行き、外国の文化に触れ興味を持つ。</li> <li>・ 留学生との交流会を行い、留学生に自国を紹介してもらう。</li> <li>・ 外国のいろいろについて、課題を持ち、新聞にまとめ、交流する。</li> <li>・ 留学生に日本のことを伝えるための情報を集める。</li> </ul>
調べる・求める (29)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集めた情報を発表し、交流する。</li> <li>・ ゲストティーチャーの話を聞き、何のために発表するをするか考える。</li> <li>・ 自分の課題を持ち、課題ごとにグルーピングをする。</li> <li>・ 相手意識を持ち、発表方法を考え、国際交流会に向けて準備する。</li> </ul>
広げる・発信する (7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際交流会を行う。</li> <li>・ 音楽会で1学期から自分たちが学んできたことを広く伝えるため、よびかけの言葉を考える。</li> </ul>
振り返る・生かす (25)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本と外国のそれぞれのよさを意識するために、衣・食・住の 카테고리でディベート的討論会をする。</li> <li>・ 日本の文化を伝えるために異学年交流を行う。(1年生との交流であることを意識させる)</li> <li>・ 1年間の振り返りをする。</li> <li>・ 3～6年生までの総合の振り返りをする。</li> </ul>

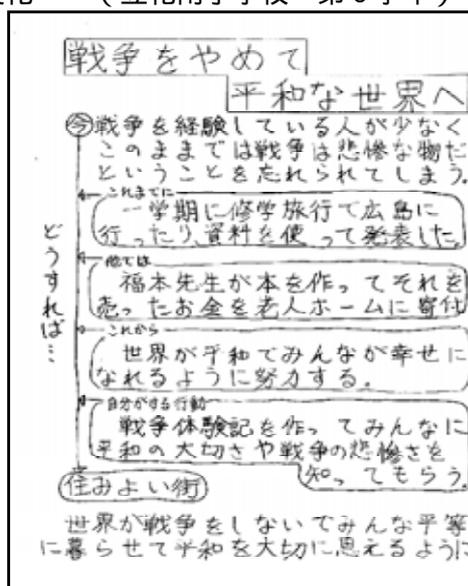
(資料) 単元構成 (全95時間)

#### (3) 学習計画図・学習履歴図から見る子どもの変化 (立花南小学校 第6学年)

学習計画図(図3)を作成し、調査や聞き取り活動をした。調査や聞き取り活動が学習計画図のとおりにはなかなか進まない。学習履歴図(図4)を作成することによって子どもたちは今までの学びを振り返った。評価資料から子どもの学びの変化をよみとる。

1. 単元名 「私達の街を住みよい街に」
2. 単元について

本校での生活も残り少なくなった6年生。これまでの南っ子タイム(総合的な学習の時間)などで学び、考えてきたことの総まとめとしてこの単元(テーマ)を設定した。これまで学習してきたことをもとにして自分たちの住む街を



(図3)【学習計画図】

もう一度見つめ直すことによって、自分の住む街に愛着を持ち、自分の住む街を住みよい街にしようと考え、実践することができればと思う。さらに、自分を取り巻く周りの人と協力することの大切さ、一人では無理でもみんなと力を合わせると一歩前進することができることなどを実感し、今の自分にできることだけでなくこれからの未来にできることも考え続けていってほしい。そして、自分の生き方を振り返り、これからの生き方について考えるきっかけにしたい。

### 3. 支援と評価の実際

#### 振り返りから、テーマの決定

今回のテーマを決めるにあたって、振り返りカードにこれまでの南っ子タイムの單元ごとに一人ひとりが思いを記入した。そのことによって、3年生からこれまでの学習を再度確認することをねらった。そして、振り返りカードをもとに今回取り組みたいテーマを決定させたが、振り返りカードをもとにすることによって、これまでの学習を土台にしたテーマ選びや課題の設定などができたようである。

これまでの学習をさらに深く取り組んだり、これまでの学習を発展させる形で、児童は表3のようなテーマを設定した。

#### 学習計画図の作成から、取り組み・学習履歴図の作成

『戦争の悲惨さを伝えよう』というテーマを設定したグループは、学習計画図をもとに調査や聞き取り活動などに取り組んでいったが、これまでの学習の経験が役立ち、地域の方へのお願いやアンケートなど、パソコンも活用して取り組んだ。取り組む中で取り組みへの感想や反省なども盛り込んだ学習履歴図を作成することによって、人とのふれあいの中での心のつながりを実感したり、活動の軌道修正も行うことができた。

### 4. 成果と課題

上記のテーマに取り組んだグループの児童は「今世界が目指すのは、自分たち一人ひとりの想いを大切にできる世界なんだと思います。国を守るために戦う事じゃなくて、自分自身を守るために戦争をしない事がずっと大事だと思います。私は戦争をなくしたい。私はこれからも自由に生きていきたいです」と、まとめの中で書いている。

本校では、各学年の南っ子タイムの單元配置を

<p>これまで学んできたテーマ</p> <p>《3年生》 私達の街とリサイクル 車いすと私達の街</p> <p>《4年生》 私達の街と外国の人、物、 くらし 阪神大震災と私達の街</p> <p>《5年生》 私達の街と自然</p> <p>《6年生》 私達の街から平和を考える</p>
--

<p>私達のくらしとリサイクル 立花商店街と車いすの人のくらし 車いすでの街のくらし 車いすの人にとっての立花南小学校 震災に備えるために 阪神大震災を伝えよう(震災体験記の発行) 戦争の悲惨さを伝えよう(戦争体験記の発行) 放置自転車について考える(車いす) 洪水の恐ろしさを考える(震災) 動物実験や動物虐待を考える(平和)</p>
--

(表3) 6年児童の考えたテーマ



(図4)【学習履歴図】

系統化している。そして、南っ子タイムでの「身につけさせたい力（課題発見力，問題解決力，行動できる力，自らを振り返る力）」とは別に，それぞれの単元で「単元固有の内容や課題に迫る」こともねらいとしている。それは，内容を問わない力は無意味であるし，子どもたちが自らの生き方を考える学習とはほど遠いものであると考えるからである。

今回の単元に取り組むにあたり，学習計画図や学習履歴図などを取り入れたことによって，単元固有の内容や課題に迫ることができたと考える。児童が活動の見通しを立て，活動途中で自らの手で活動の中身を点検するために教師が行わなければならない支援の大切さを改めて実感した取り組みであった。

3年生から の南っ子タイム での学習を振り返る (3)	振り返りカードに，これまで学習したテーマごとに「主に取り組んだこと」，「学んだこと」，「大切だと思ったこと」，「もっと考えたいと思うこと」などを記入。
取り組むテーマの決定 (3)	振り返りカードをもとに，テーマ記入カードに「取り組みたいテーマ」，「理由」，「考えたいこと」，「調べ方や取り組み方」などを記入。
取り組みへの学習計画図の作成 (4)	これから先の調べ方や取り組み方についての構想を学習計画図として作成し，取り組みの見通しを持つ。
取り組みと学習履歴図の作成 (33)	学習計画図に基づき，調査や聞き取り活動などに取り組む。学習履歴図を作成し，学習計画図の修正も行う。
発表とまとめの作成 (12)	保護者やお世話になった人も招き，下級生への発表会を行う。形に残る物として，冊子などを作成し，発行する。

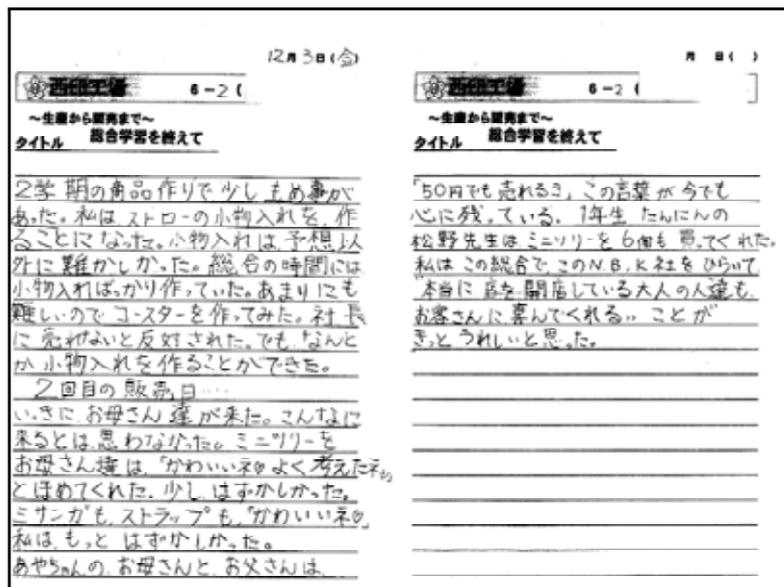
(資料) 単元構成 (全55時間)

(4) 西小学校 6年 ワークシートに見る子どもの「思い」

2回の生産・販売活動をした。そのワークシート(図5)から生産・販売活動の楽しさ・難しさ・新しい発見・協力など子どもの「思い」をよみとる。

1. 単元名 「西印工場」  
～生産から販売まで～
2. 単元について

この学年の児童は第5学年で米作りを通じて主に生産を中心にいろいろな面から学習をしてきた。そこで今年は生産だけでなく「生産したものを販売しよう」ということになった。「何が作れるか」「何が売れるか」を話し合い，さらに家庭を中心に聞き取りをし，意見を出し合った。その



(図5)【～生産から販売まで～総合学習を終えて】

結果，商品を仲間分けし，5つの会社(リサイクル，花・野菜，小物，木工，コンピューターグループ)を作り，組織作りをした。そして，どんな商品を作るかを考え，材料の注文，種，苗などの買いつけにもいった。店の人や保護者，ゲストティーチャーの助言を受け，商品作りに取りかかった。その過程で，商品を守るための価格調査，価格決定，広告，注文票，領収書，会計の仕方などを学んだ。6年生の保護者を対象に，第1回販売日を7月に，第2回販売日を12月に設定した。

この学習を通して，人とのコミュニケーション，物を作る喜び，大変さ，販売することの楽しさ，難しさを知り，共に協力・共同していく力，問題解決する力などを学び，自分たちの生活に生かしてほしいと考えた。

### 3. 支援と評価の実際

児童は毎時間ごとの反省をワークシートに書き留めてきた。そこで，第1回目の販売を終えての反省と第2回目の販売を終えての反省を比較し，生産・販売に対する思い(楽しさ・難しさ) 新たな発見 協力・共同の観点で言葉を抜き出してみた。結果(表4)のようになった。1回目は，売る商品に対しての不安や難しさを感じている児童が多かった。2回目では，大きな声を出せたと自分の成長を感じている児童，反省をもとに商品の改良や商品が売れるように工夫した児童，パソコンの操作技能の高まりを感じた児童，店を開いている大人の気持ちを考えた児童など多くの児童の販売に対する思い

	第1回販売〔7/9〕	第2回販売〔12/3〕
楽しさ	買ってくれてうれしかった(10) 商品や野菜ができた(6) 大人が手伝わず売った(1) お客さんの手が温かかった(1)	買ってくれてうれしかった(8) 品物を作るとき楽しかった(2) 大声出して宣伝したこと(1) みんなとやったのが楽しかった(2)
難しさ	製品作りが大変(5) 経理の仕事が大変(3) 社長の仕事が大変(1) もう少し宣伝すればよかった(1)	製品作りが大変(5) お金の計算や広告作りが大変(1) 看板も値札も商品も作った(1) 思ったほどうれしなかった(1)
新たな発見	こんなに物を売るのがおもしろいなんて思わなかった(1) 商品が売るときに気持ちがよかったような気がする(1) 働くことの大切さ大変さが少しだけわかった(1) 自分たちでかせいだお金は少ないけど重みを感じた(1) とうめいなピンが商品になる(1) もっと難しい物を作りたい(1) 大きな声でお礼やあいさつするといいい気持ち(1) 「ありがとう」だれにでもきちんといえるようになった(1)	本当に店を開いている大人の人の気持ちがわかった(1) お店の人はお客さんが喜んでくれることがきつとうれしい(1) 働くことの大切さを知りました(1) お金の大切さを学んだ(2) よびかけも少しできた。自分では少し成長したと思った(1) 二学期はけっこう声が出せた(1) じょうぶで安くて安心できる商品にしたかった(1) はじめてパンジーの種を見たときはおどろきました(1) パソコンが使えるようになった(1)
協力・共同	仲間同士でトラブルがあった(10) みんなで助けあってできた(2) 力を合わせれば何でもできる(1) いるんなりに助けられて最後まで売ることができた(1)	仲間同士でトラブルがあった(9) みんなで協力してがんばれた(1) いるんなりの力をかりてできた(1) みんなで一つになれたこと(1) 自分一人じゃないしががんばれた(1)

(表4) ワークシートに見る児童の思い(出現項目数計)

の変化が出てきた。また，仲間同士のトラブルは1回目同様にあったが，仲間を意識するような言葉が多く出てきた。みんなで協力することの楽しさ，助けあうことの大切さなど，続いてきたトラブルの解決に向けて努力してきたことから出てきた思いであると考えられる。

#### 4. 成果と課題

・理科の地震の学習を通して、この活動で得たお金を新潟地震や台風の被災地へ募金しようという声が子どもから上がった。また、小千谷小学校や東山小学校，豊岡の宿南小学校へ手紙を書く子どもが出てきた。

・様々なトラブルを話し合いで解決していくことで，協力・共同がこの活動を通して意識づけられた。

・衣食住に関わった生産・販売活動は，児童にとって苦しいこと，困ったことがあってもそれを上回る楽しさのある教材であった。ものを作るということは，ものを大切にすることにもつながる。また，実生活に戻っていくものであり，将来役に立つものであると考えられる。

・この単元は新たに単元開発したもので，活動後に反省することが多かった。実際，店で売られている商品には，材料費だけでなく電気，水，道具など様々なものが関係していることも学ばせる必要があった。そのためには，もっとたくさんの人と関わらなければならない。また，いろいろな分野に分かれての生産活動だったため，指導者の人数が足りず，至らない部分がたくさんあった。

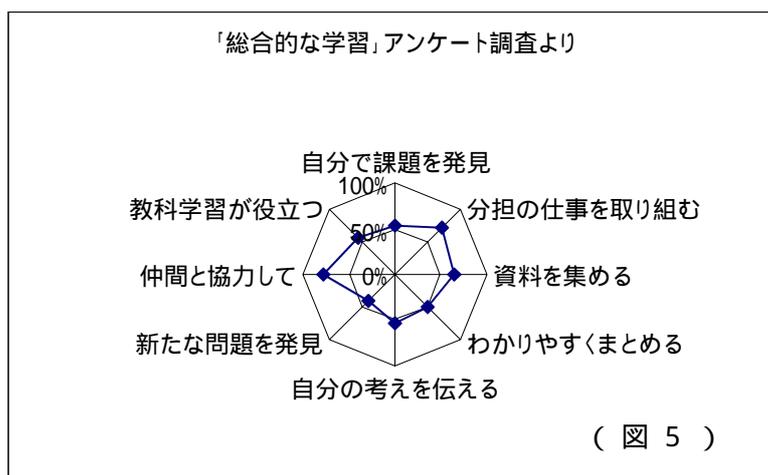
生産から販売までの計画を立てる (5)	・どんなものが作れるか話し合い，売れるものを考える。 ・会社作りをする。 (名前，作るもの，役割を考える。)
製品を作り販売する (30)	・店に行って価格調査をし，商品の価格を決定する。 ・広告，注文書，領収書などを，各会社で工夫する。
第1回目の販売の反省と決算 (2)	・よかった点や反省点を全員で話し合い2回目を生かせるようにする。
第2回目の販売の計画 (2)	・会社の目標を立てる。
製品を作り販売する (24)	・売れ行きが悪かった製品を改善する。 ・好評だった製品をたくさんつくる。・会社交流・報告会をする。
活動を終えて (2)	・1回目，2回目の反省をする。 ・売上金の使い道を考える。

(資料) 単元構成 (全65時間)

### 3 おわりに

本年度は評価資料の作成と活用に着目して，実践研究を進めてきた。評価資料とは，評価をするために活用できる資料のことである。ここでは評価資料として，ワークシートや学習カードなどを表す。評価資料は，教師の指導改善と児童の学習改善をはかり，指導と評価の一体化を具体化するものである。教師の「ねらい」と児童の「めあて」をすり合わせる場面の一つとして評価資料は重要な位置を占めるものである。

市内4校の4年生から6年生(523名)にアンケート調査(H16.12)をした(図5)。71%の子どもが総合的な学習について「満足して学習できた」と答えている。上の図は「できた」



と思う子どもの意識調査である。

「仲間と協力して活動できる」77%、「分担された仕事に取り組むことができる」71%、「資料を集めることができる」65%と意識が高く、「新たな問題を発見することができる」が43%と最も低かった。「自分で課題を発見する」54%、「わかりやすくまとめる」51%、「自分の考えを伝える」53%、「教科の学習が総合的な学習に役立った」と思う児童が56%であった。

本年度の4つの実践事例から次のことがわかった(表5)。

- ・ワークシートで学習の見通しや振り返りを自ら点検し軌道修正することができる。
- ・ワークシートは身に付けたい力を教師の「ねらい」として含ませることができる。

	ワークシート	児童	教師
園田小学校	・今日の満足度、協力度を5段階で表す ・折れ線グラフで表す ・期待度を表情で表す ・ひとことコーナーで感想や思ったことを書く	・単元を通して自分の振り返りができる ・満足度の低いところは「図書室に行ったけど何も調べられなかった」「いろんな所に電話したけど情報なし」と記述	・どんなところにつまずいているかをみて指導することができた ・児童一人ひとりの単元を通して学習の様子や変化をよみとることができた ・表情などの簡単な表記は、わかりやすくチェックしやすい
尼崎北小学校	・ディベート的討論会の判定基準を示す ・メモ欄を設ける ・意見をまとめる ・感想を書く	・感想の中に判定基準の言葉が表現されている ・メモがとれる子ととれない子がいる ・メモで図式化できる子がいる ・自分の意見や感想をまとめることができる	・判定基準が児童にとって自己目標となるよう教師の「ねらい」がある ・メモをとるには聞く力が必要である(国語3,4年話すこと・聞くことの内容に関連) ・資料の活用や話の筋道を通すなど国語や社会のスキルに関連している
立花南小学校	・学習計画図 ・学習履歴図	・学習計画図をもとに調査や聞き取り活動 ・戦争体験記を作ろう ・学習履歴図では戦争体験記を断られて本作りは大変だと思う	・今までの経験から6年は学習計画図を立てることができた ・学習履歴図から計画通りには行かなかったことがわかる ・図で表した学習履歴図は概念マップとして活用できる
西小学校	・7月と12月の感想 ・作文	・「買ってくれてうれしかった」など楽しさを記述 ・「はじめてパンジーの種をみた」など新たな発見を表現している ・仲間同士のトラブルをのりこえてきた	・作文に具体的な事実を書いたり、思いを素直に表現している ・学習をする上で土台となる日々の学級経営が大切である ・作文から児童の変化をよみとることが難しかった

(表5) ワークシートからみる実践事例

- ・ワークシートは評価基準を明示することによって児童の「めあて」となる。
  - ・ワークシートは簡便で継続できるもの、変化が可視的に確認できるよう工夫する。
  - ・児童自ら変化を自覚するためには同じ基準でふり返ることができるよう工夫する。
  - ・教師はワークシート等の評価資料をよみとる方法や鑑識眼が必要である。
- また、本年度の研究から次のような課題が見えてきた。
- ・コミュニケーション力と教科のスキルとの関連を明らかにする必要があること。
  - ・児童自らが変化を自覚できるような評価資料を工夫する必要があること。
  - ・学習履歴など評価資料の活用の仕方について工夫する必要があること。
  - ・評価資料から児童の身に付いた力をよみとる方法を検討すること。

児童は教科の学習が総合的な学習にどのように役立っていると感じているのだろうか。教師は教科の力を総合的な学習とどのように結びつけて支援していくのか。今後の方向として、小中高の12年間の学びの中で、特に小学校では教科と総合的な学習の関係を評価資料を工夫しながら具体的にとらえていきたい。

## 小・中連携による算数・数学の基礎力定着 - 小・中学校の図形指導における基礎力の定着率調査 -

指導主事	阿部 保彦
研究員	常見 一彦 (上坂部小)
〃	真殿 康正 (南武庫之荘中)
〃	増田 享 (大成中)
〃	竹内 義明 (武庫南小)

### 【内容の要約】

子どもの学力低下が論議される今日、「基礎的・基本的な内容の確実な定着を図ること」が求められている。算数・数学における「図形」の効果的な指導方法を探るため、本年度は小学校6年生，中学校1・2年生に全く同じ「確認テスト」を実施し、「図形」の基礎力の定着率を調査分析し，考察した。

今後，小学生が中学校に入学した後，図形の基礎力がどのように変化するかを小・中学校で連携して追跡調査していく。

キーワード：小・中連携，確認テスト，円周率，作図，つまずき

1	はじめに	133
2	本年度の研究の概要	134
3	本年度の研究の計画	134
4	実践 「確認テスト」調査	135
5	全体の考察	139
6	おわりに	139

## 1 はじめに

今日、子どもたちの学力低下が懸念され学力向上についての論議もされている。本市においても小学校5年生、中学校1・3年生の児童生徒を対象に平成16年5月10日～20日に実施された「学力・生活実態調査」の結果が発表された。得点率を比較すると5年生算数は6.3%、1年生数学は4.2%、3年生数学は6.0%それぞれ全国平均を下回っている。今後の取組の方向として、「教科等研究会や教育総合センターを中心に教材の開発や指導方法の研究・研修する。小・中学校にまたがって検討・改善が必要なものについては小・中学校が連携して調査・研究を行う」ことが必要とされている。全市的な課題として教師にさらなる指導改善が求められている。

学習指導要領において、「第5 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として「(1) 各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること。」と学年間の連携の重要性が指摘されている。そして、「(5) 各教科等の指導に当たっては、児童が学習内容を確実に身に付けることができるよう、学校や児童の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、児童の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導、教師の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること」と示されている。

しかしながら同じ学校内であっても、学年間の連携がとれていないのが現状である。さらに、小・中学校の教科における連携についてみれば、本市の実践は研究実践の2～3校に限られる。ここに、算数・数学でのよりよい小・中学校の接続のありかたについて研究する必要性を感じた。小学校から中学校への移行期の指導内容を、連続性があり、かつ、個に対応したものへと改善するため、指導方法を研究して、基礎・基本的な内容の確実な定着を図りたい。このような理由から研究テーマを「小・中連携による算数・数学の基礎力定着」とした。

具体的には「図形」を取り上げることにした。過去2年間は「分数」を取り上げ、個別指導することが最適であることを報告している（紀要四十、四一号）。図形は「きれい」「苦手」という言葉を中学生はよく口にする。理由を聞くと、小学校の時の図形は楽しかった・よくわかった。けれど中学校でやる図形はおもしろくない・わからないと言う。たしかに図形領域は、小学校では作業的・体験的な活動が重視され、規則性を有する図形の美しさに気付くよう、経験を通して児童の興味・関心を高めることができる内容である。しかし、中学校以降、平面図形では証明の必要性や手順がわからず、生徒にとって興味・関心を持ちにくい分野となってくる。中学校図形領域の大きな特徴は、演繹的な推論の方法を活用することにあると言える。まず根底となるのは、基本的な図形概念や性質を理解すること、図に表現したり正しく作図する能力を身につけること、図形についての知識や技能を活用する能力を伸ばすことにある。つまり、小学校で学習した基礎知識・技能を中学校図形学習にいかに応用できるよう指導できるか、教師の指導力が求められる領域である。これらの理由から、小・中学校において系統的な算数・数学の指導がされているかその力をみるのに「図形」は格好の単元であるといえる。

以上のことから本年度についてはサブテーマを「小・中学校の図形指導における基礎力

の定着率調査」と設定した。

なお、次年度は調査結果を基にし、効果的な指導方法の研究と実践へとつなげる予定である。

## 2 研究の概要

本年度は、小中学生に小学校で学習する図形の基本的な概念や性質がどこまで定着しているか調べるため「確認テスト」(後掲)を作成し、実施することにした。その後、一定の期間、反復練習や児童生徒の学習意欲を高める指導などの学習を取り入れ、図形の基礎力がどう推移していくか、さらに活用して図形の学力として定着したか見るための図形テスト(中学校1・2年生の学習内容)を実施する予定である。どんな力がついたのか、どんな力が足りないのかを追跡調査する。正答率がどの様に変化するかを調べ、効果的な指導をさぐろうと計画した。

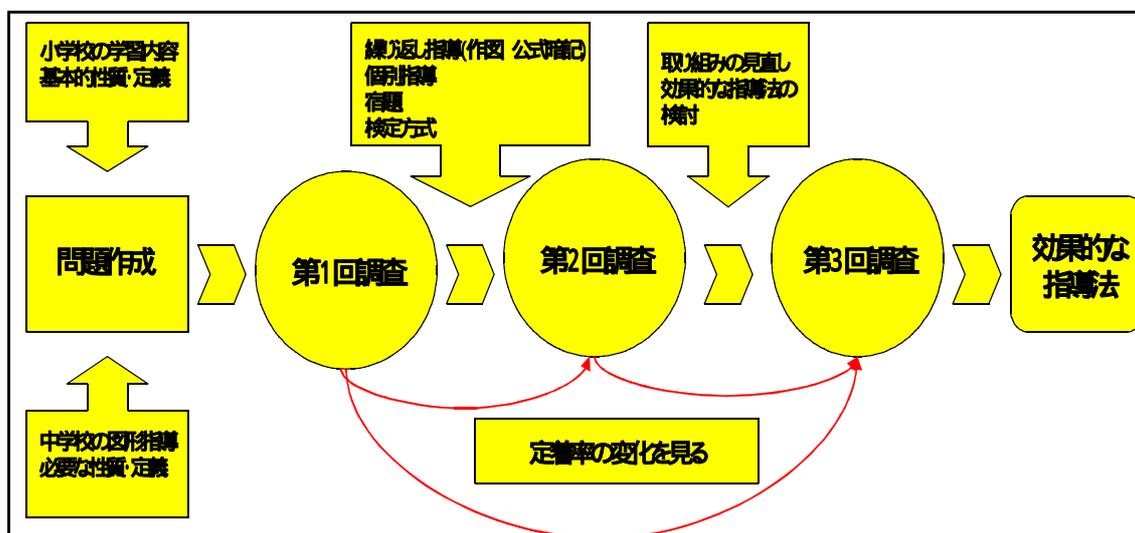
### 【図形指導における基礎力定着率調査】

- ・基本的な図形の概念や性質を理解できているか、どこでつまづいているか、どこまでできるのかがわかるような問題であること。
- ・中学校で図形指導していく上で各学年でこれだけは最低限必要であり、これができないと次の学年での学習に支障を来すと思われる内容であること。

この2点をふまえて、問題を作成した。

## 3 研究の計画

計画は2年間継続して研究することにした。次にその概要を図で示す。



第1回調査と第2回調査の間に次のような指導をする。

- (例)・授業開始時に反復練習(作図, 公式暗記)をさせる。
- ・誤答の多かった生徒を個別指導する。
  - ・宿題として家庭学習させる。

- ・難易度の異なる問題を何種類か用意し，検定形式をとる。

これを一定期間続けた後，第2回調査で図形学力の定着率の変化をみる。この間の取り組みが有効であったかどうかを判定し，効果的な指導法の検討を行う。そしてまた一定期間指導した後，第3回調査を行う。

差異は全体平均だけでなく，個々の児童・生徒の変化について調べる。小学6年生が中学生になったときどう変化するか，今年の中学1年生と来年度の中学1年生はどう変わるのか等について個別に追跡調査する。

#### 4 第1回図形基礎力の定着調査

##### (1) 「つまずき」箇所をさぐる19問図形基礎力確認テスト

###### 1. 19問図形基礎力確認テスト

小学校から中学校1年生までの図形指導では，児童生徒が図形そのもの(辺の長さ，角の大きさ，図形の名称等)について学習する。それに対して中学校2年生からは，図形を利用した学習となり，論理的思考力の育成に重点がおかれるようになる。すなわち，直観的な扱いから論理的な扱いへと移っていく。中学校数学の図形指導の目標は論理的思考力の育成にある。小学校で既習した基礎知識・概念が土台となり論理的思考力が育つと思われる。そういう意味で，19問図形基礎力確認テストは中学校における図形の学力をはかる目安と言える。

###### 2. つまずき箇所をはかる19問テスト

確認テストは，11月小学6年生199人，中学1年生404人，中学2年生324人に実施した。実際のテストは，資料として最終ページに記載する。

##### (2) 「つまずき」箇所をさぐるための分析

###### 1. 中学校図形領域につながる出題

中学校での図形指導を進めていく上で，必要と思われる小学校での既習内容を問題として出題，すべて中学校の学習内容と結びついている。4年生領域から7問，5年生領域から12問出題している。

###### 2. 具体的な学年のつながり

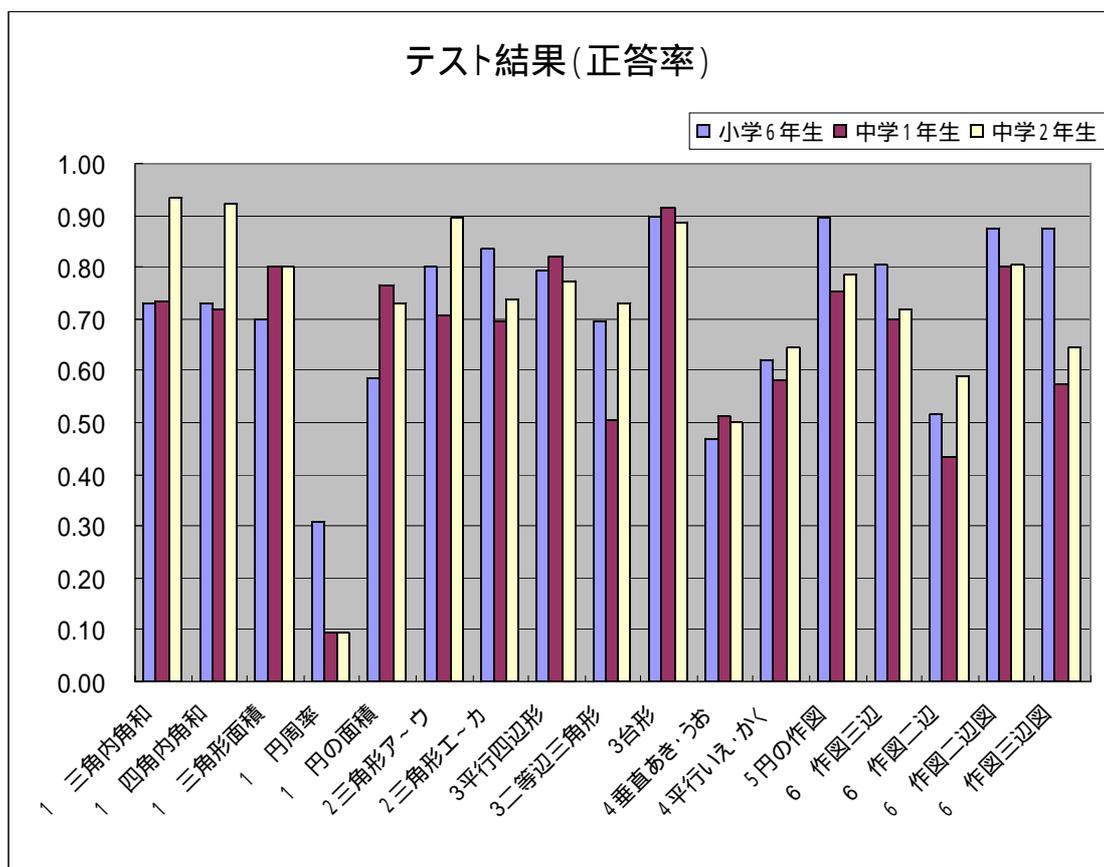
問題番号	出題の意図(小学校学年)	学習内容(中学校学年)
1	三角形の内角の和(5年)	三角形の角・合同(2年)
		三角形の相似(3年)
	四角形の内角の和(5年)	三角形と四角形(2年)
	三角形の面積を求める公式(5年)	図形の計量(1年)
	円周率の意味(5年)	図形の計量(1年)
	円の面積を求める公式(5年)	図形の計量(1年)
2	三角定規の角度(4年)	三角形と四角形(2年)
	直角三角形(㉗~㉙)	図形の性質と合同(2年)
	直角二等辺三角形(㉚~㉜)	三平方の定理(3年)

3	図形の名称	
	平行四辺形(5年)	三角形と四角形(2年)
	二等辺三角形(4年)	三角形と四角形(2年)
	台形(5年)	文字と式(2年)図形の相似(3年)
4	垂直と平行を直線から探す(5年)	平面図形の作図(1年) 一次関数(2年)図形の相似(3年)
5	コンパスを使って円を作図(5年) 直径がわかる	平面図形の作図(1年) 三角形と四角形(2年) 空間図形(1年)
6	三角形を作図(4年)	
	3辺の長さ 文章だけ	三角形の合同(2年)
	2辺とその間の角 文章だけ	三角形の合同(2年)
	2辺とその間の角 図あり	三角形の合同(2年)
	3辺の長さ 図あり	三角形の合同(2年)

(3) 「つまずき」箇所の分析

1. 11月実施テストの正答率の結果

19問の正答率を学年毎にグラフで表した。



・円周率の意味がどの学年も理解できていない。(1)

- ・円周率については小学6年生の方が理解できているが、それを使って円の面積になると中学1年生・中学2年生の方がよく理解（記憶）している。（1）
- ・三角形・四角形の内角の和は中学2年生で学習されている分、小学6年生・中学1年生に比べて中学2年生は到達度が高い。（1，）
- ・いろいろな形の三角形・四角形では、どの学年も二等辺三角形の理解が低い。反対に台形はよくわかっている。（3）
- ・二辺夾角の三角形の作図は、図がある方がよく書けているが、三辺が与えられている三角形の作図では、逆に図がある方があまり書けていない。（6）
- ・平均して良くできているのは中学2年生。7割以上できている問題が多い。中学2年生で学習し直す内容が多いからであろう。

## 2. 19問の難易度

下表は正答率からみた難易度と誤答分析するため出題内容・学年を右表に示したものである。（学年毎に正答率の低い方から並び替え，上位6問を抽出）

小学校6年生				中学校1年生				中学校2年生			
難易順	問題番号・出題内容	学年	正答率	難易順	問題番号・出題内容	学年	正答率	難易順	問題番号・出題内容	学年	正答率
1	1 円周率	5年	0.31	1	1 円周率	5年	0.09	1	1 円周率	5年	0.10
2	4 垂直あき・うお	5年	0.47	2	6 作図二辺	4年	0.43	2	4 垂直あき・うお	5年	0.50
3	6 作図二辺	4年	0.52	3	3 二等辺三角形	4年	0.50	3	6 作図二辺	4年	0.59
4	1 円の面積	5年	0.59	4	4 垂直あき・うお	5年	0.51	4	4 平行いえ・かく	5年	0.64
5	4 平行いえ・かく	5年	0.62	5	6 作図三辺図	4年	0.58	5	6 作図三辺図	4年	0.65
6	3 二等辺三角形	4年	0.69	6	4 平行いえ・かく	5年	0.58	6	6 作図三辺	4年	0.72

### 上表の難易度上位6問について誤答分析

各学年上位6問のうち4問が全学年共通している。また、二つの学年で2問共通している。以下6問、1 円周率、4 垂直な二直線、6 作図二辺夾角、4 平行な二直線、3 二等辺三角形、6 作図三辺図について誤答分析していく。それぞれつまりき箇所を波線で示した。

- ・1 「円周率」の公式を求める 「円周率 = 円周 ÷ 直径」 （小学5年）

「面積 ÷ 直径」や「面積 ÷ 半径」と「面積」という言葉が出てきたり、「直径 ÷ 円周」と逆に覚えている児童生徒がいた。あと、「 $3.14 \div$  円周」や「直径 ÷ 3.14」と「3.14」を使っている児童生徒がいた。「円周率」 = 「3.14」であることを理解していない。小学5年では、用語「円周率」を知らせ円周率を使って、直径から円周を求めたり円周から直径を求めたりすることができるようにすることを学ぶ。この公式はこの単元の時のみ使用する。他の単元で使用することがないので、公式を覚えてないまま終わることが多い。

- ・4 垂直な2辺を求める （小学5年）

「い」と「か」、「い」と「く」の間違が多い。他に「う」と「か」や「う」と「く」、「え」と「か」や「え」と「く」も多かった。分度器を使ってもよいと書か

れているにも関わらず、使っていないで見た目で判断しているように思われる。分度器の使用 방법에未熟さがある。また、垂直の定義を理解できていない。

- ・ 6 作図二辺夾角の作図<文章だけ> (小学4年)

問題文を読みとれていない。無解答が多かったり、2辺だけ書き3辺目の線を書いていなくて三角形になっていない。他に平行四辺形をかいている児童生徒もいた。3cmと6cmにこだわり二等辺三角形を書いたり、50度にこだわり両端が50度の二等辺三角形を書いていた。また、分度器で50度を測れていなくて間違っている場合もあった。これもまた分度器の使用 방법에未熟さがある。

- ・ 4 平行な2辺を求める (小学5年)

「い」と「え」の横の二直線は探しやすく正解が多いが、「か」と「く」の縦の二直線は見つけにくいようである。「お」と「く」という間違いも多かった。垂直と平行とを混同している児童生徒もいるようである。

- ・ 3図から二等辺三角形を求める (小学4年)

「三角形」とだけ書いている間違いが圧倒的に多い。他に直角三角形や正三角形、二辺三角形があった。三角形の辺の長さの相等関係に着目して、二等辺三角形、正三角形の用語や性質を知らせる必要がある。(二等辺三角形の2角が等しいことも知らないことも多い)

- ・ 6 作図3辺の作図<図から> (小学4年)

6cmと7cmをコンパスで長さをとって書くことができるが、夾まれた角度を見た目で判断し残りの5cmを確かめず、直線を引いて完成させている誤答が多く見られた。これは、角度の認識があまい、確かめが少ない。

#### 分析から考察

- ・ 円周率の正答が非常に少ない

中学1年生で円周率を と学習する。最近学んだことで、完璧ではないが円周率と関係がある事は覚えている。小学5年生で学習するが、円の面積・周を求める公式の中の1つの用語としては覚えている。ところが、「円周率」の意味・定義が理解できていないことがわかった。また、「二等辺三角形」の定義・性質も理解できていないことがわかった。中学校の授業では小学校の内容を理解できないまま通り過ぎてしまうのが現状である。中学生になると記憶も薄れ、そのため小学生より正答率が低くなっている。中学1年生の3学期おうぎ形の面積を学習するが、この時も円周率の意味を理解せず、ただ公式を覚えるだけになる。意味がわからず覚えなければならないので定着しにくく、正答率も低くなる。

図形指導において、円周率、二等辺三角形、垂直、平行は必須の用語である。中学校においてもこれらの定義をもう一度確認する必要があると思う。

- ・ 作図ができない

問題文が読みとれない、コンパス・定規・分度器の使用技能に問題がある。いろいろ原因をあげることはできるが、中学校で図形領域を学習する際、特に証明を中心とした平面図形ではまず作図できることが必要である。実際の図形があってそこから証明を論理的にすすめることができるのである。文章を読み作図する能力を育てること

が大切である思う。

中学校図形指導においても、小学校で重視されている作業的・体験的な活動を取り入れた指導方法が必要とされているのではないだろうか。もっと教具を使い、身近なものと体感させ理解させることが大切だと思う。

## 5 全体の考察

今回の正答率は中学1年生より中学2年生の方がよかった。それは中学2年生で三角形の合同条件を学習していく過程で再認識するからだと思われる。つまり、中学2年生の図形指導において、よりわかりやすく・定着させる指導方法を工夫しなければいけないことを警鐘しているのである。

小学校の低学年の折り紙遊びなどのように、「図形」は生活に密着していることが多く、三角形・四角形・円など視覚でとらえ名称をいえる子どもは多い。また、それらの性質も、「直角」や「対称」など簡単なものは日常の生活の中で使いこなせている。しかし、最近の傾向として、想像する力が乏しくなり、名称を聞いてもその図形が頭の中で形にならない児童生徒も増えてきている。

今回のテストは、小学校の観点と中学校の観点とのつながりのなかで、中学校から見た「小学校で理解してほしい図形の性質や定義」をもとに問題を作成した。このテストで、「円周率」の理解度が低く、また、角度を上手に使いこなせていないことがわかった。辺の長さ、角の大きさをきちんと確かめず、見た目の判断で問題を解く傾向がうかがわれる。深く考慮せず、また、あまり確認をせずに解答する児童生徒が多い。そして、そのような場合のほとんどが誤答になっている。次回のテストでは、中学校で観点別にテストし、今回のテストの観点との相関を詳しく調べていきたい。

そして、その結果から小学校図形指導において最低限理解・定着させるべき内容を明確にすること、効果的な指導方法を研究することで、これからの図形指導にいかしたいと思う。

## 6 おわりに

一昨年・昨年と算数・数学の指導の連続性を図ることを目標に、2年間小・中連携による分数計算力の定着率調査に取り組んできた。今年は新たに小・中学校それぞれ2校から研究員が参加し小・中連携に取り組んでいる。児童生徒に算数・数学の図形の基礎力を身につけさせるには、小中の連携を進め、学習指導に一貫性を持たせていく必要があることを、小中の教師がお互いの立場で考え直す「場」になったのではないかと思う。

今後は、効果的な指導法についての研究と、個がどのように力をつけ伸びるか追跡調査していきたい。



## デジタルコンテンツを活用した効果的な指導方法の研究

指導主事	米田 浩
研究員	田川 宏 (難波小)
〃	下浦 雅洋 (潮小)
〃	松本 明美 (立花小)
〃	枝廣 好江 (立花西小)
〃	阿部 容子 (塚口小)

### 【内容の要約】

e-Japan戦略で「普通教室へのコンピュータやネットワークの導入」が進められているが、目標年度の平成17年度を目前にして、ハードウェアの環境整備が進んでいない自治体が多い。

整備の遅れているハードウェア環境に対してソフトウェアであるデジタルコンテンツでは、小学校の国語科デジタル教科書、理科デジタル指導書やデジタル掛図が市販されるなど、大きな動きが見られる。

本研究では、デジタルコンテンツを使った実践研究を中心に、平成17年度以降の教室のあり方について研究を進めた。

キーワード：教育の情報化，小学校，情報教育，教科教育，デジタルコンテンツ，データベース，カリキュラム，コンピュータ，インターネット

1	はじめに	141
2	研究について	141
3	Presentation Toolを使った教材作成	141
4	デジタルコンテンツを活用した学習の実践について	142
5	GPS携帯電話と情報追記型GISによる共同学習プロジェクト	145
6	「ポスト2005年」に向けて	148

## 1 はじめに

平成17年度末に「我が国が世界最先端のIT国家になる」というのが、国家戦略としての「e-Japan戦略」である。その中で、公立小中高等学校等のIT環境の整備（文部科学省，総務省）として、平成17年度までに、各学級の授業においてコンピュータを活用するため、すべての教室がインターネットに接続できるようにする。また、コンピュータ教室における1人に1台使える環境の整備のほか、普通教室等への整備を推進し、教育用コンピュータ1台あたり児童・生徒5.4人の割合を達成することを目指して進んでいるが、現実には普通教室へのLAN整備は、全国平均で37.2%しか達成されておらず、インフラ整備の遅れを物語っている。【文部科学省「学校における情報教育の実態等に関する調査」平成16年3月31日】

しかし、ハードウェアに対して、ソフトウェアであるデジタルコンテンツについては、教科書会社が教科書に準拠したデジタル化教材を市販するなど大きな動きが見られる。

そこで、本研究部会では、デジタルコンテンツを使った実践研究を中心にして、平成17年度以降、いわゆる「ポスト2005年」に向けた学習の在り方について研究を進めた。

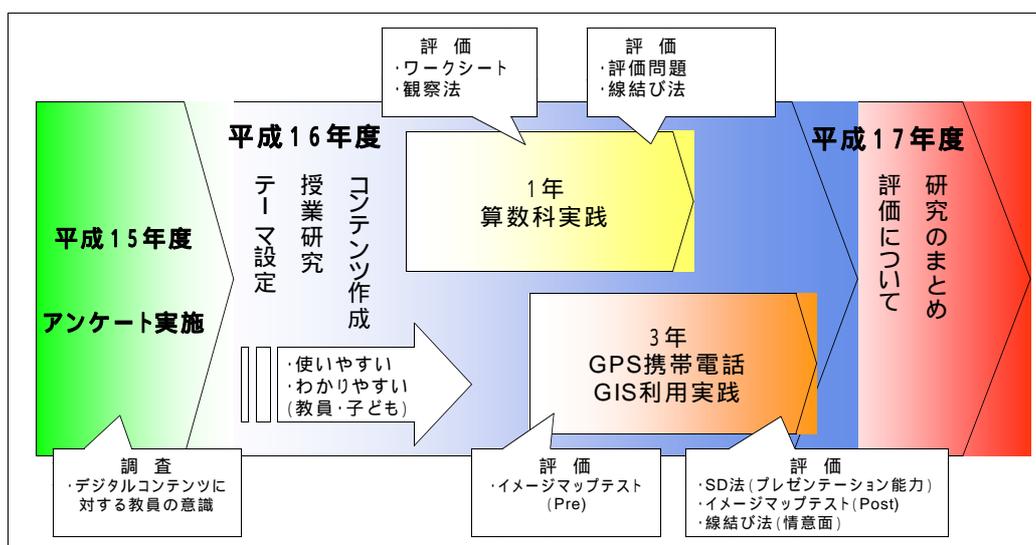
## 2 研究について

### (1) 研究テーマ

本年度は、「デジタルコンテンツの作成と活用」を基本テーマとし、どのようなデジタルコンテンツを活用すると効果的に学習が進められ、子どもたちの学習意欲がどう高まったかという課題を中心に、実践的な研究を進めた。

### (2) 研究の方法

本年度は、昨年実施した「デジタルコンテンツに対する意識調査」の結果を踏まえ、算数科で利用するデジタルコンテンツを作成し、授業実践を行うことでテーマに迫ることとした。研究活動の流れは【図1】のとおりである。



【図1 研究の流れ】

## 3 Presentation Toolを使った教材作成

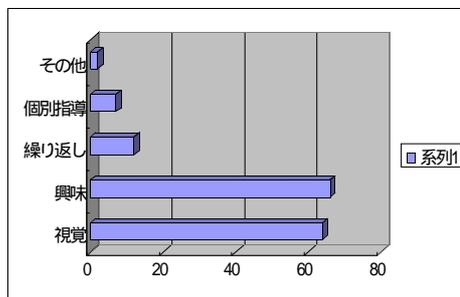
### (1) 自作教材の作成について

デジタルコンテンツを使った授業は、視覚に訴えたり、子どもたちの興味を引きつけ

るという点で有効である。

	視覚	興味	繰り返し	個別指導	その他	合計
全体	64人 42.4%	66人 43.7%	12人 7.9%	7人 4.6%	2人 1.3%	151人 100%

【表1 使ってよかった点】



【図2 使ってよかった点】

【表1】と【図1】は、昨年度の「デジタルコンテンツ研究部会」で調査したアンケート結果である。対象は小学校10校217人（女性170人、男性47人）である。「デジタルコンテンツを使って、よかった点は？」という設問に、全体の約85%が「視覚に訴えて、興味関心が高まる」という回答をしている。

【参照：紀要41号 研究報告書 P.69 平成16年3月】

本研究では、一般的なPresentation Toolである、Microsoft PowerPointを使ってデジタルコンテンツを作成し、それを活用した授業を行った。

「自作コンテンツ」では、自分のイメージに沿ったデジタルコンテンツを作ることができるというメリットがある。授業の流れを頭に描きながら、クリックして絵を出すタイミングを考えたり、画像や文字に自由に動きをつけることができる。この動きについて、以前は難しいプログラムを組むことが必要であったが、最近のPresentation Toolではアニメーション効果などを使うことによって簡単に動きをつけることが可能となった。教科書で最初から表示されている「ヒント」の部分を、後から表示させるというようなことが簡単にできる。

「自作コンテンツ」の場合は、実際に授業をして感じた不具合をすぐに修正し、次の授業に反映させることができる。また、教員が作ったデジタルコンテンツを共有化し、自分のクラスにあったものに作り直すことを可能にしておくことが普及のための大切な要因となる。今後、教材を画用紙や模造紙を使って作るのと同じように、「デジタルコンテンツ」を自作することが広まっていくことが期待される。

## 4 デジタルコンテンツを活用した学習の実践について

### (1) デジタルコンテンツの使用について

1年生を対象にデジタルコンテンツを使った授業を実践した。単元は算数科の「くりさがりのあるひきざん」を選んだ。黒板を使った授業では、位取りの概念を学ばせるために提示用タイルを黒板に貼り付けながら子どもたちと操作をするのだが、位を移動するたびにタイルを取ったり貼ったりしなければならず、時間がかかることが多い。しかし、デジタルコンテンツを使用することによって、タイルの移動がスムーズで、学習内容を説明する言葉も瞬時に表示できるため、子どもたちが理解しやすいと推測し、デジタルコンテンツを使うことにした。

「NEW 教育とコンピュータ」【学習研究社発行 平成15年12月号】からデジタルコンテンツを選んだが、教材研究をしていく中で、タイルの表示の形式が本市で使用している算数科の教科書と違っているところがあったため、子どもたちが理解しやすいようにデジタルコンテンツの基本設計からやり直した。

近い将来、各教室にコンピュータが入り、コンピュータを使った授業が日常的に行われることになる。そこで、普段からコンピュータを使った授業を経験することは大事であると考え、この授業実践の他にも国語科の「ものの教え方」「漢字の成り立ち」などいくつかのデジタルコンテンツを用いて授業を行った。最初は、教室にあるコンピュータやプロジェクタ等の情報機器に関心が向き、デジタルコンテンツを使った授業に驚きを見せていた子どもたちであったが、徐々に慣れていき、普通の授業の一つとして受け入れられるようになった。

## (2) 授業展開

学習活動	教師の支援	評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>学習課題を把握する。</li> </ul> <div data-bbox="284 680 1310 725" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>いろがみが13まいあります。9まいつかうとのこりはなんまいですか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>立式する。 ワークシートに記入する。 発表する。</li> <li>計算のしかたを考える</li> </ul> <div data-bbox="240 869 592 1137"> </div> <p>【図3 コンテンツ画面】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>考えを発表する。</li> <li>計算の方法を確認する。</li> <li>2つ目の学習課題を把握する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題提示の「のこりは」という言葉から、何算で求めたらよいか考えるようにする。</li> <li>児童の思考にそったデジタルコンテンツを用いる。</li> <li>ブロックを用いて、イメージ化できるようにする。</li> <li>10から先に引くことを意識させる。</li> <li>計算の方法をデジタルコンテンツに合わせて声に出させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>立式できたか。 正しくひき算で立式できたか。 できなかったか。</li> <li>ブロックを操作して、計算のしかたを考えることができたか。 十の位からのくりさがりができたか。 できなかったか。</li> <li>自分の考えをもつことができたか。 10から先にひく考え方が言えるか。 言えないか。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>立式する。 ワークシートに記入する。 発表する。</li> <li>計算のしかたを考える 考えを発表する。</li> <li>計算の方法を確認する。</li> </ul> <div data-bbox="240 1563 592 1832"> </div> <p>【図4 コンテンツ画面】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>練習する。</li> <li>答え合わせをする。</li> <li>まとめをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>わからない児童には、前の問題の立式のしかたを思い出させる。</li> <li>デジタルコンテンツを用いながら、丁寧に確認していく。</li> <li>2問程度、みんなで一緒に問題を解くようにする。</li> <li>理解しにくい児童には、提示用計算ブロックを用いる。</li> <li>デジタルコンテンツで正答を表示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>立式できたか。</li> <li>10から先に引く考え方ができたか。</li> <li>自分の考えをもつことができたか。</li> </ul> <div data-bbox="1023 1585 1342 1697" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価については、1問目と同様である。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>進んで問題を解こうとしているか。 情意面は、線結び法・SD法にて行う。</li> <li>正しく計算ができたか。 練習問題がすべて正解しているか。 不正解があるか。</li> </ul>

### (3) 授業を振り返って

子どもたちは、集中して意欲的に授業に取り組んだ。タイル操作の場面では、デジタルコンテンツと自分の操作したタイルを見比べ、まちがっているときには、提示したデジタルコンテンツを見て修正することができていた。タイル操作が簡単に提示できるため、じっくりと机間巡視をし、子どもたちのタイル操作の様子をしっかりと確認することができ、個別指導にも役だった。

また、デジタルコンテンツは、ページを戻すことができるので、先に進んでいても、復習としてもう一度、前のページに戻り、要点を押さえることができた。

学習内容の習熟に関して、単元のまとめのテストの結果は下のとおりである。

ひきざん(2)	100点	88.9%	誤答例：文章問題で単位つけ忘れ	1人
	95点	11.1%	計算まちがい	2人

テスト結果だけではデジタルコンテンツの優位性について言及はできないが、使用したことによって、比較的短時間で「くりさがり」の意味を理解させることができ、例年以上に計算練習等の定着の時間を確保できたことは確かである。

### (4) 児童の授業の感想

「黒板と比べてすごくわかりやすかったです。」

「いつもの黒板よりもコンピュータのほうがたのしかったです。テレビみたいだったです。」

「黒板で普通に勉強するよりおもしろかったよ。なぜかと言うと、算数の答えが下から出てくるからだよ。」

「コンピュータで勉強ができるなんてびっくりしたよ。リモコンのボタンを先生が押したら、画面がかわってびっくりしたよ。黒板じゃなくてもできてびっくりしたよ。先生がいちいちタイルを出さなくてもできて、ほんとにすごく楽しかったよ。またしたいなあ。」

ほとんどの子どもが「楽しい」「おもしろい」という感想を持っており、意欲的に学習に取り組めたことがわかった。その他、情意面での評価については、線結び法・SD法を用いて評価・分析する予定である。

### (5) デジタルコンテンツを使った授業を実践して

何より、子どもの反応がとてよかったのはうれしいことである。

学習内容をスムーズに提示できる点、また、実物の写真や映像などを提示でき、視覚に訴えることができる点で、子どもの理解に大いに役立つと感じた。

一方で、授業を行う前に、その授業にふさわしいデジタルコンテンツ選びや、授業の中での活用の仕方、デジタルコンテンツの提示の方法など、教材研究を怠らないことが重要である。

また、教室で提示用としてデジタルコンテンツを使う場合、コンピュータとプロジェクタなどの周辺機器との接続に要する時間も考慮しておかなければならない。さらに、画面が見やすいように遮光率の高いカーテンの設置や、高輝度スクリーンの設置など、教室環境を整えていく必要がある。

可能であれば、本市のコンピュータ教室に設置されているような、明るい教室でもそのまま画像が提示できる大型ディスプレイ（プラズマや液晶）、タッチパネル式の電子ボードなどの提示装置が望ましい。

## 5 GPS携帯電話と情報追記型GISによる共同学習プロジェクト

本研究部会では、財団法人コンピュータ教育開発センター（CEC）が推進する、平成16年度「Eスクエア・アドバンス」IT活用教育推進プロジェクトの「GPS携帯電話<sup>1</sup>と情報追記型GIS<sup>2</sup>による共同学習」に授業実践校として参加した。

小学校3年生段階における、インターネットやコンピュータ活用に加え、GPS搭載携帯電話を使い、調査情報（画像、テキスト、調査位置、日時など）をGISデータベースに簡単に登録可能なインターフェースを開発し、限られた授業時間を効率的に活用し、かつ学習の場を学校環境だけにとどまらず、その周辺環境にまで広げたアクティブなフィールドワークにおける学習の重要性を示唆するものとする。

本プロジェクトの詳細については、「GPS携帯電話と情報追記型GISによる共同学習」のサイトで掲載している。<http://www.ptolemaios.jp>



【図5 プロジェクトサイト】

### (1) 単元について

「老人福祉センターの方たちと楽しくすごそう！」（小学校第3学年 総合：福祉教育）  
ねらい

地域に目を向け、自分たちにできるお年寄りのための活動を考える力を育てる。  
情報機器を効果的に活用し、相手にわかりやすく伝える能力を育てる。

### (2) 実践の概要

本実践は、「お年寄りとふれあおう」という単元の一部にあたる。実践校の場合、お年寄りと同居している子どもは少ない。そこで、まず、夏休みに自分の祖父母の特技や趣味などを聞いてきて、発表した。その後、校区にある老人福祉センターを訪問した。ここは60歳以上の高齢者のための市の施設である。健康体操を一緒にしたり、盆踊りなども教えていただいた。子どもたちは、自分たちが想像していた以上にお年寄りが元気なことに驚いた。

次に、自分の祖父母や、地域のお年寄りに「元気のひけつ」や「体について困っていること」を調査した。老人福祉センターにインタビューに行った児童もいる。まとめる中で、元気そうなお年寄りでも身体的には困っていることがあることに気づいた。また、自分たちが祖父母と話をしたり、老人福祉センターを訪ねたりすることを楽しみにしてくださっていることもわかってきた。身体的な衰えについては、簡単なシニア体験を行い、大変さを実感することもできた。

老人福祉センターでは、総合の時間だけでなく、社会科の「昔の暮らし」を学習する中で、「昔の遊び」を教えていただいたり、一緒に遊んだりする時間を持つことができた。最初の訪問ではとまどっていた子どもたちも、「一緒に遊ぶ」活動を通していろいろな会話を楽しみ、学習の時間以外にも施設を訪問する子どもも出てきた。

このような活動の中で、子どもたちは「老人福祉センターの方たちに感謝の気持ちを表したい」と考えるようになってきた。そこで、「特技をみてもらおう」、「自分たちの作品を紹介しよう」、「ミニ音楽会をしよう」、「一緒にできるゲームを考えよう」、

「老人福祉センターの方たちに役立つマップを作ろう」という5つの計画を立てた。本実践は、そのうちの1つである。

実際の子どもたちの活動としては、おすすめウォーキングコースや、ちょっと休憩にいい公園、歩くのに安全な道など、「校区内でお年寄りに優しい場所」などを見つけ、GPS携帯で撮影する。学校に帰ってから、GISを活用してまとめ、お年寄りの方たちにわかりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えさせる。また、自分たちの祖父母にも話す機会を持たせたいと考えている。



【図6 GIS表示画面】

(3) 指導計画(全12時間) 実施時期 1月20日～2月10日

時	学 習 活 動	留 意 点・準 備 物・評 価
1	・老人福祉センターの方たちに喜んでもらえるマップはどのようなものがよいか考え、調べる項目を決める。	・相手意識を常に持たせる。 ・指導前に校区の地図を描かせておく。(Image Map Pre Test)
2~3	・老人福祉センターの方や、校区に住んでいるお年寄りにインタビューして、「おすすめの場所」、「危険なところ」などを考える。	・校区にある大学の学生へ協力を依頼し、事前に打ち合わせを行う。 ・GPS携帯電話の準備設定。
4~5	・校区へ出て、調査活動をする。	・GPS携帯では撮影だけを行い、気づいたことはワークシートに記入させる。
6	・調査したデータを教師とともに確認し修正する。	・ワークシートをもとに自分のデータを修正させる。
7~8	・お年寄りにわかりやすいマップにまとめ発表の練習をする。	・聞き手(お年寄り)を十分に意識させながら練習させる。
9~10	・中間発表をしてアドバイスをもらう。 ・マップの修正をする。	・アドバイスができるようにしっかり聞くようにさせる。 ・アドバイスをもとにして、よりわかりやすくなるように修正させる。
11~12	・老人福祉センターで交流会を行う。 ・感想をもらう。	・発表用のコンピュータやプロジェクタなどを点検しておく。 ・再度、校区地図を描かせ、その広がりや深化を評価する。(Image Map Post Test)

(4) 留意事項

- ・第3学年という発達段階にあった表現をさせたい。

(5) 具体的な実践の様子

【第1時】老人福祉センターの方に喜んでもらえるマップについて考える。

- ・学習の流れを理解する。(最後に老人福祉センターで発表することを知らせる。)
- ・タイトルを決める「けんこう・さんぽ・べんりマップを作ろう」
- ・マップでどのようなことを伝えたらよいか、項目を考える。

安全な道(段差がない, 車あまり通らない, 散歩しやすいなど)

自然がいっぱいある(緑がある, 景色がよい, 鳥が飛んでくるなど)

おすすめ(休憩できるベンチがある, 自分たちも好きな場所など)

危険な場所

**【第2・3時】お年寄りにインタビューして、「おすすめの場所」を探す。**

- ・では、老人福祉センターにウォーキングされているコースを聞きに行き、「いつでも行ってもらえる場所」を探そうという意見が出た。

**【第4・5時】実際に校区へ出て、調査活動をする。**

- ・3年生なので、GPS携帯では写真を撮るだけとし、気づいたことや、写真の補足になりそうな事項については、ワークシートに記入させる。
- ・安全面や、GPS携帯の使い方に関して3年生だけでは不安を持つと思われるので、校区にある大学の学生にも協力を依頼し、一緒に活動してアドバイスをしてもらう。



【図7 子どもの調査活動】

**【第6時】調査したデータを教師とともに確認し、修正する。**

- ・調査してきた地図は、同じ形と色でポイントがついているので、赤いポイントをクリックして写真を表示させ、項目別にマークを修正する。
- ・ワークシートに記入した気づいたこと等をポイントに付け加える。



【図8 GIS画面を利用した発表】



【図9 写真一覧】

**【第7・8時】お年寄りにわかりやすいマップにまとめ、発表の練習をする。**

- ・老人福祉センターの位置や、学校の位置をはっきりわかるようにし、「わかりやすく」仕上げることを大事にさせる。

**【第9・10時】中間発表をしてアドバイスをもらい、マップの修正をする。**

- ・学年の他のチームのみんなに発表を聞いてもらい、アドバイスをもらう。
- ・アドバイスをもとに、よりわかりやすいマップになるように工夫する。

**【第11・12時】老人福祉センターで交流会をもち、感想をもらう。**

- ・興味を持って聞いて頂けるよう工夫させる。

授業実践終了後に、線結び法及びSD法を用いて活動の評価を行う。他地域の実践も含めて「GPS携帯電話と情報追記型GISによる共同学習」(<http://www.ptolemaios.jp>)のサイトで詳細な報告を公開する予定である。

## 6 「ポスト2005年」に向けて

平成17年度を目前に控え、IT環境は徐々に整い始めている。本市においても学校情報通信ネットワークシステムである「AMA-NET」の回線をFTTH(Fiber To The Home)つまり、光ケーブル化し、インターネットをより活用しやすいようにブロードバンド化していく作業を行っているところである。

インフラの整備とともに重要な課題は、コンピュータを使って指導できる教員を増やしていくことである。教員がそれぞれ「これなら使ってみたい」と思うようなデジタルコンテンツをライブラリー化しておくことや、より実践的な教員研修を行い、研修効果の定着を図る必要がある。

さらに、ネットワークの安全性やコンピュータ、インターネット利用の子どもへの影響について不安が高まっている今日、子ども達への情報モラルの指導に関して、まだまだ大幅な改善の余地があると言えるだろう。

また、「ポスト2005年」の流れの一つとして、地上デジタルテレビ放送がの利用を考えなければならない。平成23年(2011年)には、現在のアナログテレビ放送が終了し、すべてのテレビ放送が地上デジタルテレビ放送に切り替わる。そのため、現在普通教室に設置されているテレビを地上デジタルテレビ放送対応のものに切り替えていく必要がある。その際には、コンピュータとの接続を考慮した機種にすることによって、地上デジタルテレビ放送とコンピュータ画像とのメディアミックスが可能となる。それに伴って、デジタルコンテンツの内容もさらに視覚的・音響的に高度なものを作成することが可能となり、われわれのめざす「わかりやすい授業」のさらなる進歩が期待される。

そのためにも、われわれ自身が情報機器に振り回されることがなく、しっかりとした指導観に根ざした指導及び評価ができるよう、教材研究を続けていかなければならない。

注1 GPS(Global Positioning System)とは、地球の周回軌道を回る24個の衛星から発信される情報を利用して、受信者とGPSの衛星の位置関係を測定し、現在地の緯度・経度を計算するシステムであり、GPS携帯電話とは、GPS衛星からの電波を利用して位置情報サービスが可能な携帯電話である。( <http://www.iodata.jp/products/gps/pcgps/gps.htm> )より

注2 GISとは、地理情報システム(Geographic Information Systems)の略称で、文字や数字、画像などを地図と結びつけて、コンピュータ上に再現し、位置や場所からさまざまな情報を統合したり、分析したり、分かりやすく地図表現したりすることができる仕組みであり、行政や市民生活やビジネスの現場で幅広く利用することが可能である。

( <http://www.gis.jacic.or.jp/gis/gakushu/whatisgis/whatisgis1.html> )より

### 参考文献

- ・「小学校学習指導要領」(平成10年) 文部科学省
- ・情報教育の実践と学校の情報化 新「情報教育に関する手引」(平成14年) 文部科学省
- ・学習情報研究(平成16年1月号) 学習ソフトウェア情報教育センター
- ・情報知識社会における学校教育の在り方(平成16年12月)  
ポスト2005年に向けた「教育の情報化」の課題と提言 (社)日本教育工学会

平成16年度 尼崎市立教育総合センター

**顧問講師**

大阪大学名誉教授・関西大学特別顧問	水越 敏行
京都大学大学院	教授 田中 耕治

**専任講師**

京都ノートルダム女子大学	教授 服部 昭郎
目白大学	教授 原 克彦